



MF文庫  
J  
08-01



機巧少女は傷つかない 1

海冬レイジ 著



9784840130851



1920193005806

ISBN978-4-8401-3085-1  
C0193 ¥580E

定価：本体580円（税別）  
メディアファクトリー



## 機巧少女は傷つかない 1

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。その最高学府である英国ヴァルブルギス王立機巧学院では、人形使いのトップ「魔王」を決める戦い、通称「夜会」が開催される。そして今、二つの影が学院の門をくぐった。日本からの留学生・雷真と、そのパートナーたる少女型人形の夜々である。「夜会」参加資格を得るため、雷真は参加予定者との決闘によりその資格を奪おうとする。標的は次期魔王有力候補で、暴竜の異名をもつ美少女・シャル！ しかし雷真が彼女に挑んだところ、思わぬ邪魔が入り……？ シンフォニック学園バトルアクション！

雷真のためなら、  
たとえ火の中、お布団の中  
少女と魔術が共鳴するとき、  
「夜会」の幕が上がる——！！

とくP×原田ひとみ  
イメージCD発売決定！  
詳しくは裏面をチェック！

MF文庫  
J

580

サウンドプロデュース ポーカル  
とくP×原田ひとみ  
（[SPiCa]、[blue bird]、へつとはん、キーコ） （[バカとテストと召喚獣]、呪詛珠希、夜、[ささめこと]、道賀陽祐、夜はの）  
イメージCD発売決定！！  
コミックマーケット10にて先行発売！  
詳細はこちらをチェック！→ [www.machine-doll.com](http://www.machine-doll.com)

アニメーション  
<http://animelo.jp/>  
所蔵からアニメメロで検索！



特設サイトにて無料待受画像を配信中！  
<http://medias.machinedoll.jp/>



対象：J-mode、Uweb、Yahoo!ケータイ、おこしめしにはおなじみです。各サイトの検索欄で「夜々」を検索し、検索結果が表示されます。詳しくは裏面に記載されています。





1 機巧少女は傷つかない

Facing  
"Cannibal  
Candy"

傷つかない

Artistic Doll

海冬レイジ 著

機巧少女は傷つかない 1

海冬レイジ

ISBN 978-4-8401-3085-1  
C0193 ¥580E



9784840130851



1920193005806

ISBN978-4-8401-3085-1  
C0193 ¥580E

定価：本体580円（税別）  
メディアファクトリー

WORLD  
VI  
PASTOR

## 機巧少女は傷つかない 1

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。その最高学府である英国ヴァルブルギス王立機巧学院では、人形使いのトップ「魔王」を決める戦い、通称「夜会」が開催される。そして今、二つの影が学院の門をくぐった。日本からの留学生・雷真と、そのパートナーたる少女型人形の夜々である。「夜会」参加資格を得るため、雷真は参加予定者との決闘によりその資格を奪おうとする。標的は次期魔王有力候補で、暴竜の異名をもつ美少女・シャル！ しかし雷真が彼女に挑んだところ、思わぬ邪魔が入り……？ シンフォニック学園バトルアクション！

WORLD  
VI  
PASTOR

580

## 1 海冬レイジの本

機巧少女は傷つかない Facing "Cannibal Candy"

【イラスト るろお】

【著者】



海冬レイジ

かいとう・れいじ

トイとかプラモとか大好き！

いつも〈お手軽工作＆簡単フィニッシュ〉で遊んでいます。

小説は〈フルスクラッチ＆全塗装〉なので大変です……。

（※スクラッチ＝パテやプラ板で自作すること！）

いまだに新人気分が抜けないキャリア5年目の職業作家。

札幌市在住。1月8日生まれ、A型。ほかに『幻想陣グリモアリス』シリーズ（富士見ファンタジア文庫）など。

【イラストレーター】

るろお

ゲーム制作の傍ら、イラストレーターとしても活動中。

海老フライには醤油派。



1 機巧少女は傷つかない

Facing  
"Cannibal  
Candy"

海冬レイジ 著

くらぶお

「下駄じゃ戦いにくいし、  
鼻緒が切れたら危ないからな。  
しばらくはこいつを覚え」



まさに疾風  
夜々は一足飛びに  
間合いを詰め、  
敵の自動人形に  
襲いかかった。





Shojo  
Karyukai  
花柳斎硝子

「ねえ、坊や。  
私のものになりなさい」



Charlotte Belen  
シャルロット・ブリュー

「バカなの？ それとも  
死にたいの？」

Sigmond  
シグモンド

「私は小鳥ではないぞ、  
シャル」

「身の程がわかったかね、  
サムライボーイ」

Kimberley  
キンバリー



「行けるか、夜々」

Raishin  
Ahnane  
赤羽雷真

「雷真が望むなら、  
地の果てまでも」

Elana  
夜々

# Unbreakable Machine-Doll

## contents

- Prologue 極東の人形使い#1 .....p11
- Chapter 1 竜を狩る者 .....p24
- Chapter 2 遭遇戦は一瞬で .....p58
- Chapter 3 混沌に誘う、甘言 .....p88
- Chapter 4 虚構の晚餐 .....p120
- Chapter 5 つまり、始めの、始めから .....p156
- Chapter 6 本性 .....p189
- Chapter 7 永久に飢える獣 .....p218
- Epilogue 極東の人形使い#2 .....p255



マシンドール  
**機巧少女は傷つかない1**  
Facing "Cannibal Candy"

海冬レイジ

MF文庫 

口絵・本文イラスト●るろお

編集●庄司智



# Prologue

## 極東の人形使い # 1



「夜々<sup>やや</sup>かわいいよ夜々。夜々かわいいよ。世界一かわいいよ」

少女はそつと両手を合わせ、祈るように言葉をつむぐ。

やわらかな午後の日差しの中、蒸気<sup>じょうき</sup>の鼓動<sup>こどう</sup>を響かせて、レールの上をひた走る列車——  
ロンドン発リヴァプール行。その二等客車に、風変わりなふたり連れがいた。

東洋人<sup>とうようじん</sup>と思しき、少年と少女。

風変わりなのは容貌<sup>ようぼう</sup>だけではない。行動も不可解で、少女は向かいの座席に身を乗り出し、少年に覆いかぶさるようにして、おかしな言葉をささやいていた。

「夜々かわいいよ夜々あいしてる夜々みりよくてき夜々は俺<sup>おれ</sup>の嫁——」

そのささやきが不意に途切れる。

少年が半眼<sup>はんがん</sup>になって、刺すような視線を向けていた。

「……起きていたのですか、雷真<sup>らいしん</sup>」

「ひとの耳元で何をやってる」

「雷真<sup>らいしん</sup>が夜々のことを好きになるように、おまじないをしていました」

「そんな可愛いもんじゃなかったよな？ 精神を汚染<sup>おせん</sup>しようとしてたよな？」

という指摘は完全にスルーして、少女は澄まし顔で車窓を示した。

「見てください雷真。もう《機巧都市》の中ですよ」

「やれやれ、やつとこ到着か。倫敦から半日——さすがに尻が痛いな」

「『西欧一の学校』は、もうすぐそこです」

にこにこ嬉しそうに、少女は少年にくつついた。

「その学校は全寮制なんですよね？」

「そうだ」

「ひと晩中、ふたりつきりで過ごすんですよね？」

「そうだが……」

「眠れぬ夜が続きそうですね♡」

「いや俺は眠るからな？ 妙な真似したら追い出すからな？」

「……………っ!？」

「何だその裏切られたような顔は。言っておくが、物見遊山じゃないんだぞ」

少女の顔が曇り、黒い瞳が切なげに揺れた。

「…………この街で、魔王の夜会が開かれるんですね」

きりり、と表情を引き締める。

「魔術師たちが覇を競う、血塗られた闘争の宴…………」



「ああ。アテにしてるぜ、夜々」

「はい。雷真のためなら、たとえ火の中、お布団の中」

「布団の中には入ってくるな」

「それは、いわゆる、青か……」

「おまえ今何て言った？ 清純そんなツラして何て言った？」

「雷真が望むなら、夜々は誠心誠意、尽くします。たとえ敷の中、衆人環視の中」

「その覚悟はありがたいが、おまえ絶対勘違いしてるからな？ 俺が尽くして欲しいのはそれじゃないからな？」

などと、じゃれ合うふたりの横を、近代的な都市の風景が流れていく。

車窓越しに見えるのは、コンクリートの建物が並ぶ大通り。舗装された道路を米国渡りのT型フォードが走り、街角のスタンドでは機械人形がコーヒーを売る。人形のボディはブリキ製で、ぎこちない動きはどことなくユーモラスだ。

機巧都市リヴァプール。

マンチェスター市が吐き出す大量の木綿を、世界に送り出すための前線基地。大英帝国が世界に誇る貿易港にして、今やケンブリッジに次ぐ学術都市だ。

やがて列車は、鉄のドームが美しい、モダンな駅舎に入っていく——  
そのまま、かなりのスピードで通り過ぎた。

「どうして止まらないんだ？」「終点だぞ！」

乗客がざわめき、疑問と不満を口にする。

そこへ、ひどく切迫した様子で、車掌が駆け込んできた。

「皆さま、どうか、どうか落ち着いて聞いてください」

かく言う本人が動揺している。車掌は震える声で、続きを言った。

「ブレーキがききません！」

水を打ったような静寂。

一瞬後、車内は恐慌に陥った。

「落ち着いてください！ 大丈夫、列車は自然に止まります！」

そんな声は届かない。悲鳴と怒号にかき消されてしまう。

そもそも、列車は減速する素振りを見せない。おそらく、土地が傾斜しているのだろう。

下り坂であれば、自然に止まる道理はない。

大惨事の予感に、比喩ではなく列車が震えた、そのとき――

「全員、座席につかまれ！」

乗客の視線が一斉に注がれる。

叫んだのは、先ほど少女とじゃれ合っていた、あの少年だった。

小柄ながら、細く引き締まった体つき。眼光は猛禽のように鋭い。

そのとなり、控えて立つのは着物姿の少女。着物の丈はずいぶんと短く、ひらひらの布地からふともがのぞいている。むき出しの肩は雪のように白く、つややか。少女の目鼻立ちはひかえめで、一見、地味な印象——その実、極めて整っていて、まるで精緻な美術品のようだ。腰まで届く黒髪には濡れたような光沢があり、肌は白桃をむいたようにみずみずしい。少年より頭ひとつ小さく、文字通り人形のような少女だった。

ただならぬ存在感。ふたりにのまれ、乗客たちは静まり返った。

「車掌、後ろの車両にも伝える。死ぬ気で座席にしがみつけ、ってな」

命令形で言う。車掌はこくこくとうなずき、となりの車両へ走っていった。それを見送り、車内を泳いだ少年の視線が、ふと、となりの座席に留まる。

幼い妹が、姉に抱きついて、縮こまっている。

怯えた瞳。小さな体は、脅かされたりスのようにかよわい。

少年は不器用な笑みを見せ、そっと、小さな頭をなでてやった。

「心配するな。きつと助かる」

少年は上着を脱ぎ捨てると、身軽に車窓をくぐり抜け、列車の屋根によじ登った。そのあとを、着物の少女が軽々とついていく。

ふたりは軽業師のような身のこなしで、先頭の機関車へと走った。

「あれを見てください雷真！」

「カーブ……だな」

街中だけに、アールがきつい。列車があそこまで行けば、確実に脱線だ！

「あの手前で止めるぞ。森閑四八衝」

「はいー」

機関車の鼻っ面を蹴って、少女が進行方向に跳躍する。反動ですさまじい制動がかかり、列車は急減速した。

少女は弾丸のように宙を飛び、かなり進んで着地した。しかし、列車は止まらない。見る間に距離を詰め、少女を轢殺しようと突き進む！

道行く人々が異変に気付き、悲鳴をあげた。

少年はあわてない。まずは機関車の突起に体を固定し、衝撃に備えた。

それから、少女にてのひらを向けた。刹那、青白い炎（のような何か）がほとばしり、それはあたかも鎖のように、少女と少年を結びつけた。

少女はもう目前だ。数百トンの質量が少女にのしかかり――

そして、激突。

鉄の車体がへこむほどの衝撃。後続の客車が次々に玉突きを起こし、浮き上がる。少女の下駄が地面をえぐり、枕木をへし折り、大地にめり込んだ。そのまま、バラストを盛大にまき上げながら、少女は五十メートルも後退した。

だが、折れない。

少女の体はすさまじい剛性を發揮して、暴走列車を完全に受け止めていた。

玉突き状態の客車は、それぞれに傾いたり、シャフトが折れたり、脱線したりした……ものの、逆に言えばそのくらいで、いずれも横転せずに済んだ。さすがに怪我人ゼロとはいくまいが、事故の程度は最小限だ。

列車が完全に止まり、動かないのを確認してから、少年は線路に飛び降りた。

「偉いぞ、夜々。よく加減したな」

誉められて、少女は嬉しそうにする。何かを期待するように、頭を出してもじもじしたが、少年はなでてやるでもなく、くるりとさびすを返した。

そのまま、スタスタと歩き出す。仕方なく、少女も少年のあとを追った。

ふたりが客車に戻ってみると、車内はひどい有様だった。

荷物が散乱し、怪我人がうめいている。だが、重傷者はいないようだ。少年は一瞥をくれただけで、何の感慨もなさそうに、自分のトランクを探し始めた。

「——あの！」

トランクを探し当てたところで、背後から声がかかった。

先ほどの姉妹だ。姉は遠慮がちに少年を見つめ、妹はおずおずと、しかしはにかんだ笑みを浮かべて、少年の上着を差し出していた。

少年は上着を受け取りながら、姉に向かつて、そっけなく言った。

「ケガはないか？」

「はい。あの、貴方は……魔法使い？」

「いや、人形使いさ」

「じゃあ、その子は、自動人形……!?」

目を丸くして、となりの少女（若干いじけている）を凝視する。

驚くのも無理はない。少女の肌には血が通い、ほんのり赤みが差している。心臓は鼓動し、呼吸もしている。どこからどう見ても、生身の人間だった。

これほど完全な自動人形には、機巧都市と呼ばれるこの街であつても、そうそうお目にかかれるものではない。一般人にとって自動人形とは、歯車とシリンドラーがむき出しの、安価なブリキ人形を言うのだ。

少女型の自動人形は、あたかも生身の少女のように、やわらかく微笑んだ。

「はい、夜々は雷真の『お人形』です。——ベッドの中でも」

最後のひと言が余計だった。

ひそひそと乗客たちがささやき合う。姉も見る見る赤くなり、

「いやああああ変態！」

「ばちーん、と痛烈な平手が、少年の頬を打った。

幼い妹を抱え上げ、一目散に逃げていく。

「夜々……」

「はい、雷真」

「俺の胸中に渦巻いている、このどす黒い感情は一体何だ？」

「……劣情？」

「怒りだー 何でおまえは毎度毎度、ひとさまの誤解を招くようなこと言うんだよー」

「だって……っ！ あの子が、いやらしい目で雷真を見るから……っ！」

「イヤな目でひとを見てるのはおまえだ！」

叱られて、しゅんとなる。少女は着物のすそをぎゅっと握り、足もとに視線を落とした。細い眉が下がり、目尻にはうっすら涙がにじんでいる。

その姿は、ひどくいたいけに見えた。

根負けした様子で、少年は「はあ……」とため息をつく。

「もういいよ。行くぜ。警官がきたら面倒だ」

「……はい！」

トランクを担ぎ上げ、歩き出す。そのあとを、ころん、ころんと下駄を鳴らして、少女がびったりついていく。

客車を降り、街の雑踏に消えていくふたりを、乗客たちは呆然と見送った。

機巧文明華やかなりし二十世紀初頭。科学技術のめざましい発展とともに、人類は高度な魔術体系をも築き上げていた。

機巧魔術——魔術の概念を一変させた近代的詠唱法。

魔術回路を内蔵する自動人形と、それを操る人形使いのコンビネーションにより、従来では考えられないほど迅速に、精確に、強力な魔術を行使できるというもの。

この技法の発見によって、魔術師はややこしい魔法陣からも、長ったらしい呪文からも解放され、極めてインスタントに魔術を使うことができるようになったのだ。

しかし、それは同時に、魔術の軍事転用をもたらした。

トラファルガーでの勝利も、ワーターローでの勝利も、英国が誇る〈機巧師団〉の存在なくして語れない。

もちろん、それは英国に限った話ではない。世界が破滅的な軍拡に突き進むこの時代、優秀な人形使いを発掘しようと、列強軍部は血眼になっている。

教育が国を挙げての事業になったのは、つまり、歴史の必然だったのだ。

先の鉄道事故から数時間後、リヴァプール市の中心部にて。

巨大な門を前にして、奇妙なふたり連れが立っていた。

東洋人の少年と自動人形の少女。先ほど列車を受け止めた、あのふたりだ。

「ヴァルブルギス王立機巧学院」

少年がプレートの文字を読み上げ、皮肉めいた笑みを頬に刻む。

「音に聞こえし魔術世界の最高学府。まるで要塞——いや、監獄だな」

その言葉通りの光景が、彼らの眼前に広がっていた。

正面にそびえるのは、バッキンガム宮殿を思わせる、威風堂々たる大講堂。レンガ積み  
の塼はゆうに五メートルはあり、石造りのゲートには銃眼さえ備えつけられている。銃眼  
は外敵に備えるためではなく、脱走者を撃ち殺すためにあるらしい。その証拠に、門番は  
市街ではなく、敷地内に目を光らせていた。

ひかえめに見ても威圧的なたたずまい。軍司令部もかくや、というコワモテだ。  
だが、自動人形の少女はたじろぎもせず、学生寮を指差して、  
「見てください雷真。ふたりの愛の巣です♡」

などと、はしゃいでいた。

それから、少年の不自然な沈黙に気付き、小首を傾げた。

「……どうしたんですか、雷真？ 浮かない顔です」

「その門をくぐったが最後、しばらく娑婆には戻れないぜ？」

少年は覚悟を確かめるように、じっと少女の瞳を見つめた。

「この国の法律で決まってることだ。学院生が所有する自動人形オートマトンは、卒業まで、市街地に出すことができない」

少女は少しもためらわず、胸に手を当て、宣誓のように言った。

「雷真のいるところが、夜々ややのいるべきところですよ。戦場であっても、牢獄ろうごくであっても、それは変わりません」

「俺おれになつくな。俺はおまえを復讐ふくしゅうの道具にしようつてんだ」

「自分を責めないでください。夜々は硝子しろうずが作ったからくり人形、生まれたときから道具です。そして道具は、目的があつて初めて生きるもの」

咲きこぼれる花のように、ふんわりと微笑はほえむ。

「おともします雷真。お布団ふとんの中まで」

「それは断る。だが——おまえの覚悟は、上等だ」

ふっと少年は頬をゆるめ、力強く歩き出した。

この日、ひとりの少年が、至高の自動人形オートマトンとともに、学院の門をくぐった。  
その行く手には、闘争うたげの宴うたげが待ち受けている——



## Chapter 1 竜を狩る者

### 1



舗装された道路がひとつ、学院の敷地を南北に走っている。

メインストリートと呼ばれる大通り。そこは各講堂と八棟の寮、食堂を結ぶ動脈で、昼休みともなれば、学生たちでごった返す。

よく晴れた月曜。この日の昼休みも、やはり学生たちで賑わっていた。

ふと、その賑わいが唐突にしほむ。

怯えたような緊張が走り、学生たちが次々に振り返った。

彼らの後ろから、見事な金髪をなびかせて、ひとりの少女が近付いてくる。

端正な顔立ち。均整の取れたプロポーション。きらきらと、空気が光って見えるほどの美少女だったが、不機嫌そうな仏頂面が、妖精のごとき美貌を台無しにしている。まとうオーラは敵対的で、まるで獐猛な獣のようだ。

彼女の帽子には、猫くらいの大きさの、小さなドラゴンが乗っていた。

ドラゴン、としか言いようがない。頭部はワニやトカゲに似ているが、気高く、上品な面構え。ひたいに二本の角が生え、体形は猫に似てしなやか。畳んだ翼は四枚あり、鳥と言うより蝶に近い。全身、銅色のうろこに覆われている。

「まるでモーセのエジプト脱出だな」

少女の頭の上でドラゴンが言った。意外と低い声だ。

ドラゴンの言葉通り、少女の進路上では、見る見る人波が割れていた。

「皆、君を恐れている」

「ふん。いつものことじゃない」

「いつものこと、というのが問題なのだ。〈魔術喰い〉の正体が君だと言っても、こうま

で恐れられることはあるまいよ」

そのとき、何かにつまずいた様子で、男子学生が転がり出てきた。

男子学生は少女に気付くと、ぶるぶると震え出した。

「あああすみませんっ！ 殺さないで！」

「……消えなさい」

「はいいいいい！」

あわてて逃げていく。熊に遭ったような逃げ方だ。少女はムスツとした。

「確かに理不尽だわ。どうしてあんなに怖がるのかしら」

「怖いとも。君は入学早々、上級生五人を病院送りにするような女だ」

「あれはただ、不埒者に鉄槌をくだしただけよ。サークルの勧誘だか何だか知らないけど、ベタベタ触ってくるから、身の危険を感じて、それで」

「ルームメイトを窓から突き落とそうとしたこともあったな」

「不可抗力よ。あの子がふざけてバスルームに侵入してきたから、バット——じゃない、その、乙女の秘密を守るために」

「蛙に触りたくないという理由で、解剖学の実習室を破壊したのも不可抗力か？ 貴重な標本を失って、教授は泣いていたが」

「……………」

「スズメバチにパニックを起こし、庭園ごと焼き払ったことは？」

「うるさいっ。今すぐ黙らないと、お昼のチキンをひよこ豆に格下げするわよ」

「私は小鳥ではないぞ、シャル。豆では身が持たない」

金髪の少女——シャルはいら立ちを隠さず、大またで歩き出した。

だが、ドラゴンはいきなりめず、

「友人を作つてはどうだ？ 周囲の反応も変わると思うが」

「学院生はみんな敵。魔王の座を争う邪魔者よ。馴れ合うつもりはないわ」

「そんな態度では孤立する一方だ。恋人もできまい。一生、非モテだぞ？」

「誰が非モテなのよ。こんな可愛い子、世の男どもが放っておくわけじゃない。今にうようよ寄ってくるわよ。ラフレシアに群がる銀蠅のごとくね」

「ラフレシアとは言い得て妙——鼻つまみ者と言う意味で——だが、男が群がるかどうかは疑問だな。何を好き好んで、君のようなじゃじゃ馬——いや、訂正しよう。物好きな蠅はいたようだ。コブつきだがね」

すつと前足を上げ、前方を示す。シャルがそちらを見ると、ひらけた通りの真ん中に、おかしなふたり連れが立っていた。

ひとりとは少年。着崩した制服の上から、軍用品っぽいハーネスを吊っている。ハーネスはホルスター代わりのようで、ナイフやライトに加え、呪符や魔石など、魔術用具を挿している。眼光鋭く、体のラインは鋭角的だ。

もうひとりとは少女。こちらは制服を着ていない。見事な衣装はキモノだろう。ウキヨエ、とかいう、変な絵画で見たことがある。背は低く、顔も小さく、まるで人形のような——否、十中八九、自動人形だ。

どちらも、見たことがない顔だった。

人形の精巧さに目を奪われていると、少年はふてぶてしく話しかけてきた。

「シャルロット・ブリュー嬢とお見受けする」

芝居がかった台詞を吐き、人を食ったような笑顔を見せる。美男……かどうかは微妙だ

が、すつきりとした顔立ちには、オリエンタルな魅力があった。

「学院の二回生にして夜会のトップランカー（十三人）のひとり。倫敦のブックメーカーがオッズ三倍をつけた、次期魔王の有力候補」

すらすらとシャルのプロフィールを語る。

「登録コードは（君臨せし暴虐）。まるで恐竜だな」

からかうような口ぶり。しかし眼光だけは鋭く、少年はシャルの手——正確には手袋を示した。パールホワイトに輝くシルクの上に、金糸で「Tyrant Rex」と刺繍されている。それは、夜会の参加者にのみ授与される、特別な手袋だった。

誰よ、この無礼な男は。

シャルはムツとして、少年をにらみつけた。

「そこまで知ってて、どういうつもり？ 私に何か用？」

「おまえの参加資格を譲ってもらう」

ぼかん、としてしまう。何を言われたのか、一瞬、わからなかった。

「……それは挑戦？」

「いや。予告だ」

シャルは深々とため息をついた。

「バカなの？ それとも——死にたいの？」

ひやり、と凍てつく殺気を叩きつける。

巻き添えを恐れて、学生たちが後退する。

かくして、あまりにも唐突に、昼休みのキャンパスは戦場と化した。

## 2

その二日前のこと。

夕刻、中央講堂の薄暗い廊下で、雷真はわなわなと震えていた。

「一二三六人中、一二三五位……だと？」

握りしめた紙切れは、いわゆる成績表というやつだ。

学院に到着して早々、特別に学力試験が行われたのだ。試験官の反応は試験の最中から冷やかだったのが、実際に数字で見せられると、かなり堪える。

「そんなに落ち込まないでください」

にこ、と優しく微笑んで、夜々が慰めを言った。

「雷真が血を吐くような修行を積んできたこと、夜々は知っています。筆記や口頭試験はともかく、実戦なら負けません。そうでしょう？」

だが、雷真はますます落ち込み、がつくりとうなだれた。

「……悪い、夜々」

「どうして謝るのですか？」

「おまえは花柳齋ブランドの最高級人形、軍艦一隻と値段が釣り合うつてシロモノだ。そのおまえの使い手が、こんなヘタレな成績じゃ、俺は情けなくて——」

「そんなー 夜々は雷真と一緒にいられるだけで……っ」

「硝子さんに合わせる顔がないー」

びきつ、と妙な音を立てて、夜々が固まる。

「……アレ、夜々？ 何でそんな鬼の形相——ちょ、まっ、話せばわかる！」

「硝子、硝子、硝子……いつも硝子のことばかり……っ！」

夜々は泣きべそをかいて、雷真の首を絞めた。

「身の程がわかったかね、サムライボーイ」

突然、横から誰かが言う。夜々が驚き、雷真を取り落とした。

咳き込みながら見上げると、雷真の前に長身の美女が立っていた。

アップに留めた髪は赤く、伶俐な知性を宿す瞳は青い。教官用の制服をまとい、胸元に眼鏡を引っかけている。

その冷たい美貌には見覚えがある。試験官を務めていた女だ。

「機巧物理学のキンバリー教授だ。お互いに残念だが、君の担任になった」

「それはご丁寧にどうも。よろしく頼むよ、キンバリー先生」

一応、挨拶する。夜々もあわててかしこまり、腰を折ってお辞儀をした。

キンバリーはにこりともしせず、

「極東きょくとうの下田舎から長旅ご苦労だったが、その数字が現実だ。卒業したければ、死ぬ気で単位を取るんだな。特に、私の講義がオススメだ。通年で六単位を進呈するぞ。もつとも、東洋人に私の講義が理解できるなら、だがね」

「その発言は人種差別じゃないのか？」

「私は博愛主義者だよ。白人、黒人、インド人にユダヤ人——どれも平等に興味がない。私が評価するのは知性だけだ。バカは嫌いだ。それだけだ」

「博愛主義が聞いてあきれんぜ」

「君の所属はトータス寮だ。おちこぼれが集まる最低な場所だよ。私はこう見えて、親切で面倒見のいい、気配りのできる女でね、寮監りょうかんに話はつけてある。勝手に行つて、自分で寝床を確保しろ。——話は以上だ」

「待ってくれ、キンバリー先生。早速、ご教授願いたいことがあるんだが」

「言ってみろ」

「夜会に出るには、どうすりゃいいんだ？」

立ち去ろうとしていたキンバリーが、思わずといったふうには足を止める。

「知らないわけではないだろう？ 夜会に参加できるのは成績上位の者、それもたったの百名限り。今の君では、逆立ちしたって無理な話だ」

「おまけに夜会までは日がなく、定期考査はあと一回——実に絶望的だよな？」

雷真らいしんは自虐じぎやく的に笑い、押揶おしやするように言った。

じろり、とキンバリーの眼めがこちらを向く。

「……夜会はお上品な舞踏会とは違う。機巧魔術アキヤクマジュでどつき合いをするんだ。最後のひとりになるまでな。生半可なまはんかな腕では命を落とすぞ」

「なら、最後のひとりになればいいんだろう？」

キンバリーは驚いたようだ。切れ長の眼が、雷真を値踏みするように上下する。

「なぜ、夜会にこだわる？ 卒業資格だけでも、出世の材料には十分だぞ？」

「決まってる。魔王ワイスマンになるためさ」

「望みは何だ？ 富か？ 名声か？ 知識か？ 力か？」

「そんな質問に意味はない。魔王ワイスマンになれば、全部手に入る」

「確かにな。魔王は国際魔術憲章ならびに魔術師倫理規定の埒外らぐわい——要するに、『何でもアリ』だ。あらゆる禁書の閲覧、禁術の使用を許され、不死の研究も遺伝子改造も思いのまま。どこの国の軍隊も、将官待遇で迎え入れるだろう」

「まったく、景気のいい話だぜ」

「……君の目的は富ではないな。まして名声でもない。知識を求めるほど、賢くもない。一体、何を求めている？」

雷真は答えなかった。ただ、目をそらさずに、キンバリーを見つめ返した。

その沈黙をどう受け止めたものか。ややあって、

「……これは一般論だがな。夜会の目的はただひとつ、同時代でもっとも優秀な人形使いを選び出すことだ。徹頭徹尾、実力主義の世界だよ。だから万一、参加資格を持つ者が、持たない者に、機巧戦闘で敗れるようなことがあれば」

秘密をほのめかすように、キンバリーは声を低くして言った。

「夜会執行部も、選考をやり直す必要があるだろうな」

「……ご教授、いたみいるぜ」

「せいぜい頑張りたまえ。栄えある（下から二番目）くん」

皮肉な笑みを残し、キンバリーは廊下の向こうに消えて行った。

「……何だか、少し怖い先生ですね」

遠慮がちに、夜々が感想を言う。

「ああ。だが、悪い女じゃなさそうだ」

人を見下したようなものいいをするが——公正だ。

口では雷真をバカにしておきながら、頭ごなしに否定はしない。夜会参加の話にしても、

本当に不可能だと断じていれば、『假定』の話をする必要はない。

「むしろ、イイ女かもな」

「雷真……やっぱり年上が好き……っ！」

涙ぐむ夜々は無視して、キンバリーの言葉を反すうする。

下から二番目。雷真が百位以内に潜り込むためには、世界各地から集められた秀才千人以上を追い越す——もしくは排除する必要がある。

（自慢じゃないが、俺の知識は素人同然だ。人形についても、魔術についても）

学業で巻き返せる可能性は、万にひとつもない。

だとしたら。

黙り込む雷真を心配したのか、夜々が顔を寄せてくる。

「硝子に相談してみましようか？」

「軍の判断を仰ぐまでもない。選択肢はたったひとつだ」

苦笑する。我ながら、トチ狂ったやり方だ。

「夜会には、出る。それが、あいつを殺す一番の近道だ」

「でも——何か考えが？」

「キンバリー先生が言ってたろ。参加資格が欲しけりや、桃太郎になるしかない」

「きびだんごと交換するのですか？」

かぶりを振る。きりつと唇を引き結び、雷真は方針を告げた。  
「鬼どもから強奪するのさ」

## 3

「おい、きてみろ！ 留学生が〈暴竜〉<sup>Tレックス</sup>に挑戦するらしいぞ！」

「何だつて？ 産地はどこだ？ どこ産のバカだ？」

「ニッポンだ。ニッポン産のバカだ」

「ニッポン？ イザナギ流のプリンセスか？」

「いや、二日前に着いたっていう、新入りだ」

「新入りが何で〈暴竜〉<sup>Tレックス</sup>とやるんだ。ケンカでも売られたのか？」

「売ったのは新入りの方さ。大方、参加資格を分捕るつもりだろ」

「だからって、よりにもよって〈暴竜〉<sup>Tレックス</sup>とは……そいつ、自殺志願者だな」

「そうでもないぜ。見ろよ、自信たっぷりだ」

「そんなに強いのか？ 成績順位は何番だ？」

「<sup>カ</sup>自ずと、学生たちの注目がこちらに集まる」

内心むずがゆく思いながらも、雷真はあくまで涼しい顔で、奇異と侮蔑<sup>よべつ</sup>の入り交じった、

不愉快な視線をやり過ごした。

「春になると増えるのよね」

ドラゴンを腕にとまらせながら、シャルは吐き捨てるように言った。

「身の程をわきまえないバカが」

「俺は確かにバカ野郎だが、身の程ならよく知ってる」

「へえ。どの程度だと思ふわけ？」

「一二三五位だよ」

どっと周囲で笑いが起きる。夜々は悔しそうにそちらをにらんだが、雷真はやはり涼しい顔で、嘲笑にも取り合わなかった。

一方、シャルはぼかんとした。形のよい唇をばかっと開けて、

「あきれた。本物のバカね。バカ中のバカね。そびえ立つバカ。輝くバカね。一二三五位ですって？ そんな成績で、この私に勝てるわけ……」

口をつぐむ。

雷真の表情が、あまりにも落ち着いていたからだろう。

「笑えよ。実際、俺は人形使いとしては三流だ。そのギャラリー連中に比べりゃ、はるかに無知で無才だぜ。だが、ひとつだけ、連中よりマシな点がある」

「……それは何？」

「俺はまだ、勝負を捨てちゃいない」

せせら笑う声がやんだ。

シャルがあたりを見回すと、誰も彼も、気まずそうに目をそらす。

そう——彼らの大半は、夜会に参加できない。

にもかかわらず、彼らは黙って見ているだけだ。

戦う前に負けを認めた、敗北者たち。

「……ふん、覚悟だけは一人前みたいね。それとも、すつごくニブいのかしら？」

「冗談。俺は繊細なヤツだよ」

「やつぱりニブいのね。ニブチンね。遅くて飽きられるタイプね」

「意味わかって言ってるか!? 年頃の娘さんが滅多なこと言うな!」

「そうです! 雷真はどっちかって言うとも早い方です!」

「おまえも黙れ! つか、おまえがそんなこと知ってるわけないからな!」

あわてて夜々を黙らせる。その甲斐もなく、シャルは露骨に眉をひそめた。

「バカなだけじゃなくて、人形遊びする変態? 最低の痴漢野郎ね、この変質者!」

絶対零度に凍りつく、嫌悪のまなざし。ゴキブリを見るような目つきだ。

雷真はとても哀しくなった。暗い部屋のすみっこで、膝を抱えてうずくまりたい気分だ。

だが、残念ながら、今はそんな場合ではない。

「変態に手加減はしないわ。全力でつぶすわよ、シグムント」

「心得た」

その瞬間、ドラゴン（シグムントというらしい）がうなりをあげた。

小動物のようだった姿が、見る間に変貌する。黒い霧——実体を持った闇のようなものがシグムントを包み、その中から無骨な手足が、爪が、翼が生え出てくる。

やがて霧が晴れたとき、そこにあったのは、巨大な竜の姿だった。

体高三メートル、全長八メートルはあるかという巨軀。

単に大きくなっただけではない。すらりとして、たくましくなった。発達した翼と角には威厳すら備わっている。ちょうど、仔竜が成体になったような感じだ。

（質量が増えた……？）

雷真は目を見張った。変形する自動人形なら見たことがあるが、大きくなる自動人形は初めてだ。その分の質量をどこから持ってきたのか。内蔵している魔術回路と関係があるのか。疑問は尽きない。

ちろちろと舌のように、竜のあぎとから光がのぞく。

シグムントが咆哮すると、大気が震え、突風が吹いた。シャルはまだ魔術回路を起動していないのに、シグムントの五体には、膨大な力がみなぎっていた。

圧倒的な力感。強敵だと本能で理解する。



だが、それはわかつていたことだ。雷真らいしんはうすく笑い、魔力を練った。

「こつちも行くぜ、夜々やや。吹鳴ふいめい一二四——」

「雷真！」

注意喚起ちゅういされるまでもなく、気付いていた。とつさに身を投げ出し、横っ跳びでかわす。夜々も反対方向に跳び、追りくるものを回避した。

ふたりが立っていたあたりを、巨大な鉄球がすり抜けていく。

直径およそ一メートル。表面にはトゲトゲが生え、いかにも凶悪なフォルム。

鉄球はそのまま、シャルとシグムントに向かって突き進んだ。

もちろん、黙って喰らうふたりではない。シグムントが翼で叩き落とす……が、何者かの攻撃は、それで終わりではなかった。

周囲の人だからから、一斉に飛び出してくる影がある。

騎士ふうの鎧人形よろい、裸足の女はだし、六本足の獣——いずれも自動人形オートマタのようだ。

鎧人形が真正面から、ほかの二体が左右から、挟み込むように飛びかかる。ターゲットは雷真ではなく——シグムントだ！

「シグムント！」

シャルが指示を出す。どうしろ、と命じたわけでもないのに、シグムントはその意図を的確に理解し、シャルを乗せて飛び上がった。

行きがけの駄賃とばかり、前足で鎧人形を叩き伏せる。

さらに、尾を振り回し、左右の二体をはね飛ばす。それだけのことで、三体はたやすく機能を停止し、びくりともしなくなった。

（やる……。〔十三人〕の称号は伊達じやない）

基本的に、コントロール中の自動人形は意のままに操ることができる。だが、自動人形は本個人形ではない。自律し、意志を持つ存在だ。人形使いと呼吸が合っていないければ、動きは鈍り、余計な魔力を消費する。

その点、シャルとシグムントの同調は完璧だった。お互いがお互いを熟知していなければ、あんな動きはできない。

しかし——気を抜くのはまだ早い。

雷真の優れた動体視力は、その動きをとらえている。

人だかりの中を、明らかに攻撃意志を持って、密かに移動する連中がいた。

気配は九、十……もつという。その半分が人形使いだとしても、相当な戦力。そして、やはり数に勝る有利はない。

間もなく、そいつらは攻撃行動に移った。

人だかりから飛び出してくるのは、怪物のような姿。水妖や烏乙女など、伝説上の存在をモチーフとした自動人形だ。人形師の趣味や感性が意匠に投影されている。

最初に動いたのは、半透明のボディを持つ、水妖型の自動人形。槍のごとき水流を放ち、シグムントを襲う。

シグムントは軽々とかわしたが、今度は横から雪の精——ジャックフロストが攻撃してきた。冷気の魔術を照射され、際どくかわす。シグムントは無事だったものの、先ほどの水流が凍りつき、地面が凍結した。

さらに、上空からの攻撃。烏乙女型の自動人形が突風を起こす。これはかわしようがなく、シグムントは浮力を失い、凍った地面に叩きつけられた。

そこへ、新手だ。いかにもゴーレムといった風貌の巨人が突進してくる。

脚がすべって、かわせない。シグムントは翼をつかまれ、身動きが取れなくなった。

学生たちがざわめく。さしもの（暴竜）と言えど、これは年貢の納め時か？

ぎしっ、と翼がきしみをあげる。このままでは危険だ。しかし、振りほどけない。シグムントの背中でシャルが舌打ちをした、まさにそのとき、ぶおんっ、と空気を切り裂いて、巨大な鉄球が飛んできた。

それはすさまじい破壊力を秘めて、シグムントにぶち当たり——

——は、しなかった。

「……何の真似？」

冷ややかな声でシャルが問う。

雷真は背後からの問いかけを無視して、かたわらの相棒に言った。

「行けるか、夜々」

「雷真が望むなら、地の果てまでも」

夜々は受け止めた、鉄球を投げ捨て、力強く返事をした。

## 4

シャルは極めて不可解な気持ちで、目の前の背中を眺めた。

この背中には、シャルにケンカを売った、無礼な男のものだ。

その手前。ゴーレムの上に立ち、鉄球を止めたのは、彼の自動人形。オートマツン

このふたりにかばわれたのだと理解するまで、数秒かかる。

理解した途端、激しい怒りがわいてきた。

「……そこをどきなさい」

「言われなくてもそうするさ。連中をぶっ飛ばさなきゃならないからな」

「ふざけないで。一体、何の——」

「何のつもりだ」

シャルの言葉を引き継いで、誰かが言う。

人だかりの中から、傲然と歩み出てくる不埒者がいる。

そのとなりには少女型の自動人形。表情に人間味がなく、関節は球体式。いかにも人形然とした外見だ。

人形は鉄の棒を持っていた。その先端から鉄球に向かって、光の筋が伸びている。伸縮自在の魔力の鎖——どうやら、それはモーニングスターの一種らしい。

（あの鉄球は、モーニングスターのヘッドだったのね……）

シャルは油断なく、素早く戦場を見渡した。

戦場規模が拡大したため、見物の学生たちはかなり下がっている。広くなった通りには、水妖、雪の精、鳥乙女、ゴーレムに、鉄球使いの五体が健在。

——いや、それで全部ではない。

むくり、と、倒れていた三体が起き上がる。

復活したのだ。原因を探して見回すと、離れたところで、白いロープの自動人形が杖を振っていた。修復の魔術というやつか。

これで、敵は総計九体。回復魔術あり、攻撃魔術あり、盾役あり、切り込み役あり、遠距離攻撃ありで、既に体裁は軍団だ。

ゴーレムと苦しい力比べを続けながら、シグムントが無感動につぶやいた。

「モテモテだな、シャル。あちらの人形使いは男子ばかりだ」

「……言ってる場合？」

不埒者どもははつきりシグムントを狙っている。他人の恨みを買う覚えは……けつこうあるだけに、シャルは苦戦を覚悟した。

一方、不埒者と無礼者の会話は続いていた。

「答えろ、留学生。なぜ我々の邪魔をする」

「こいつは俺の獲物だ。横取りされちゃかなわない」

こいつですって？ 獲物ですって？ 無礼者！

「……では、ブリュー嬢の参加資格は君に譲る。その代わり、我々に敵対しないでくれ。我々としては、彼女が脱落してくればそれでいいんだ。……いや、いっそ我々と共闘しないか？ 仲間がいれば、夜会でも有利に」

「断る」

無礼者は即答した。条件を吟味しようとしなかった。

「……なぜだ？ 君にとっても悪い話じゃないぞ」

「十人がかりつてのが気に入らないのさ」

キモノの少女に手をかざす。送り出された魔力に反応し、少女はゴーレムを蹴飛ばした。

三トンは軽く超えていそうな巨体が、ゴムまりのように吹っ飛んでいく。

おおつ、とギャラリーがどよめいた。

シグメントが自由を取り戻し、具合を確かめるように、大きく翼をはためかせる。

「俺はこっちにつかせてもらうぜ。群れるのは性に合わない——」

最後まで言うことはできなかった。爆発音が台詞をかき消し、一瞬で猛火に包まれる。後方から火の玉が飛んできて、無礼者を直撃したのだ。

「とったぞ！ 油断しやがって、ざまあみろ！」

喜ぶ声。あわてて振り向くと、学生がひとり、ギャラリイの中で小躍りしていた。連れているのは魔女の姿の自動人形。——伏兵だ。

炎が消える。やがて煙の中から現れたのは、こんがりと焼け焦げたふたり……ではなく、ほとんど無傷のふたりだった。

少女が主人をかばったのだろう。だが、特筆すべきはその耐久性だ。キモノがうつすら焦げているだけで、少女の肌には焼け焦げひとつない！

無礼者はそちらを振り向こうともせず、「行け」とだけ言った。キモノの少女が瞬時に飛び出し、魔女に肉迫する。

真下から突き上げるような、強烈な蹴りをあごに見舞う。

魔女は校舎よりも高く打ち上げられ、空中でバラバラになった。

何という瞬発力！ 巨体のゴーレムが吹っ飛ばされた。

「何だ、あいつ……」「ひょっとして……強いのか？」「一二三五位だぞ!？」

ギャラリイがざわめく。そのざわめきは動揺となり、不埒者たちにも伝染した。

「こいつの自動人形は高級品だ！ 使い手をつぶせ！」

鉄球使いの主人が叫ぶ。どうやら彼がリーダーらしい。不埒者たちはその指示に従い、あろうことか、生身の人間に躍りかかった。

鎧人形が鋼の槍を、ゴーレムが巨大な鉄拳を繰り出してくる。

「おっと」

無礼者はふわりと飛び上がり、身軽にかわして着地した。

「人形使いを狙うのは、夜会の規約違反じゃなかったか？」

言っても無駄だ。不埒者どもは攻撃の手をゆるめない。

「そっちがそのつもりなら、こっちもガチに行くぜ——光焰一二結——」

「はい！」

コマンドを受けて、少女の動きが変わった。燃え盛る炎のような動きで、ゴーレムを蹴倒し、鎧人形を弾き飛ばして、さらに敵陣に突っ込んで行く。

その後に繰り広げられた光景は、シャルの想像をはるかに超えていた。

機巧魔術の常識を引っくり返す、型破りの戦闘技法。

突撃する少女を、無礼者がびったり追いかける。少女が崩した敵を無礼者が投げ飛ばし、少女がフェイントをかけた相手に無礼者が殴りかかる。

そうして敵を翻弄し、隙を生じさせた上で、少女がとどめの蹴りを叩き込む。少女の脚力はすさまじく、自動人形のボディがたやすくひしゃげ、碎け散った。

その動きは、たったふたりの戦闘陣形。

非常識ではあるが、反常識ではない。戦術に一貫性があり、極めて合理的だ。

シャルは舌を巻いた。人形使いとしては三流？ 嘘をつけ！

あれだけ自分が動いていながら、人形の動きが少しも鈍らない。

人形を支配する強い精神力——魔力があるのだ。

少なくとも、彼は相当の修練を積んでいる。

（東洋には、こんな戦い方があるの……？）

呆然と戦いを眺めるシャルに、シグムントが耳打ちしてきた。

「シャルよ」

「……わかってる」

無礼者がかき回してくれたおかげで、不埒者どもの注意がそれている。

シャルはこっそり魔力を練り上げ、シグムントの魔術回路に流し込んだ。

力を蓄え、時を待つ。そして、敵が射線に並んだ瞬間、

「ラスターカノン！」

シグムントのあごから、強烈な光の束が放射された。

それは伝説の（竜の息）に似ていた。網膜を焼く閃光。強烈な光芒を放ちながら、空気中の分子が消滅し、吸い込まれるような突風が生じる。

二十メートルを超えたあたりで、光線は急速に減衰し、効果を及ぼさなくなる。だが、それで十分だ。不埒者どもの自動人形が巻き込まれ、ある者は腕を、ある者は足を、あるいは半身を消し飛ばされた。

消滅した部分が飴のように溶け、断面がつるりと不気味な光沢を放つ。

決着。そして敗走。

結局、無礼者が倒した分も含めて、十体すべてが戦闘能力を失った。不埒者どもは、自分の人形を引きずるようにして、這々の体で逃げ出した。

周囲の学生たちも言葉を失い、茫然自失で立ち尽くしている。

「怖い怖い。ウワサ通り、とんでもない威力だな」

無礼者がおどけた調子で言う。その上、なれなれしくも笑いかけてきた。

ムカつく男だ。ラスターカノンに巻き込まれてしまえばよかったのに。

「この私を助けたなんて、バカげた思い違いをしないことね」

「おまえは助けられるようなタマじゃないだろ」

「貴方みたいな変態、いてもいなくても同じよ。そっちの人形もね」

しばし、シャルは無言でふたりをにらみつけていた。が、そのうちに、少しだけ気分が

変わって、ぼそりと、自分から口を開いた。

「……ふん。一応、名を聞いておくわ」

無礼者はふつと笑って、自己紹介した。

「日本の傀儡師、赤羽雷真だ」

「同じく、夜々」

「……いや、どこも同じじゃねーだろ」

「その妻、夜々」

「違うからな!? 入籍とかしてないからな!?」

あわてる無礼者——名は雷真だそうだ——を、シャルは鼻で笑う。

「嘘? 罪? びつたりの名前ね」

「俺だつて気に入ってねーよ! つか、俺の国じゃ雷に真なんだぞー」

「どうでもいいわ。さっさと続きをやりましょう。どうせ秒殺するけどね」

シグムントに手をかざし、魔力の連絡を確保する。

雷真は動かなかった。じつと、こちらを見つめている。その視線は、シャルではなく、

シグムントに向けられていた。

そして。

「……やめた」

くるるときびすを返す。学生たちがざわつくが、驚いたのはシャルも同じだ。

「興が醒めたぜ。今日のところは、出直しだ」

何て身勝手な理屈だろう。怒りのあまり、シャルは震えた。

「ふざけないでよ……？ この私に挑戦しておいて、今さら逃げられるとでも」

皆まで言わず、無礼者が右手を閃かせる。腰に吊ったハーネスから、円筒形の何かを抜き取り、素早く地面に叩きつけた。

小さな爆発が起こり、決して小さくない煙が生じる。

白煙があたりを埋め尽くす。ニンジャの国、ジャパンが誇る煙幕だ。

シグムントが片翼をはためかせ、煙を追い払う。そのときにはもう、例のふたりは距離を稼いでいた。軽々と人垣を跳び越えて、はるか彼方へ走り去る。

結論から言えば、まんまと逃げられてしまった。

「……とんだ腰抜け野郎だわ」

「はたして、そうかな？」

まばゆい光を放ちながら、シグムントが仔竜の姿に戻る。

「どういう意味？」

シグムントは声をひそめ、周囲に聞こえないくらいの声量で答えた。

「彼は、私の負傷に気づいたようだ」

さらに、と翼を動かして見せる。

「——痛むの？」

「二、三日は大事を取りたいな」

怪我<sup>けが</sup>をしていては満足に飛行できない。体の大きなシグムントにとって、それはかなりの負担となる。

シャルすら気付かなかったことに、あの男は気付いていた？

では、彼が戦いに割り込んできたのも、シャルの不利を悟ったから……？

「……やっぱり腰抜けよ。敵の弱みを突く覚悟もない、甘ったれのチキン野郎」

なぜだろう。無性に腹が立つ。ひどく気に入らない。シャルは胸をムカムカさせながら、努めて冷淡に言った。

「夜会は無慈悲な生存競争。邪魔者を残らずつぶした者がすべてを得るのよ。あんな変態の腰抜けのバカ男、真っ先につぶされるわ」

「その割には、彼に興味を持ったようだな」

「何で私が興味を持つのよ」

「興味がないなら、なぜ名を訊いたのだ？」

「それは——」

答えに詰まる。言われてみれば、確かに奇妙だ。上手く理由が説明できない。

結局、シャルは憤然として、こう言った。

「もう、黙りなさい。お昼のチキンをトウモロコシに格下げするわよ」  
肩を怒らせ、食堂へと続く道を歩き出す。

思い出したように、学生たちが道を開ける。こうして、いくつかの謎と、少しのわだかまりを残したまま、昼休みのハブニングは収束した。

## 5

その夜、トータス寮の一室で。

ベッドに仰向けに転がって、雷真は悶々としていた。

「ふん……慣れないな」

昼間の光景が脳裏に焼きついて離れない。部品をまき散らしながら、碎け散る自動人形。破壊の瞬間に感じた、鈍い手ごたえ。

雷真はかぶりを振って、まといつく吐き気を追い払った。

「何か言いましたか？」

洗濯物を積みながら、夜々が笑顔で振り返る。

「——いや。部屋がボロいと言ったのさ。蹴ったら崩れそうだな」

薄汚れ、ヒビの入った天井を示す。

かび臭い空気が肺を満たし、すすけた壁に気が滅入る。夜々が洗ったシーツは清潔だが、ベッドはぎしぎしとうるさく、熟睡するのにもひと苦労だ。

三日もすれば慣れるかと思つたが、そうでもない。

むしろ逆で、日増しに不満が募るような気がする。

「ま、けっこう広いし……寝床があるだけマシか」

そう自分に言い聞かせ、雷真は寝返りを打った。

部屋の広さは一二畳ほど。勉強机とクロゼットは備えつけ。本来はふたり部屋なので、対面の壁際にもベッドがある。

「そうですよ雷真。不平を言つてはバチがあたります」

夜々はこのこ笑っている。

ふたりつきりでいられる、というだけで上機嫌なのだから謎だ。

「……ルームメイトがいなくてよかったな」

「はい♡」

執念深いというか、偏執的というか、夜々はときどき暴走する。もしもルームメイトがいたら、どんな陰湿な手段で排除していたか知れない。

「ところで、明日からどうするのですか？　また誰かに挑戦を？」

「明日になったら考える。今日はもう寝かせろ」

「わかりました。おやすみなさい雷真」

「ああ……って待て待て待て！」

いそいそと入ってくる物体を押し返す。

「おまえの寢床はあっちだろ！」

「でも、夜々は今日の戦いで怪我をしてて。火傷も少し」

「だから何だ！」

「知らないんですか？ 私たち自動人形は人形使いの魔力で生きています。故障した場合も、距離が近いほど修復が早まるんです」

「……言われてみれば、確かにそうだった……が」

あからさまに嫌な顔をしてしまう。

夜々は仔犬こいぬのような眼をして、ベッドの上に居座っている。

見たところ、外傷はない。だが、内部機構に関しては、どうなっているかわからない。本人が怪我をしていると言うのだから、しているのだろうか。

だとすれば、それは雷真の責任だ。あの戦い自体、雷真のわがままだったのだ。

「……仕方ない。そういうことなら、一緒に寝るか」

「はい♡」

「ただし、妙なことはするな」

「しません。妙なことなんて」

「言い方が悪かったな。俺に触るな」

「……ちっ」

「何で舌打ちした？　今何で舌打ちした？」

「自動人形は、人形使いに接触していると、より早く回復するんです」

「嘘つくな！　やっぱ出てけ！　ひとりで寝ろ！」

隙あらばにじり寄ろうとする夜々と、防衛線を死守したい雷真。両者のあいだに火花が散り、一種の均衡状態が生まれる。

かくして、眠れぬ夜が更けていく。

## 6

訝え訝えとした月光が、夜のキャンパスを照らし出す。

深夜一時。まっとうな学生なら、既に夢の世界にいる時刻。

死に絶えたような静寂の中、人知れず蠢く影があつた。

庭園の外れ、見通しの悪い木立ちの奥で、二つの眼が光る。

シルエットは判然としない。四本の足を地につけ、何かを貪り食<sup>むさば</sup>っている。

影が食いついているものには、手足があり、頭があった。

見開かれた眼。ほこりと飛び出した眼球が、断末魔の恐怖を物語る。砕けた足には巨大な鉄球がめり込み、あたりには血のような液体が飛び散っている。仰向<sup>あやむ</sup>けに倒れ、胴体を食い荒らされるそれは、どうやら屍<sup>しかばね</sup>のようだった。

ただし、人間の死体ではない。

破れた皮膚からのぞくのは、金属のシリンダー、そして無数のコード。

自動人形<sup>オートマトン</sup>だ。影は人形を喰<sup>く</sup>っている。

ボディを引つべがし、内部構造を引きずり出す。あたかも食人鬼のごとく、もの言わぬヒトガタにむしゃぶりつき、オイルをすすする。

びちゃびちゃ、びちゃびちゃ。

月が傾き、東の空が白むまで、そいつの食事は終わらなかった。



## Chapter 2

遭遇戦は一瞬で



### 1

夢だとわかつている夢の中に、今夜も、雷真はいた。

「撫子！」

黒煙が目に染みる。肺が焼けそうに熱い。本音を言えば、一秒だってこんなところにはいたくない。何よりも恐怖が、今すぐこの場から去れと警告している。

だが、雷真は走る。火の粉が飛び散る中を。奥へ、奥へと。

「どこだ、撫子！」

障子を蹴破り、妹の姿を探す。そして叫ぶ。喉が張り裂けそうなほど。

破滅の予感というものがあるなら、これがそうだ。

間に合ってくれ、と思う。思って走る。雷真は知っている。急がなければならないことを。そして——どんなに急いでも、もう手遅れなのだということを。

雷のような音を立て、梁が落ちてくる。その瞬間、

「お兄さま……」

という声を、おぼろげに聞いた気がした。

「撫子！　ここか！」

急制動。廊下の途中で向きを変え、大広間のふすまを開け放つ。

そこで雷真を待っていたものは――

## 2

「魔術回路とはつまり、儀式の代替であり、ある種の機関きかんのようなものだ。蒸気じやうきをふかせば歯車が回ると同様、魔力を流せば魔術が生じる。無論、歯車の回転などとは、比較にならないほど複雑な効果を得ることが出来るわけだが――」

ひどく抑制の効いた声と、単調なチヨークの音が講義室に響く。

講義室は古代の劇場に似ている。学生の席は段々になっていて、後ろに行くほど高さがある。雷真は中ほどの席に収まって、キンバリーの講義を受けていた。

まともに講義を受けるのは初めてだが、はつきり言って、眠い。

あくびを噛み殺ころしつつ、室内を見るときもなしに見回す。

真面目まじめくさった表情の学生たちに交じって、自動人形オートマトンの姿も散見される。ただし、目に

つくのは小動物や人間型の人形ばかり。図体が大きいものは、講義室の外に設えられた、待機スペースに置かれることになっていた。

雷真のとなりでは、夜々がせつせとノートを取っている。英語での読み書きができない雷真に代わり、夜々が板書を写しているのだ。

ふと、こちらをにらむ、蒼い瞳に気がついた。

シャルだ。右手、三列前の席から、盗み見るようにこちらを見ている。

雷真と目が合うと、シャルはあわてて正面を向いた。

テキストで顔を隠し、数秒。

そろーっと目だけで振り返る。そして再び雷真と目が合うと、今度は殺気混じりの、刺すような視線を向けてきた。

（何がしたいんだ、あいつは……）

にらみ返すべきか、雷真が迷っていると――  
べきんっ、と何か硬いものが眉間を直撃した。

「雷真！ 大丈夫ですか雷真！」

となりの夜々が取り乱す。雷真は激痛に悶えながら、ひたいをさすった。

バラバラと指に触れるのは、白い破片――チヨークの粉だ。

おそるおそる顔を上げると、キンバリーがこちらをにらんでいた。銀縁メガネの向こう

に、永久凍土のごとき双眸がある。

チヨークは彼女が投げたらしい。恐るべきコントロールだ。

「私の講義を聞き流すとは命知らずだな、（下から二番目）。誰のためにこんな初歩的な、つまらん話をしてやっていると思う？」

「俺のような新入りと、出来の悪い学生のためか？」

「違うな。出来の悪い新入りのためだ」

「そいつはすみませんでした、キンバリー先生。ちよいと寝不足なもんで」

「ほう。おまけに夢見が悪かった、とでも言うつもりか？」

「ご明察、恐れ入るよ」

「いい度胸だ。その度胸に免じて、今回は目をつむってやる。その代わり、質問に答えろ。今現在、もつとも普及している魔術回路は何だ？」

「そりゃ——」

簡単な問題だと思ったが、とっさに答えが出てこない。雷真は首をひねった。

「熱……いや。動力……違うな。光……発電か？」

キンバリーは肺活量の限界に挑戦するような、ひどく長いため息をついた。

「教えてやれ、シャルロット」

急に矛先を向けられ、シャルは一瞬びくつとしたが、

「……〈イブの心臓〉です」

「正解だ」

おお、と学生たちがどよめく。

「どよめいたバカは減点だ。だが、まあ、あまりにも一般的すぎ、かつ例外的な存在ゆえに、魔術回路という認識はなかったかも知れんな」

キンバリーは新たなチョークを手に取り、黒板に「Vital」と大書した。

「シャルロットの言う通り、あらゆる自動人形は〈生命〉の魔術回路——〈イブの心臓〉を内蔵している。自動人形が自律しているのは、この回路のおかげだ」

淡々とした口調で語る。

「異なる二種の魔術は同一のボディに共存できない——それが機巧物理学の基礎〈魔活性不協和の原理〉だ。だが、この原理にはたつたひとつだけ例外がある」

つまり、それが〈イブの心臓〉というわけだ。ほとんどの自動人形は、〈イブの心臓〉とは別に、何らかの魔術回路を搭載している。

「機巧魔術の歴史はこの回路の発明から始まったと言っているだろう。始原にして始点、原初にして原点。そして、いまだに未解明の部分が多いブラックボックスだ。複製は比較的簡単だが、一から組み上げるのはほぼ不可能と言われている」

今では完全に普及していて、どこの工房にも複製用のマスターが存在する。〈生命〉の

複製が容易だからこそ、自動人形は普及したのだ。

「（イブの心臓）は極めて自由度の高い回路だね。人形に知性を与えるばかりか、優れた人形師の手にかかれば、呼吸や発汗を再現し、食物を消化することもできるようになる。それが戦場で役に立つかどうかはともかくな」

ふっと、皮肉っぽく唇をゆがめる。

「人間を模倣することに意味があるとすれば、人間にまぎれる必要がある状況——潜入や謀報活動においてのみだ。だと言うのに、人形師どもは、いつもこいつも人間もどきを作りたがる。外見しかり、機能しかり。まったく、つまらぬことに血道を上げる連中だよ。そうだろう、（下から二番目）」

そう言ったキンバリーの視線は、雷真ではなく夜々に向けられていた。夜々は身の置きどころがない様子で、小さくなつてうつむいた。

「あんたがどういうつもりでそんなことを言うのか知らないが」

どん、と机にひじを突き、雷真はすごむように言った。

「こいつは、世界最高の自動人形だ」

黒目がちな眼を潤ませ、夜々は感極まったように雷真を見つめる。

「雷真……」

「硝子さんが作つたんだからな」

びきつ。

「……アレ、夜々？ 何でそんな羅刹の表情——ちよ、おま、落ち着け！」

「また硝子<sup>しょう子</sup>って……っ！ また硝子<sup>しょう子</sup>って……っ！」

夜々は泣きじやくりながら雷真<sup>らいしん</sup>の首を絞め、前後に激しく揺さぶった。

周囲の学生たちから失笑<sup>しつしょう</sup>が漏れる。

「そうか。そんなに私の講義が退屈か」

キンバリーは冷え切った表情で、すっと窓の外を指し示した。

「では退屈しのぎに、大講堂の掃除<sup>そうじ</sup>をさせてやろう。——今すぐ出て行け！」

3

昼休みを告げる鐘が鳴る。

「つたく……。おまえのせいで余計な労働をさせられたぜ」

モップを片手に愚痴<sup>ぐち</sup>を垂れる雷真。愚痴りながらも、きっちり大講堂の掃除を済ませたあたり、律儀<sup>りつぎ</sup>と言いか意地<sup>いぢ</sup>つ張りと言うか。

夜々はまだめそめそやっている。どうやら、あてこすりのようだ。

「いい加減、泣きやめ。キンバリー先生のイヤミがそんなにシヨックだったのか」

「うっ、うっ……雷真は馬鹿ばかですっ」

「何だ、やぶからぼうに。まあ、否定はしないけどな」

掃除用具を片付け、大講堂を後あとにする――否いいえ、しようとしたが、夜々はその場を動こうとせず、すんすんと鼻を鳴らしていた。

雷真はぼりぼりと頭をかき、はあああ、と大きくため息をついた。

それから、強引に夜々の手をつかんで、

「ほら、機嫌直せ。飯を食いに行くぞ」

「は、はい……♡」

もうニコニコしている夜々の手を引いて、今度はそ大講堂を後にした。

大講堂の外、キャンパスのメインストリートは、既に学生たちで賑にぎわっていた。各学部の校舎や講堂などから、大勢の学生たちがあふれ出てくる。

彼らの多くが向かうのは、メインストリートの中ほど、学生食堂だ。大人数がそちらに流れるさまは、デモか暴動のようだと雷真は思った。

その流れに逆らわず、雷真は夜々と連れ立って進む。周囲の注目を浴びながら進むことしばし、壁一面がガラス張りというモダンな建物が見えてきた。

「あれが噂うわさの鉄筋コンクリートか。寮の食堂とはずいぶん様子が違うな」

中に入ってみると、その印象はより鮮明になった。

まず、天井が高い。開放的で明るい空間には、近代的なデザインの白いテーブルが並び、見た目からして清潔だった。

講義に出るのは今日が初めての雷真、無論、食堂を使うのも初めてだ。

ぼけーとした阿呆面<sup>あほうづら</sup>で、いい匂い<sup>にお</sup>のする方を眺める。

突き当たりの壁際、厨房の手前に、大量の料理が並べられている。大皿や金属の容器に盛られているのは、肉料理や魚料理、サラダにパンとさまだまだ。

学生たちは列をなし、盛られた料理を、めいめいが自分の皿に取って行く。

寮とはシステムが違うようだ。寮の食堂では、一人前のメニューが決まっていて、出されたものを食べればいいだけだったのだが。

「見ろよ、夜々<sup>やや</sup>。みんな勝手に取ってるぞ」

「食べたいものを取ればいいんでしょうか？」

「みたいだな。よくわからんが、郷に入っては何とやらだ」

空腹と寝不足が思考力を鈍らせている。雷真は深く考えず、列の最後尾に並んだ。

ここでもやはり注目を浴びるが、いつものことなので無視する。周囲にならってトレイを取り、皿をのせて、好みの料理をよそっていく。

かなり進み、列の先頭が見えたところで、雷真は失敗に気付いた。

そこに、レジスターがあつたのだ！

レジ打ちの女性が手早く操作し、学生から紙幣を受け取っている。

「勘定か！」

雷真は愕然<sup>がくぜん</sup>とした。金がいるとは意外だった。が、当たり前と言えば当たり前前の話だ。

寮で出してくれる食事も、別途、寮費を払っているわけだし。

雷真は嫌な予感を覚えながら、後ろに向かって手を出した。

「夜々、財布」

「寮のロッカーの中です」

「……ないのか？」

「ありません」

「……どうすんだ、これ？」

そうこうするあいだにも、列はどんどん進んでいく。流れに逆らって戻るのもおかしいし、戻ったところで、皿の上のものを大皿に戻すわけにもいくまい。それがマナー違反だということとは、異邦人たる雷真にもわかっていた。

「……ツケとか利くかな？」

「利くわけないでしょう。ほんつつつと、心底から間拔けな男ね」

後ろの方から、極めて刺々<sup>くさくさ</sup>しい声が飛んできた。

振り向くと、知らない男子をふたり挟んでさらに後方、見覚えのある女子がいた。

きらびやかな金髪と、蒼い瞳と、おともの仔竜がトレードマーク。

「シャル——」

「なれなれしく呼ばないで。ミス・ブリューと呼んだらどう？」

こんな近くにいたのか。今日はやけに注目を浴びると思ったが、その視線の何割かは、雷真ではなく、後ろの彼女に向けられていたらしい。

挟まれた男子たちが顔色を失い、どうぞぞと順番をゆずる。シャルは小さく「ありがとう」と言つて、てくてくこちらに歩いてきた。

そして、ポケットを探るように、一ポンド紙幣を三枚取り出し——  
そつぽを向いて、雷真に差し出した。

意外な行動。かなり面食らつたものの、突き返すほど無粋でもない。雷真は丁寧に頭を下げ、紙幣を拝むように頂戴した。

「悪いな。助かった」

「『ありがとうございます』つて言いなさい」

自分のぶんと、夜々のぶん、ふたりぶんの勘定を済ませ、レジを抜ける。抜けたところ  
で待っていると、シャルも後からやつてきて、無言で手帳を突き出した。

やたらと流麗な筆記体で、何やら書きつけてある。

達筆すぎて判読できない。助けを求めて夜々を振り向くと、夜々は小声で、

「シャルロット・ブリューに金四ポンドを支払う」と書いてあります」

「借用書よ。命が惜しかったら、これにサインすることね」

「強盗か。つか、利子を取るのかよ」

「当たり前でしょう。貴方<sup>あなた</sup>みたいな変態、どうして餌付け<sup>えづけ</sup>する必要があるのよ」

「変態言うな。わかった、わかったよ。利息込みで四ポンドな」

雷真は慣れないアルファベットでサインしながら、

「調子はどうだ、シグムント？」

シャルの帽子の上で、少し驚いたように、仔竜が首をもたげた。

「問題はない。体感より軽傷だったようだ」

「そりゃよかった。ほらよ、シャル」

手帳を返す。シャルは「何これ。きつたない字！」などと文句を言っていたが、雷真が

サインしたことには満足したようで、じゃあね、と立ち去ろうとした。

「待てよ。どうせなら、一緒に食おうぜ」

「な——」

夜々とシャルの声が重なる。よほど衝撃的だったのか、夜々のトレイでがちゃりと皿が鳴り、シャルはシャルで、バスタとチキンの皿を取り落としそうになった。

ぱくぱくと、小さな唇を開け閉めするシャル。

それから、憤然として、目尻をきりきりと吊り上げた。

「お断りよ。何で貴方みたいな変態と」

「そうツンケンすんなって。一緒に戦った仲だろ？」

「ふざけないで。あれは貴方が勝手に——と言うか、そもそも、最初に無礼な態度で挑戦してきたのは貴方でしょう。どうしてそんな男と……ああ、わかったわ。要するにバカなのね。死ぬのね。可哀相な子なのね」

けんもほろろ。シャルは雷真を罵るだけで、まったく取り合わなかった。

だが、雷真はあきらめない。何食わぬ顔でシャルの後ろにくつついて行き、彼女が逃げないのをいいことに、さし向かいの席に陣取った。

シャルは呆然とこちらを見たが、別に文句を言うでもなく、ムスツとして黙り込んだ。フォークをグーで握って、トマトソースのバスタに突き刺す。

明らかに、ベースを乱されている。雷真をどう扱っていいかわからないらしい。

シグムントは我関せずで、早速、自分のチキンにかじりついた。

夜々は暗く押し黙り、自分のサンドイッチにも手をつけず、ただならぬ気配を漂わせていたが、雷真は無視して、シャルに向かって言った。

「どうした、黙っちまって。腹でも痛むのか？」

「……あきれてるのよ。何て図太い男なのかしら。きつと神経までバカなのね。それに、

黙ってるのは退屈だからよ。男なら、少しは盛り上げたらどう？」

「ほう。おまえ、一応は盛り上がりたいわけな？」

「な……ぐっ……シグムント！ このバカを消滅させるわよ！」

「落ち着け、シャル。まずはチキンを片付けてからだ」

「黙りなさい。明日からドッグフード食べさせるわよ。さっさと——」

言葉の途中で、雷真の異変に気付く。

雷真は目をむき、食い入るように、ガラスの向こうを凝視していた。

「……何よ。急に、どうしたの？」

だが、雷真は答えない。——答えている余裕がない。

シャルはムツとして、

「無視？ 無視なの？ 何様のつもりよ、この無礼者！」

「あいつは……！」

目をそらすことができない。雷真の眼球はその姿を追いつける。

銀の仮面をつけ、黒い礼服をひるがえし、颯爽と、しかし、悠然と歩く者。

刹那、雷真の網膜に、おぞましい惨劇の光景が甦った。

引き裂くような勢いで、ふすまを左右に開け放つ。

屋敷の大広間で、雷真が見たもの。それは、ひと言で言えば地獄だった。

炎の中でも、わかる。むせ返るような血の臭い。

おびただしい量の血液。

折り重なるように倒れ伏す、無数の骸。

その多くは自動人形の残骸だ。砕け散った破片、ねじ曲がった骨格、割れた歯車が散乱

し、壁の大穴や破れた畳と相まって、激しい戦いがあったことを物語っている。

そして、残骸のただなかに立ち尽くす影。

あたかも修羅のように。幽鬼のように。

その足もとには、生身の死体がうち捨てられていた。

「親父……！」

脳天を割られ、人相が変わっているが、それは紛れもない、赤羽一門の当主だった。

父のまわりには、親類たちの死体もある。叔父に伯母、従兄弟たち。いずれも赤羽の名

を受け継ぐ、凄腕の人形使いたち。

灼熱した頭で考える。これは何だ？ 俺は夢を見ているのか？

現実感がない。

だが、熱気と臭気が雷真の頬を打ち、現実を見ろと告げている。

雷真はゆつくりと、先ほど意図的に視野から外したものに、向き直る。

見間違いだと、恐怖が見せた幻覚だと、確かめたくて。

それは、まだそこにあった。

立ち尽くす影の向こう、祭壇まつみだんのようなものに寝かされて、沈黙している。

脱皮、という言葉が脳裏に浮かぶ。

人体を縦に裂き、中身を引きずり出せば、こうなるだろうか？

祭壇の上に転がっていたのは、ごっそりと中身を抜き取られた肉体だった。

皮と言うにはあまりに肉が多く――

死体と言うには空虚くうきょにすぎる、いびつな存在。

着ている着物や背格好、肌や手足の雰囲気で、誰だれの骸かわかってしまう。

それは。

「撫子……っ！」

つい先ほどまで、妹だったもの。

こらえきれず、雷真の喉から絶叫がほとばしった。  
そんな弟を、兄はただ氷のように冷厳な瞳で、静かに見下ろしていた。

## 5

気付いているのか、いないのか。

銀の仮面の男子学生は、こちらを見ようともしせず、通りを横切っていく。

彼には連れがふたりいた。ふたり——いや、二体だ。

フリルとレースで飾られた、美しいドレスに身を包んでいる。そのデザインは倒錯的で耽美。世紀末に流行ったような、死と退魔の香りを漂わせている。どちらの少女もため息が出るほど美しく、明らかに人間離れしていた。

外の光景と、硬直した雷真を交互に見て、シャルはあきれたように言った。

「マグナスじゃない。何よ、今度は彼を狙おうってわけ？」

「夜々」

「はい」

雷真と夜々が席を立つ。シャルもぎょつとして腰を浮かせた。

「ちよつと……本気!? 待ちなさいー」

雷真の腕をつかみ——そして、ひるむ。

雷真の目に凶暴な光を見たのだろう。シャルはとつさに手を引っ込めたが、しかし勇気を奮い立たせて、忠告した。

「悪いことは言わないわ。彼だけはやめておきなさい。絶対、勝てないから」

「絶対に？」

「そうよ。彼は技術も魔力も図抜けてる。総合成績は歴代一位、この学院始まって以来の天才よ。六体もの自動人形オートマトンを同時に使役するひとり軍隊ワンマンフオーース。現時点で、もっとも魔王に近い男——って、ライシン——」

最後まで聞いてはいない。雷真は既に歩き出している。

「あいにく、俺は筋金入りのバカでね。試してみるまで理解できないのさ」

自然と早足になり、いつの間にか駆け出している。

食堂を飛び出すと同時に、黒い礼服の背中に呼びかけた。

「待てよ、お面野郎。それとも、（偉大なる者）って呼んだ方がいいか？」

男子学生——マグナスが足を止める。

二体の乙女型自動人形オートマトンが、彼を護るように前に出た。

その片方、うす桃色の髪やわらかの乙女を見て、雷真は思わず顔をしかめてしまう。燃いされるような痛みに胸を焼かれ、平静を装うことができなかった。

その人形は、あまりにも似、ぎ、て、い、る、の、だ。

「よう。お人形をはべらせてお散歩か？ 相変わらず、最低の趣味だな」

「……謹だ」

「悲しいこと言うなよ。遠路はるばる、地球の反対側まで会いにきてやったのに」

軽口のように言いながら、雷真らいしんははつきりと自覚した。

体の芯こゝろが燃えたぎっている。

人は怒れば怒気どきが漂う。だが、本当に、心底からの怒りに支配されたとき、怒気は風かぜのように静かに、穏やかになる。

言葉を低く抑えても、感情を殺しても、怒気は雷真の全身から放たれているらしい。道行く学生たちは足を、食事中の学生たちは手を止めて、殺戮さつりくの場面でも見るような目で、こちらを凝視ぎょうししている。

マグナスは雷真をしげしげと眺め、やがて穏やかな声でつぶやいた。

「どうやら、人違いをしているようだ」

「それならそれでかまわないぜ。俺おれはただ、おまえにこいつをくれてや——」

しゃべりながら、雷真が腕を上げた、その刹那せつな。

何が起こったのか、雷真には理解できなかった。

花束を差し出されたような、甘い香りが肺を満たす。

ふわふわのフリルが鼻先をくすぐり、視界を奪う。手足に触れるのはやわらかな少女の肌。そして、喉元には、いくつもの刃が突きつけられている。

それこそ花束のように、雷真を包む色とりどりの髪、瞳、ドレス。

背後に立つ者、正面に立つ者。肩に乗っている者。どこから出したものか、それぞれに剣や槍、短剣などを持ち、雷真の皮膚に刃の先端を当てている。

実に六体もの自動人形が、同時に雷真を拘束していた。

彼女たちは、どこから現れたのか。いつ、現れたのか。

少なくとも四体は、今の今まで、気配をまったく感じさせなかった。

「雷真！」

夜々が動こうとすると、雷真の喉に刃が食い込んだ。それだけで、もう夜々は動けなくなる。夜々が何かする前に、雷真の首が落ちるだろう。

「……せつかちなお嬢さん方だな」

苦笑しつつ、雷真はゆっくりと腰のハーネスに手をやった。

「はやるなよ。お近づきのしるしに、こいつを進呈しようと思っただけさ」

ボーチのひとつを開け、中から小ピンをつかみ出す。

黒ずんだ粉が入っている。この状況で取り出したからには、爆発物ではないだろう。

「……下がれ」

マグナスの命で、人形たちが一齐に武器を引く。

ピンク髪の乙女が雷真の手からピンを取り、そつとマグナスに手渡した。

「これは、ありがたくもらつておこう」

それだけを言い残し、マグナスとその〈戦隊〉は去つて行つた。

「雷真……」 怪我はありませんか、雷真……」

泣きべそをかきながら、夜々がすがりついてくる。

「すみません、すみません……」 夜々がついていたのに……っ」

「……よくわかつたぜ、夜々」

「え……？」

「あいつに近付くには、正攻法でいくしかねえ……」

冷や汗をぬぐう。今さらながら、膝に震えがきた。

本能在、魂の背骨が、はつきりと怯えている。

シャルの言葉に嘘はなかった。今の俺では――

絶対に、勝てない。

奇襲など無意味。私闘は命を縮めるだけだ。マグナスを倒そうと思うなら、夜会の規約の枠内で、上手く立ち回つた方が利口だろう。

それでもなお、勝てる見込みはないに等しい。事実、遭遇戦は一瞬だった！

雷真自身が、戦いの中で最大限に己を磨き。

夜々の性能を一二〇パーセント引き出して。

狡猾な戦術を編み、敵の裏をかいたとして。

はたして、可能性は、一割に達しているだろうか？

（あいつにたどり着けるか、俺は……!?）

圧倒的な実力差。断崖のごとき、断絶。

足もとの地面がぬかるみ、体が沈み込むような気がする。

力の差を思い知らされ、さすがに氣力が萎えかけた、そのとき――

ばん、ばん、ばん、と白々しい拍手が聞こえてきた。

「噂通りの男だね。編入わずか四日目にして、（元帥）閣下に噛みつくなんて」

振り向くと、ひとりの男子学生が、友好的な笑顔を向けていた。

さらりとした髪が綺麗な、なかなかの美男子だ。線が細く、少女のようにも見える。そ

の声はよく響き、優れた弦楽器のように澄んでいた。

人の好きそうな微笑みを浮かべ、会釈する。

「初めまして、ミスター・アカバネ。よかつたら、少し時間をくれないかな？」

人形使いの中には、人形師を目指す者もいる。

使うことと作ることは同じではない。本来はまったく別の技術であり、養成の仕組みもまったく違う……のだが、もちろん、重なる部分も少なからずある。

そんなわけで、学院は『機巧技術科』なるコースを設けていたし、人形作り専用の設備も整えていた。

マグナスが向かっていたのも、技術科の建物だった。

ぞろぞろと乙女たちを引き連れて、大通りから分かれた小道を歩く。技術科の専用校舎にほど近い、木立ちの手前まできたところで、不意に足を止める。

前方、屋外灯にもたれて、ひとりの女が立っていた。

機巧物理学の若き教授、キンバリー。美貌の持ち主だが、色気よりも荒っぽさを感じさせる女だ。講義中とは違い、眼鏡を外している。

マグナスの人形たちが反応し、それぞれの立ち位置を微妙に変えた。

しかし、キンバリーはまったく意に介さず、軽い調子で話しかけてきた。

「どうだね、（下から二番目）は？」

「……どう、とは？」

「面白いヤツだろう？ 成績表を渡してやったとき、あいつが何て言ったと思う？ 夜会に出るにはどうすればいいかと、そう訊いてきた」

「夜会——」

「笑うかね？」

「……いいえ。番狂わせがあるとすれば、それは彼の仕業しわざでしょう」

「ほう。君ほどの男が、それほどまでにあいつを買うのか？」

マグナスは答えない。キンバリーの意図をはかりかね、困惑している様子だ。

「まあいい。——それは何だ？」

組んでいた腕をほどこき、マグナスの手にあるものを示す。

先ほど雷真らいまことから受け取った、粉の詰まった小ビンだった。

「成分は解析してみなければ何とも。ですが、おそらく、遺灰いはいです」

「遺灰だと？」

意外そうな顔をする。それから、自分が立っている場所——技術科の建物に近い——に思い至った様子で、にやりとした。

「なるほど。君は優れた人形使いであると同時に、人形師でもあったな。それもとびきり腕がいいときている。君ほどの人形師なら、高度な魔術マテリアル——遺灰を人形に組み込むくらい、造作ぞうさくもないというわけだ」

マグナスは答えない。が、その沈黙は肯定にも受け取れた。

「だが、不思議だな。(下から二番目) はなぜ君にそんなものを？」

「……手袋を投げつけて、決闘の証とするように」

唐突なつぶやき。キンバリーが怪訝そうに眉をひそめる。

「極東のとある一族には、死者の灰を投げつけて、仇討ちに臨む風習があるそうです」

「……君が、あいつの、仇なのか？」

やはり、マグナスは答えなかった。

「ご用件がなければ、これで」

「ところで、マグナス」

通り過ぎようとする彼に、キンバリーは切り込むように言った。

「こんな噂を知っているか。誰が言い出したか知らないが、君の人形たちは全部が全部、禁忌人形だというんだがね」

再び、マグナスが足を止める。キンバリーは続けて、

「生体機巧というやつさ。パーツに生身の人間を使っているという、あれだ。遺灰や遺骸ではなく、生きた人間の(部品)をね。その魔力親和性は遺骸や遺物の比ではない……が、もちろん、魔術師倫理規定に違反する」

彼女の言葉は世間話のような調子だったが、全身から殺気に似た緊張感が漂っていた。

マグナスの人形たちが反応し、キンバリーに敵意を向ける。

キンバリーはナイフで裂いたような、酷薄な笑みを頬に刻んだ。

「実際のところを聞かせて欲しいものだな」

「……それは尋問ですか？」

「個人的な興味だよ」

マグナスは少し考える素振りを見せ――

「夜会の規約に、『禁忌人形を使つてはならない』という条項は存在しません」

とだけ、答えた。

すー、とキンバリーの目が鋭くなる。研ぎ澄まされた刃のよう<sup>やいば</sup>に。

「……それが答えたど、そう受け取つていいのかね？」

「かまいませんよ、キンバリー先生」

挨拶<sup>あいさつ</sup>もせず、去つていく。その足取りは自信に満ちて、確かだった。

彼に比べれば、人形たちの方がまだ人間味がある。キンバリーを警戒するように、何度も振り返りながら、マグナスの後を追う。

一行が去ると、キンバリーは大きく息をつき、苦笑を漏らした。

「まったく、怖ろしい男だよ、君は。その若さで禁忌人形を作り出せるなど……。工房のマエストロたちが聞けば、相当に腐るだろうな」

技術科の建物に消える背中を眺めつつ、キンバリーはひとり言を言った。

「それで、マグナス。君は誰を材料にしたんだね？」

もちろん、その問いに答える者はない。

7

少し時間をくれないか、とその美男子は言った。

一見したところ、害意は感じられない。美男子は微笑んでいるだけだし、自動人形の姿も見当たらない。

雷真は彼の左腕に目をとめる。そこには、金モールの腕章が輝いていた。格調高い書体で『Censor』と刺繍されている。いわゆる、風紀委員だ。

そして、金糸の刺繍が入った、白い手袋をはめている。

つまり、この男もまた、夜会の参加予定者ということだ。

成績優秀な風紀委員。疑う理由は見当たらない。

「立ち話も何だから、中に入ろうか。君はランチの途中だったんだろう？」

美男子が笑顔で食堂を示す。相手をなごませる——言い換えれば、油断を誘う笑顔だ。

無害そうな、それゆえに毒となる柔和さ。雷真は警戒をゆるめず、しかし断る理由もない。

ので、彼に続いて食堂に戻った。そのあとを、夜々が早足でついてくる。

食堂に入ると、学生たちがざわついた。特に、女子学生の視線が多い。注目を浴びるのは既に慣れっこだが、こんな好意的な視線を浴びたのは初めてだ。

「フェリクスー」

元のテーブルでは、シャルがびよこんと飛び上がった。別に汚れてはいないのに、そそくさと紙ナプキンで口元をぬぐう。

美男子はにっこりと親しげに笑って、

「やあ、シャル。ご一緒してもいいかな？」

「だだだ、だめに決まってるじゃないっだめよー」

「つれないね。それにひどいじゃないか。僕が何度誘っても『うん』とは言ってくれないくせに、彼とはあっさり同席しているなんて」

「こ、これはこの男が勝手に——もうっ何の用なの？」

「君をデートに誘いたくてね」

かーっと、シャルの顔がバラ色に染まった。

「おおお断りよ。だだ断固反対よ。どどうして私がっ」

「というのは冗談——でもないんだけど、今日は別件」

さらに、と金色の髪をなびかせて、こちらを向く。

「僕は君に話があるんだよ、ライシン・アカバネ」

シャルと夜々がぎよつとして固まる。それから、おそろおそろという感じで雷真を見た。明らかに、妙な誤解をしている顔つきだ。

雷真は黙って自分の席につき、冷めた豚肉を口に放り込んだ。

冷えてもそれほど硬くない。肉汁とソースの旨みを味わいながら、もぐもぐと咀嚼し、飲み下す。そうして、たっぷり時間をかけた後で、

「デートの誘いなら間に合ってるぜ？」

「まあそう言わずに。君を退屈させない男だよ、僕は」

「驚いたな。(十三人)のひとりにして学院自治の要——風紀委主幹のフェリクス・キングスフォートさんが、(下から二番目)の俺に何のご用だ？」

「驚いたのは僕の方だよ。僕のこととくにご存知だったとはね。シャルの次は、僕を狙うつもりだったのかい？」

びん、と空気が張り詰める。

フェリクスは相変わらず微笑んでいたし、彼の声音に敵意はなかったのだが、その緊張感 は食堂全体に伝播し、学生たちのざわめきが一瞬、やんだ。

ややあつて、先に緊張を解いたのはフェリクスだった。

「僕と取り引きしないか？」

彼は屈託のない笑顔を見せ、唐突にそんなことを言った。

「いや、取り引きと言うよりお願いだ。僕個人ではなく、風紀委主幹としての」  
「断る」

ふふつ、とフェリクスは噴き出した。

「君は即断即決の人なんだね、ライシン。でも、もう少し考えてくれてもいいんじゃないかな？　せめて説明くらいさせて欲しいね」

「それには及ばないさ。これ以上、取り引き先を増やしたくはない」

「でも、僕らの差し出すものが――」

焦らすような問を取り、ひと言。

「夜会の参加資格なら、どうだい？」

びたり、と雷真のフォークが止まる。

夜会の参加資格。雷真が絶対に手に入れなくてはならないもの。

視線がぶつかり、息詰まる沈黙が訪れる。

これは悪魔の誘いか、それとも……？



## Chapter 3

混沌に誘う、甘言



### 1

午後の講義がすべて終わると、雷真は夜々をともなつて、講堂を出て行った。

シャルはシグムントを頭に乗せたまま、講義室の窓からそれを見ていた。

日が傾き、外は既に薄暗い。

夕闇の中、雷真はフェリクスと落ち合つて、前庭を突っ切っていく。

フェリクスの後ろ姿が遠ざかる。シャルの体温が少し上がり、同時に胸が痛む。どこかやりきれない気分で、ほんやり見送っていると、

「気になるのか？」

と、シグムントが鋭い質問を口にした。

「なかならないわよ。ばばバカ言わないで」

「隠す必要はない。実際、彼は面白い男だ」

「なな何も面白いことなんてないわよ。グリーンピース食べさせるわよ」

「いや、フェリクスのことではない。私が言っているのは雷真の方だ」

「え——」

赤面しながら、シャルはシグムントの言葉を吟味<sup>ゲンミ</sup>して、首をひねった。

「……そう？ ただの無礼な変態じゃない」

「覚えているか。食堂で、あの男は私にたずねたのだ。『調子はどうだ』と」

「それが何？」

「彼は、私を一個の人格として扱った」

「——」

「自身が所有する自動人形<sup>オートマトン</sup>ならともかく、他人の自動人形<sup>オートマトン</sup>など文字通りの「人形」にすぎない。本来なら、彼は私ではなく、君にたずねるべきだったのだ。『おまえの人形、調子はどうだ』とね」

言われてみると、それは確かに妙だった。

「機巧物理の講義中、彼の自動人形<sup>オートマトン</sup>が彼の首を絞めただろう？」

「痴話喧嘩<sup>ちわげんか</sup>のときね？」

「彼は絞められるままだった。学生たちはみな笑っていた。彼が、自分の自動人形<sup>オートマトン</sup>も満足に制御できないと思ったからだ」

シャルははっとした。

そうだ。そんなはずはないのだ。シャルはもう知っている。やや荒削りながらも、彼は優れた人形使い——強大な魔力にあふれている。

彼がその気になれば、夜々を停止させることなど、造作もない。

「私が思うに——彼はいささか、センチメンタルな男のようだな」

ふ、と小さな笑みをこぼし、シグムントは言った。

擲揅するような口ぶり。だが、どこか好意的な響きがある。もしかすると、シグムントは雷真のことが気に入ったのかもしれない。

「君と気が合いそうじゃないか？」

「……合うわけじゃないでしょう、あんな変態。それに、私はリアリストよ。おセンチ野郎と一緒にしないで」

「君がリアリストか」

「……笑ったわね？」

「いや。だが、取えてたずねよう」

ふと、シグムントの声が厳しくなる。

「彼らは二度、君を助けた。かばい、そして見逃した。彼らが敵に回った場合、打倒する覚悟はあるのか？」

しばしの間。

やがて、シャルは重い間いかけを振り払うように、毅然<sup>きぜん</sup>として顔を上げた。

「私はシャルロット・ブリュー。女王陛下から、気高き一角獣の紋章と北の領地を賜った、ブリュー伯爵<sup>けしやく</sup>家のシャルロットよ」

誇りを込め、力強く言い放つ。

「邪魔者は、誰<sup>だれ</sup>であろうと排除するわ」

「……誰であろうと？」

「誰であろうと、よ」

きゅっ、とこぶしを握る。

「私には、この手を血に染めても、叶<sup>かな</sup>えたい夢があるんだから」

もう一度、窓の向こうに視線を投げる。

夕闇<sup>ゆうあん</sup>が迫るキャンパスに、既にフェリクスの姿はなかった。

## 2

雷真が案内されたのは、風紀委の専用スペースだった。

中央講堂の二階に設けられたエリア。主幹が使う執務室と、風紀委の待機場所、集会所の三部屋からなっている。学生有志の集まりとは言え、風紀委は学院の風紀を守る重要な

存在——相應に待遇はいいらしい。

フェリクスは執務室のドアを開け、雷真らいしんを中に招き入れた。

「ソファにどうぞ。お茶を淹いれるよ」

「あ、夜々ややがやります」

雷真の意志を確かめるように、フェリクスがこちらを見る。

「やらせてやってくれ。けっこう上手うまいぜ？」

「じゃあ、任せよう」

ティーセットを渡し、給湯室の位置を伝える。雷真に誉められてやる気まんまんの夜々は、張り切って部屋を出て行つた。

フェリクスは雷真の向かいに腰を下ろし、にっこりと微笑ほほえんだ。

「まずは、ようこそと言つておくよ。僕の話に興味を持ってくれたのだと、そう理解していいんだね？」

「興味は持った。参加資格スシヨウリをチラつかされて、無視できるほど余裕はないさ」

「つまり、僕の作戦勝ちだね」

冗談めかして笑う。イヤミのない綺麗きれいな笑顔に、雷真は若干じやつかんげんなりした。

（ハラの読めない男だな……）

やりづらいものを感じながら、会話の続きをうながす。

「で、誰の参加資格をくれるんだ？ あんたのものじゃないんだろう？」

「今回の問題が片付くなら、僕の参加資格くらい安いものさ——」

キラキラと、背景に星が散るような、まばゆい微笑みを見せる。

その直後、フェリクスは背景の星を消し、肩をすくめた。

「なんて言えるほど、僕はできた人間じゃないよ。魔王の座には未練がある」

「それを聞いて安心したぜ。これで、まともに話が聞ける」

「参加資格は夜会執行部が提供するよ。風紀委の総意として、君を執行部に推薦することになる。もつとも、僕らの推薦がなかったとしても——この件が片付く頃には、君の存在は執行部が無視できないほど大きくなっているだろうね」

まるで予言者のような台詞。それほど面倒なことを要求されるのだろうか。うさん臭いと思う一方、かなりの興味をそそられて、雷真はたずねた。

「俺は何を差し出せばいい？」

「人形使いをひとり、倒してもらいたい」

拍子抜けする。いや、拍子抜けと言うより、フェリクスの正気を疑った。

人形使いを倒す——そんなことは、言われなくてもやろうとしていた。風紀委が標的を指定するということか？ だが、そんなことが許されるとは……。

考え込んでいるうちに、夜々がお茶を淹れて戻ってきた。

黙り込むふたりを怪訝けげんそうに見ながら、テーブルの上にカップを置く。

フェリクスがカップを取り、優雅な所作しよさで口をつけた。雷真らいしんは焦じれて、

「誰だれをやればいいんだ？」

「カニバル——」  
「〈魔術喰い〉」

記憶を掘り返してみても、そんな登録コードの夜会参加者はいない。

フェリクスはカップを揺らし、嬉うれしそうに言った。

「確かに上手じょうずだね、君の自動人形オートマトンは。香りが飛んでいない」

「カニバル——つてのは誰なんだ」

「この学院ではね、毎年、何人か行方不明者ゆくふちやうが出るんだよ」

はぐらかしているわけではなさそうだ。雷真は黙って続きを待った。

「多くは自主退学。学院のカリキュラムは決して楽ではないからね、講義についていけない者は、いずれ振り落とされる運命だ。それに、授業料も決して安くはない。やめる理由はいくらでもある」

「わからないな。やめたけりや、退学届けを——」

途中で口をつぐむ。雷真にも、届けを出さない理由がわかった。

「そう、わけあって退学届けを出せない連中だよ」

学院は魔術世界の最高学府、極めて狭き門だ。資金と学力を自前で用意できる者はい

が、そうでない者には後援者の力が必要になる。

各国の軍部や財閥、教団、シンジケートなどが資金を出すことが多い。

途中で学院を抜けることは、そうした後援者の目には、裏切りと映るだろう。

かかった費用を返せと、補償金や違約金を迫られるだろうし――

最悪の場合、命を狙われるかもしれない。

「そういう中途退学者は地下に潜るしかない。魔道に堕ち、犯罪に手を染める者もいる。

学院生は引く手あまた――それは何も、目の当たる世界だけとは限らないからね。皮肉な

ことに、ツブシはいくらでも利くんだよ」

「……だろうな」

かく言う雷真自身、汚れ仕事を請け負う一族の出だ。

「でも、ちよつと様子が変なんだ」

声の調子が変わる。フェリクスは珍しくシリアスに、続きを言った。

「去年の十月、つまり新年度開始からの行方不明者は二六人――明らかに突出している。

それだけじゃない。破壊された自動人形オートマトンが見つかったケースも一二件ある」

「破壊された？」

「そう。単なる脱走者なら、自分の自動人形オートマトンを破壊したりはしない」

自動人形オートマトンは人形使いの財産だ。大事な商売道具だし、不要なら売り飛ばすこともできる。

壊す理由はない。

だとしたら。

「誰かが襲っている——」

「可能性が高い」

「おいおい……今の今まで野放しだったのか」

「もちろん、僕らも手をこまねいていたわけじゃない。この数か月、警備と協力して夜の巡回を強化した。もちろん、独自の捜査も続けていたよ」

「成果のほどは？」

「それがさっぱりでね。目撃証言もあるけれど、誇張された部分が多くて、ほとんど都市伝説になっている。切り裂きジャックの再来だよ。はつきりしているのは、この学院にはカニバル・サングレイ〈魔術喰い〉と呼ばれる何かがいる、そいつは自動人形オートマトンが大好物ってことさ」

「好物……ね」

びっくり、と夜々ヤヤが身を硬くする。自動人形の彼女にしてみれば、捕食されるというニュアンスが、不気味に思えたのだろう。

フェリクスがカップを置き、もとの笑顔に戻って言った。

「さて、もう僕の話はわかっただろう。カニバル・サングレイ〈魔術喰い〉は学院にとっても脅威——倒さなくてはならない敵だ。君が名を上げるにはもってこいの相手だよ」

「なぜ、俺にやらせる？」

「理由はふたつあるよ。ひとつは、君は〈魔術喰い〉じゃないということ」

「おや、あんたは違うのか？」

「学院生も、教授も、みんな容疑者だよ。僕も含めてね。でも、君は違う。ほんの数日前、この学院を訪れたばかりだ」

「……ふたつ目の理由は？」

「君が十分に強いってことさ」

煽っているのでも、おだてているのでもない。フェリクスは真剣な口調で言った。

「敵の実力は〈十三人〉に匹敵すると僕は見ている。並みの使い手では返り討ちだ」

「額面通りに受け取る気はないぜ。俺は〈下から二番目〉だからな」

「ずいぶんと自己評価が低いんだね、君は」

フェリクスは苦笑いした。

「君は数的不利をものともせず、複数の学院生を蹴散らした。知っているかい？ 彼らはもう少しで百位に届くっていう『補欠組』。実力的には上位なんだよ」

「だが、〈十三人〉とのあいだには天地の開きがある。俺が狙うのは魔王の座——連中に勝ったところで意味はない。それに」

雷真は唇をねじ曲げ、皮肉たつぷりに言った。

「あんたの本音は『資格をやるから騒ぎを起こすな』だろ？」

「正解」

フェリクスは悪びれもしない。

「学院の設備を損壊したり、第三者に被害を与えるのでなければ、学生の私闘に罰則規定はない——とは言え、風紀を守る立場としては、君の辻斬り行為を黙って見過ごすわけにはいかないからね」

「だから、エサを与えて飼ひ慣らそうってわけだ」

「フェアトレードと言つて欲しいね。君にも損はないはずだよ」

今度は、雷真が苦笑する番だった。

雷真の暴力行為を封じ込め、〈魔術喰い〉と対決させる。雷真が〈魔術喰い〉に勝てばよし、負けても風紀委に損はない。結局は、フェリクスのひとり勝ちだ。

「ここまでで、何か質問はあるかい？」

「夜会の参加者は百人だ。俺が参加資格を得たら——」

「当然、弾き出される者が出るよ。ただし」

フェリクスは笑顔のまま、切り捨てるように言つた。

「夜会二百年の歴史の中で、九九位や百位の者が魔王になったためしはない。君に弾き出されたところで、大勢に影響はないさ」

思ったよりも——いや、思った通り、冷徹な人間性の持ち主だ。

それゆえに、信用できる気がする。

案外、この話に乗るのも悪くないのでは……と考えた、そのとき。

「フェリクスー」

ノックもなしに、駆け込んでくる者がいた。

肩までの髪が活動的な、知的な眼鏡の少女だった。貴族的に整った、育ちのよさそうな容姿だが、シャルやフェリクスに比べれば地味な印象は否めない。腕には「Censor」の腕章が、手には夜会参加者を示す白い手袋がある。

その一瞬、雷真の五感が強烈な違和感を訴えた。

……が、その正体を確かめる間もなく、違和感は消えた。

来客に気付き、少女は驚いた様子で動きを止めた。人形のように硬い動きだ。

「紹介するよ、ライシン。彼女はリス。僕の、頼れるお目付け役だ」

少女は我に返った様子で、せき払いをした。

「失礼しました。主幹補佐のリゼット・ノルデンです」

「赤羽雷真だ」

フェリクスはからかうように、

「そんなにあわてて、君らしくもないね、リス。〈魔術喰い〉でも出たのかい？」

「はい」

冗談に真顔で返されて、さすがのフェリクスも笑みを引つ込めた。

リゼットはその動き同様、カッチリとした言葉遣いで報告した。

「技術科裏の本立<sup>こぞ</sup>ちで「喰<sup>く</sup>われた」人形が発見されました。昨晚、やられたようです」  
フェリクスはため息をつき、やれやれといった様子で雷真<sup>らいしん</sup>を振り返った。

「何て間の悪い……いや、よすぎる、と言うべきかな？」

肩をすくめ、膝<sup>ひざ</sup>を叩<sup>たた</sup>いて、立ち上がる。

「行ってみよう、ライシン。食べ残しが見られるよ」

### 3

その姿に、最初に気付いたのは夜々<sup>やや</sup>だった。

技術科校舎に向かう細い小道。一行<sup>いっこう</sup>が無言で歩く中、夜々はびくりと反応し、警戒する猫のような感じで、疑わしそうに前方を見つめた。

本立<sup>こぞ</sup>ちの暗がりの中、学生たちが人垣をなしている。その少し手前に、頭にドラゴンを乗せた少女が、不機嫌そうに立っていた。

「よう、シャル。シグムントも」

雷真は気安く声をかけた。……が、ちらちらと遠慮がちなシャルの視線は、雷真を素通りして、後ろのフェリクスに注がれていた。

「君もきていたのかい、シャル」

「騒ぎになってたから……」

うつむきがちに答えるシャル。

俺は無視かよ、と思わなくもないが、そこに突っ込むほど子どもでもない。

フェリクスはいつものように、友好的な微笑みを浮かべた。

「相変わらず、物見高いね。耳が早いと言うべきかな？」

「べ、別におかしくないでしょう。（魔術喰い）は無差別犯——私だって狙われる危険があるもの。他人事じゃないわ」

「はは、そうだね。気を悪くしたのなら謝るよ」

フェリクスはシャルの前をすり抜け、リズと並んで木立ちの奥に入って行った。見張りの風紀委員に声をかけ、さらに奥へと進む。

彼が先に行ってしまうと、シャルはしょぼんとした。憎まれ口を叩いてしまったことを、後悔している様子だ。

その態度を見て、色恋には疎い雷真もピンときた。

「おまえ、あいつに懸想してるのか」

「なつ、こつ、ばつ——」

かああつと、可哀相なくらい真っ赤になる。

おー、照れてる照れてる。

こいつでもこんな顔するんだな、などと感慨にふけていられたのもそこまで。

シャルは雷真の襟首をつかんで引き寄せ、噛みつくような剣幕で耳打ちした。

「下世話な言い方しないでー私のこれは、そんな低劣な感情じゃないわー」

「別に低劣じゃないだろ。惚れた腫れたは自然の摂理だ」

「黙れって言ってるのよ！ 心臓に風穴開けるわよー」

「ライシン、こつちへ」

フェリクスが人垣の向こうから手招きする。シャルはあわてて手を引つ込め、えへへと笑つてごまかした。雷真はやはり突つ込まず、急に機嫌がよくなった夜々を連れ、そちらに向かつて歩き出した。

木立を少し入ると、『Keep Out』のロープが巡らされていた。風紀委がその前を固め、野次馬が現場を荒らさないように見張っている。

まるで殺人事件だな、と思いながら、雷真はロープをくぐる。その感想はあながち誤りでもなかったようだ。そこに放置されていたものは――

ほとんど、死体だった。

シャルが「うつ」と小さくうめく。雷真もまた、思わず眉をひそめてしまった。上半身と下半身が、少し離れて転がっている。

断面からのぞくのは腹腔だ。内部機構もそこそこ作り込まれているので、人間の体内をのぞいているような気になる。はみ出したギアやコードが、かえって本物以上の不気味さを演出していた。

顔面は下半分がつぶされていて、原形をとどめていない。あたりには血のようなものが飛び散っていて、まるで獣に喰い散らかされたようなありさまだ。

そして、ひときわ目を惹く、奇妙な傷口。

本来なら心臓のあるべき場所が、丸くえぐり取られている。

その傷痕はひどくなめらかで、まるで舐め溶かされたキャンディのようだ。

(なるほど、それで「キャンディ」か……)

食人に、砂糖菓子。ありふれた単語をふたつ並べただけだが、特徴的な痕跡をひと言で表現している。

雷真はあごに手を当て、考え込んだ。

これとよく似た痕跡を、別の場所で見ている。

(まさか、な……)

ちらりと夜々の方をうかがうと、夜々はうつすら青ざめた顔で、死んだ人形を見下ろし

ていた。——少し怯おそえているようだ。

雷らい真まはフェリクスに視線を戻し、気付いたことを確かめた。

「魔術回路がないな？」

「それが敵の手口でね。必ず心臓部を——魔術回路のある部分を消滅させる」

「喰くった、つてことか？」

「それはわからない。誰も『食事』の現場を見てないからね」

自動人形オートマトンの自我は〈イブの心臓〉が生み出す……そうだ。〈イブの心臓〉さえ無事なら、自動人形オートマトンは再建できる。自動修復する人形もあるほどだ。逆に言えば、そこが破壊されることは、自動人形オートマトンの死を意味する。

「……これは誰の人形なんだ？ 使い手はどうした？」

その問いには、フェリクスではなく、リゼットが答えた。

「どちらも確認中です。が、状況から見て、この自動人形オートマトンは〈鉄球使い〉——貴方あなたが昨日きのう退けた、あの人形だと思われます」

確かに、見覚えのある鉄球が、人形の足を押し潰つぶしている。

だが——それは、おかしくないか？

「なあ、シャル。おまえはどう思う——」

声をかけようとして、どきりとする。

シャルは唇を引き結び、肩をわななかせて、虚空をにらみつけていた。

「どうしたんだ、おまえ」

シャルは返事もせずいきびすを返し、どこかへ行こうとした。

様子がおかしい。雷真はその腕をつかみ、引き止める。

「おい。ちょっと待てよ」

「離して。離しなさい！」

「おまえ、何か妙なことを考えてるだろ。闇雲に動いてもロクなことには」

「シグムント！」

魔力の伝導。仔竜が牙をむき、がぶりつ、と雷真の手に噛みついた。

「い——ってえ！」

夜々があわてて駆けてきて、雷真の手にすがりつこうとする。

「傷口を見せてください雷真——血が出てます——」

「おまえ舐める気だろ——あっちへ行け——」

などとドタバタやっているうちに、シャルの背中は見えなくなっていた。

「……行っちゃった」

「彼女はああ見えて直情径行だからね。じっとしていられなくなっただろう」

フェリクスが取り成すように言う。

「かく言う僕も、はらわたが煮えくり返る思いさ」

いつも通りに笑っているが——その目には鋭い光があった。

「僕に力を貸してくれないか、ライシン」

じつと雷真を見つめる。いつも細められているような目が、しつかりと開かれている。

その瞳が淡いブルーだと初めて気付いた。

「他人に貸すほど力はない……が」

雷真はぼりぼりと頭をかき、そして自嘲の笑みを浮かべた。

「俺は俺の都合で、参加資格が必要でね」

「それじゃ……？」

「少し、考えさせてくれ」

「もちろん。『取り引き先』の意向もあるだろうしね」

見透かしたように言う。ひょっとしたら、フェリクスはもう、雷真の背後に何が控えているか、つかんでいるのかも知れない。

「今日のところはお開きにしよう。僕は仕事をしなくちゃならない」

色よい返事を期待しているよ、と言って、フェリクスは現場の方へ戻って行った。学院の自治権は強力で、警察権も例外ではなく、それこそ殺人事件でも起きない限り、市警が出張してくることはない。そのぶん、風紀委と警備が重責を負うのだ。

彼らの邪魔をしても仕方がない。雷真は寮に帰ることにした。夜々を連れ、野次馬のあいだをすり抜ける。

木立ちを離れて、小道を少し進んだところで、

「待ってください、ライシン・アカバネ」

背後から呼び止められた。呼び止めたのは、フェリクスの補佐役、リゼットだ。きりつとした顔を近づけ、リゼットは雷真に耳打ちした。

「貴方に、話しておきたいことがあります」

「内緒の話か」

「はい。あまり、大っぴらに言うようなことはありません」

「男女の睦みごとかな？」

「寝言は死んでから言ってください——いえ、間違えました。死んでください」

「どこを間違えたんだ、どこを」

「雷真……— 罵られると燃えるクチ……!？」

「おまえも間違えてるぞ夜々。何かもうイロイロ根本的に」

雷真は品定めするようにリゼットを見た。

スレンダーな体つきや、知的な顔立ちを観察し、そして言った。

「夜々、おまえは先に帰れ」

「——嫌です！ 夜々も一緒に行きます！」

「いいから、寮に戻れ。早めに相談しなくちゃならないだろ？」  
含んだ言葉。その意味を察したらしく、夜々は不承不承うなずいた。

「……わかりました」

すうつと、夜々の瞳からハイライトが消える。夜々は抑揚の失せた声で、

「なるべく早く帰ってきてください……。寮が瓦礫になる前に……」

「するなよ？ 瓦礫にも魔城にもするなよ？」

とほとほと去っていく背中を見送り、雷真はリゼットに向き直った。

「それじゃ聞かせてもらうか。内緒の話ってやつを」

こつくりと首を上下させ、リゼットは先に立って歩き出した。

## 4

雷真が寮に戻ったのは、小一時間も経ってからだった。

「戻ったぞ。部屋は無事か、夜々」

おそるおそる部屋に入ると、夜々は泣きながら駆けてきた。

いきなりしゃがみ込み、雷真の腰にしがみつく。

問答無用でファスナーを下ろしかかる。雷真は夜々の頭にげんこつを見舞い、彼女の暴挙を中断させた。

「~~~~~っ」

「いきなり何の真似だ。妙なエラーでも起こしたのか」

夜々はへこたれず、漆黒の瞳をうるうると潤ませ、

「パンツを脱いでください雷真！ 話はそれからです！」

「おまえ迫いはぎ!? 山賊でももうちょいマシなコト言うぞ!」

「あの女狐がふざけたことをしてないか、ニオイで確かめるんです！」

「するか！ どんだけゆがんだ目で人を見てるんだ、おまえは！」

まわりつく夜々を強引にひっぺがす。

夜々はめそめそと泣き崩れたが、付き合ってられないので、雷真は無視した。

「で、硝子さんには相談したのか？」

「うっ、うっ……小紫が伝言を寄越しました」

「早いな。それで？」

夜々はすんすんと鼻を鳴らしながら、目元をぬぐい、ぼそぼそと言った。

「軍部の方針は、『GO』だそうです……」

正直、意外だった。雷真は思わず黙り込んでしまった。

「雷真……気に入らないのですか？」

「俺は軍の走狗、やれと言われりややるだけだ。……が」  
 確かめるように、夜々を見る。

「本当に、信用できるのか？」

「フェリクスさんを、ですか？」

「うさん臭い話だろ。俺に参加資格を与える——そんな権限が連中にあるのか？」

「小紫が言うには……」

夜々は目線を天井に向け、記憶を掘り返すように言った。

「キングスフォート家と言えば、英国課報機関ともつながりがある、貴族院の有力議員だそうです。お父上のウォルター卿は、亡き女王陛下の御世から権勢をふるう大英帝国の重鎮——学院もその意向は無視できないだろうと」

なるほど、そのくらいは既に調べがついているらしい。さすがに軍のやることだ。当然、目算があつて「GO」を出している。

それに、フェリクス自身も言っていた。風紀委の推薦を受けなくても、〈魔術喰い〉を倒せば、名声は一挙に高まる。夜会執行部も無視できなくなると。

先ほどの事件現場にも、大勢の学生たちが集まっていた。それだけ、耳目を集めているということだ。フェリクスの言葉に嘘はないだろう。

つまり——問題は、倒せるかどうかだ。

いや、見つけられるかどうか、かも知れない。

詳しい話はフェリクスに聞いてみなければわからないが、簡単に遭遇できるものなら、風紀委が（もしくは警備が）とつくに退治しているだろう。

（まずは捜すところから、か……。夜会の開催に間に合うか？）

思考の海に沈みそうになる雷真を、ばさばさという羽ばたき音が引き戻した。

鳥のような影が窓枠に降り立ち、こんこんと窓ガラスをノックする。

警戒する夜々を手で制し、雷真は笑って迎え入れた。

「よう、シグムント。シャルのおつかいか？」

「いや、私の独断だ。先ほどのことを詫（わ）びておきたいと思ってな」

シグムントの瞳（ひと）は、雷真の手、くつきりと残る菌形（きんけい）に向けられていた。

「こんなの、気にするな。もともと俺はおまえらをぶっ飛ばそうとしたんだし——つか、詫（わ）びを入れにくるとすれば、シャルだよな？」

あの瞬間、シャルから魔力が放出されていた。「囁（ささ）みつき」はシグムントの意志ではなく、シャルの意志によるものだ。

シグムントは小さな首を下に向け、すまなそうにつぶやいた。

「悪く思わないでやってくれ。本来は、私を強制（フコ）支配（チ）するような娘ではないのだが」

「氣が立つてたんだろ。犬でも猫でも、そういうときに手を出すと噛まれるんだ」

「猫か。それは言い得て妙だな」

ドラゴンの表情はよくわからないが、シグムントは苦笑したようだった。

「シャルは……」

言いくさそうにする。やがて、シグムントは思い切ったように、

「特異な事情があつてな。ときどき、神経過敏になる。間違つたこともする。決して素直ではない。だが、心根は優しい、手芸が趣味の、無害な娘だ」

雷真は耳を疑った。手芸？ 手芸ってあの……編み物とか、縫い物とか？

うわあ、似合わねえ。

「何で、そんなことを俺に言うんだ？」

「なぜかな。ただ、君には言っておきたいと思つたのだ」

——どういう意味だ？

「今夜のところは、これで失礼する。また会おう、雷真」

シグムントが窓枠を蹴る。その動きは軽快で、ほとんど鳥と大差ない。仔竜のときは、魔力を使わなくても、自力で飛行できるらしい。

遠ざかる影を目で追いながら、雷真はリゼットとの会話を思い出した。

「こんなことを言うのは、いささか氣が咎めますが」

先ほど、ひと気のない講義室で、一応はためらいがちに、リゼットは言った。

「シャルロットさんには気をつけてください」

「——何で？」

「彼女の登録コードは〈君臨せし暴虐〉。学生たちは〈暴竜〉と呼びますが——その由来を知っていますか？」

「いや」

「それはもともと、彼女ではなく、彼女の自動人形の二つ名でした」

「シグムントの？」

「あれは、禁忌人形です」

さすがに雷真も黙る。

禁忌人形。その響きには、どうしても、忌まわしい記憶を揺さぶられてしまう。

「プリュー伯爵家に代々伝わる伝承があります。初代プリュー侯は、魔の山に住まう暴竜シグムントを倒し、手なづけ、それを使役したと。その功をもって子爵に任ぜられ、子孫もまた、シグムントとともに武功を打ち立てたのだと」

「魔の山……ね。いかにも、だな」

「伝承では、人を喰い、街を焼き、悪業の限りを尽くしたそうです。今も、定期的に肉を喰らわねば、肉体を維持できないとか」

「チキンをな」

聞こえないくらいの小声で言う。既に、まともに聞く気はなくなっていた。

要するに、これは陰口だ。シャルとシグムントの、悪い噂を吹き込まれている。

「禁忌人形は呪われた存在。その特性もまた、ひどく理不尽な場合があります」

「らしいな」

「生き血をすすらねばならぬもの、人肉を喰らうもの、夜の闇の中でしか活動できぬもの

——あるいは、殺戮を楽しむもの」

「まわりくどいぜ。何が言いたいんだ」

「わかりませんか。脳みそに蛆でもわいているのですか」

「おまえ俺のこと嫌いだろ。毛虫のように嫌ってるだろ」

「（魔術喰い）もまた、禁忌人形ではないかと、私たちは考えています」

そういうことかよ、と思う。

雷真は何となく不愉快な気分で、リゼットから顔を背けた。

「それで、貴方が訊きたいことは？」

「ああ、それは——」

そこまで思い返したところで、強烈な寒気が雷真の回想をさえぎった。

振り向くと、どんより暗い皆既日食のような目で、夜々がこちらを見つめていた。

「雷真……あの女狐のことを考えてる……」

「……何で無駄にカンがいいんだ」

「それで、明日からどうしますか？」

「探ってみるさ。こうなった以上、カニバルキヤンパイ（魔術喰い）は俺が狩る」

ふっと笑い、「違うな」とかぶりを振る。

「俺たちが狩る。いいな、夜々」

「はい！」

元氣よく、手を挙げて応じる夜々。

それから、疑わしげな目をして、

「まさか、あの女狐が目当てで……!?」

「せわしない奴だな」

「やつぱりパンツを脱いでくださいー」

じりじりと間合いをはかり、蛇とマンガースのように牽制けんせいし合うふたり。

今夜もまた、眠れぬ夜になりそうだった。

午後九時。風紀委主幹の執務室では、フェリクスがテーブルの上に書類を広げ、珍しく真面目な顔で、何やら書き物をしていた。

コンコン、と正確なノックが二回鳴る。

「入ります」

入ってきたのはやはりリゼットだ。フェリクスはにつこりとして、

「ご苦労さま、リズ。用件は何だい？」

「ライシン・アカバネから、正式に依頼を受けたいという連絡がありました」

「よかった。それじゃ、明日にでも、これを彼に届けてくれないか」

書き上げたばかりの書類を差し出す。

「何ですか？」

「契約書だよ。こういうことはしつかりしておかないとね」

リゼットは驚いたように目を見張る。受け取って文面に目を通すと、そこには、先ほど雷真に話した通りの契約内容が書かれていた。彼が（魔術喰い）を倒せば、風紀委の総意として、夜会に推薦するというものだ。

「彼が依頼を受けると、わかっていたのですか？」

「受けざるを得ないさ。少なくとも、受けたくなるようにはしたつもりだよ」

何の不思議もない、という顔でフェリクスは答える。

「それに、彼なら受けてくれると信じていた。こんなときに彼がきてくれたのは、実が間がいい——まさに天の配剤だよ」

「彼を知っていたのですか？」

「いや、初対面さ。ただし、予備知識はあった」

くると椅子を回して、窓の外を見やる。

「知っているかい、リズ。彼がこの学院を訪れた日、街で鉄道事故があったんだ」

「事故？ ああ——脱線したとか、しないとか」

「扱いの小さな記事だったね。軽傷者二十名というから、それも仕方ない」  
さすがに頭がよく回る。それだけで、リゼットはもう察したようだ。

「もしや、その便に……？」

「うん、彼が乗っていた。ひょっとしたら、誰かが彼を狙ったのかも知れないな」  
偶然と片付けるには、確かにできすぎている。「問がよすぎる」のだ。

「でも、問題はそこじゃない。その事故に際して、彼はどうしたと思う？」

「……どうしたのですか？」

「暴走列車をね、受け止めたんだよ。彼の自動人形が」

「これから夜会に参加しようっていうときに、自動人形は唯一無二の財産。本当なら、傷もつけたくないはずだ」

列車は巨大な質量の塊。轢かれでもしたら、自動人形はコナゴナだ。

「でも彼は違った。破損する危険を冒して、彼は暴走列車を止め——多くの乗客を救った。自分だけ逃げることもできたのに、だよ？」

ふっと、フェリクス笑顔がやわらかくなる。

「彼なら、僕の力になってくれると、そう思った」

刹那、リゼットが複雑な表情を浮かべたことに、フェリクスは気付かない。

フェリクスは椅子を離れ、窓際に立って、夜の闇に目を凝らした。

「（魔術喰い）は、僕らが倒す。そうでなくちゃならない。夜会が始まる前に、この学院から消えてもらうよ。どんな卑劣な手段を講じてても、ね」

彼が眺める先には、夜のとばりが降りた世界。

今夜もそこに、恐るべき獣が現れる。

翌朝、ベッドの中でぐずぐずしていた雷真らいしんは、陶器の割れる音で覚醒かくせいした。

「……夜々やや？ 朝っぱらから、何をやって」

のそりと起き出し、音がした方に向かう。

部屋の入口のところで、夜々がたたずんでいた。手にはガラスのコップを持ち、足もとには水差しの破片が散らばっている。

その前には、頭にドラゴンを乗せた少女。

思わず目をこすってしまう。しかし、どうやら、それは夢でも幻でもない。

「……何やってんだ、おまえ。ここは男子寮だぞ？」

「知ってるわよ。余計な口を挟まないで」

「ずいぶんだな。何か用か？」

シャルはぎくつとして、急に挙動不審になった。

視線を右へやり、左へやり、また右へやる。

深呼吸して気を鎮め、ようやく、つぶやく。

「で……」

「で？」

「デート……、してあげてもいいわよ？」

その瞬間、夜々がコップを握りつぶした。





です。シャルロットさんにつき合っている暇なんて」

「いいぜ。放課後はあけておく」

ぱりんつ。しゃりしゃりんつ。

握っていたコップの破片を、さらに細かく砕く夜々。

「そ、それじゃ、私はもう行くわ。講義室で会いましょう」

まるでつき合い始めの恋人、という初々しさで、そそくさと去っていく。

そのぎこちない背中を、雷真はあくびをしながら見送った。

「何だ、あいつは。朝っぱらから気味が悪い——」

ぞくつ、と強烈な悪寒が走る。

死神の鎌を首筋に当てられたような錯覚。おそろおそろ振り向くと、夜々の髪が逆立ち、のたくるヘビのようにうねっていた。

「ちよ、待てて……な？　とりあえず、素数して深呼吸を数えろ……な？」

直後、朝のトータス寮に、断末魔のごとき悲鳴が響き渡った。

「……つくづく騒がしい男ですね。脳みそに回虫でも巣食っているのですか？」

首を絞められ、視界が闇に染まる寸前、聞き覚えのある声で罵られ、雷真は意識を取り

戻した。

我に返ったのか、それとも新手の出現に驚いたのか、夜々が雷真の喉笛から手を放す。

酸素を求めて暴れる肺をなだめつつ、雷真は声の主を見た。

そこに、眼鏡の女学生——リゼットが立っていた。背後に美形の寮監をとまっている。傍若無人なシャルとは違い、きちんと入寮許可を取ったようだ。

リゼットはにこりともせず、事務的な態度で、大きな封筒を差し出した。

「……何だ？」

「考えたらわかりませんか？ 脳みそに回虫でも巣食っているのですか？」

「何で回虫にこだわるんだ？」

リゼットは侮蔑的な一瞥をくれ、やはり事務的に言った。

「風紀委との契約書——そして、〈魔術喰い〉の資料です」

## 2

午後三時三十分。放課後、と言うにはまだ少し早い時刻。

講義はまだひとつ残っていたが、シャルの強い希望により、サボリが決定した。いつの間にか生傷の増えた雷真を見て、シャルは怪訝そうにした。

「何でそんなにボロボロなのよ。ライオンと取っ組み合いでもしたの？」

「気にするな。月の女神は嫉妬深いんだ」

「わけのわからない男。変態はみんなそうなの？」

わけがわからないのはおまえだ、という言葉が喉<sup>のど</sup>まで出かかった。シャルの気まぐれのおかげで、夜々<sup>ヤヤ</sup>は明らかに機嫌が悪い。今も、瞳孔<sup>どうこう</sup>が不自然に開いていて、まるで底なし沼のようだ。爪<sup>つめ</sup>にはちよつと血がついていたりする。

「まあいいわ。ついてきなさい」

シャルは先に立って講堂を出た。例によつて、彼女の帽子にはシグムントが張りついている。左右にしつばを振るさまが、妙に愛らしい。

それからしばらく、シャルは休むことなく歩き続けた。メインストリートを外れ、技術料の裏手だの、藪<sup>やぶ</sup>の中だの、裏庭だのを探索する。

どこへ向かっているのかとたずねても、「散歩よ」の一点張り。ひと気のない道ばかりを選んでいくようだが、別に何も見つからない。

そうして、実にあつけなく、不毛な二時間が過ぎ去った。

あたりには屋外灯がともし、太陽は堀<sup>ぼり</sup>の向こうに消えてしまった。

夜々の殺気が漂ってくるので、はつきり言つて落ち着かない。

シャルはまだ気が済まないらしい。昨晚、自動人形<sup>オートマトン</sup>の残骸<sup>ざんがい</sup>が発見された、ひと気のない小道を訪れ、偽物<sup>にせもの</sup>くさい胸をそらして命令した。

「ライシン、ここを十往復——いえ、二十往復して」

「……何のまじないだ？」

「バカね。おとりに決まってるじゃない」

予想通りの答え。雷真はうんざりして、ため息をついた。

「（魔術喰い）が現れても平気よ。私が倒してあげるから。だから安心して、心置きなく襲われなさい。さあ！」

「嫌だね。つか、（魔術喰い）が出るのは真夜中なんだろ」

「――誰に聞いたのよ」

ソースは風紀委だ。リゼットが寄越した資料を夜々が翻訳し、雷真に伝えていた。

資料によれば、（魔術喰い）が出没するのは深夜から早朝にかけて。

さらに言えば、二日続けて出現したことはない。

つまり、これからシャルがやろうとしていることは、まったくの無駄だ。

「それは凡人の発想よ。その固定観念にとらわれて、風紀委も警備も結果を出せてない。今日初めて、二夜連続で、この時間に出ないとは限らないじゃない」

「……まあ、それも理屈だけだな」

雷真はぼりぼりと頭をかいた。シャルはひどくやる気になっている。このまま、朝まで張り込みしかねない勢いだ。

埒が明かない。一計を案じ、別の方向から攻めてみる。

「ところで、デートするって話はどうなったんだ？」

シャルはきよんととして、

「してるじゃない、今」

「バカか。こんなものがデートのわけないだろ」

「ば——バカですって？ バカですって？ バカって言う方がバカなのよ！」

「要するに、おまえ、友達いないのか」

「なっ、こっ、ぐっ——」

「知り合ったばかりの俺おれくらいしか、手伝いを頼めるヤツがいなかったんだろ」

図星しやうせいだったらしい。シャルは若干、涙目になった。

「偉偉そうに何よっ、変態のくせに、知った風ふうな口をきかないで！」

「デートしてやる——なんて甘言かんげんを弄うして時間と体力を浪費させ、あまつさへ三途さんずの川かわに

プチ旅行させといて、変態呼ばわりか。大したお嬢お嬢さまだな」

「私は貴方あなたを手伝ってあげてるのよ。感謝されても、責められるいわれはないわ」

「何だ、おまえ。俺がフェリクスフェリクスの誘いいに乗ったこと、知ってるのか」

黙り込む。知ってるらしい。どこかで盗み聞きしていたのかもしれない。

そういうことなら。

雷真らいしんはちらりと夜々ややを盗み見た。正直、あまり気が進まないが……。

「探偵ゴッコはやめだ。そして、これからデートする」

雷真の言葉に、シャルが固まった。ついでに、夜々も固まった。

「か、勝手なこと言わないで。私は忙しいの。貴方と遊んでる暇はないわ」

「デートしてやるつつったのはおまえだろ。それとも、ブリーユ家つてのは、自分の言葉に責任を持たないお家柄なのか？」

痛いところを突かれたらしい。シャルは悔しげに肩を震わせ、

「わ……、わかったわよ。どこへでも連れて行きなさいよ」

「よし。それじゃ、街に行こう」

「街——って、学院の外……？」

「当然だろ。日も暮れたつてのに、学院の中でどうやって遊ぶんだ」

シャルは目に見えて狼狽した。急におどおどとして、足もとに目を落とす。

「だって、街には、その、シグムントが……」

「阿呆。デートしようつてのに、自動人形同伴もねーだろ」

「う……シグムント、何とか言いなさいー」

「ふむ。私もそれほど野暮ではない」

シグムントは四枚の翼を広げ、ひよい、とシャルの頭から飛び立った。

「いい機会だ。楽しんでくるがいい」

「裏切り者！」

保護者（？）の了解は得られたらしい。雷真らいしんは強引にシャルの手を引き、引きずるようにして、門に向かって歩き出した。

## 3

手をつないで遠ざかる男女を、夜々ややは青白い顔で見送った。

めきつ、と、もたれていた木がきしみをあげる。次の瞬間、立ち木は豆腐のように握りつぶされ、真まつ二つふたに折れてしまった。

そのまま、亡霊のようにふらふらと、門に向かって歩き出す夜々を、

「待て、夜々とやら」

彼女の黒髪をくわえて、シグムントが引き止めた。

「離してっ。離してくださいっ」

「忘れたのか？ 学院生の自動人形オートマトンは市街地に出ることができない」  
くいと小さな頭をもたげ、監獄かんごくのごとき門を示す。

「見る。警備が君を狙ねらっているぞ」

その言葉通り、銃眼じゆうがんで何かが光った。

光は冷たい。鋼鉄の輝きだ。明らかに、狙いをつけられた。

「警備にはこの卒業生もいると聞く。ライフル銃程度ならともかく、人形使いが相手では、破壊されるのは目に見えている」

「だって……っ」

「よく考えろ。君が問題を起せば、主に迷惑がかかるのだ」

銃弾よりも効果のある一撃。

夜々はしゅん、として、その場にへたり込んだ。

両手の甲を目元に当て、ぼろぼろと涙をこぼす。

「泣くな。もっと主を信用したらどうだ？」

「うう……信用……？」

「私はかれこれ一五〇年ほども生きている。人間を見る目は、それなりに磨いてきたつもりだ。彼の瞳に情欲はなかった。シャルが目的ではない」

「……本当ですか？」

「とは言え、あの年頃の男子は見境がない——それも事実だ」

再び、めめそめと泣き出す夜々。不思議なことに、こぼれ落ちた涙はまたたく間に結晶化し、地面に当たってころと音を立てた。

「やれやれ……君のそれは、もはや忠誠というレベルではないな」

シグメントはあきれたようだ。夜々の正面に着地し、若輩者を諭すように言う。

「我らは人間とは違う。君は外見的にも、機能的にも、人間と大差ないようだが——それでもなお、人間と対等にはなれないぞ」

「そんなの……わかつてます……」

「自動人形は操者からの魔力供給を受けて活動する。言わば、母親と子どものような関係だ。主に好意をいだくのは、至極自然なことではあるが……君の場合は度を越しているなぞ、そこまで彼に固執する？」

「それは……、その……、い、言えません、そんなのっ」

もじもじと恥じらい、地面に『の』の字を書く。そんな仕草は、極めて人間的だ。

「彼の目的と関係があるのか？」

「それは……」

「彼は何者だ？ なぜ、夜会にこだわる？」

「そのう……」

「我らを襲ったのも本意ではあるまい。それほどまでに、夜会にこだわる理由があるのだろうか？ それは何だ？ 野心や私欲のたぐいではないようだが」

「詳しいことは言えません。でも……」

しばし、逡巡<sup>しゆんそん</sup>。ややあつて、夜々は重々しくつぶやいた。

「雷真は、復讐のために」

「……ふむ。いずれにせよ、今このとき、我らの近くに主はいない」

ばさばさと飛んで、シグムントは夜々の頭にとまった。

（魔術喰い）には、気をつけねばな？」

「え——」

不意にあたりの闇が濃くなり、シグムントの瞳が猫の瞳のように光った。

4

「さすが機巧都市だな。こんな時間でも普通に商売してるとは」

ライトアップされた商店街を歩きながら、雷真は明るく言った。

日が沈んだというのに、通りは活気に満ちている。人通りもまだまだ途切れず、商店もレストランも客で賑わっていた。靴屋や洋服、宝石商に交じって、機械部品や魔術用品、完成品の自動人形を取り扱う店もある。

「学生さん、寄ってかないかい？」「安くしとくよ——」

という声が左右からかかる。雷真は笑って、

「おまけに、東洋人にも優しいときた」

「それは、貴方あなたが学院の制服を着てるからよ」

先ほどから不機嫌なシャルは、チクリと刺すように言った。

「留学生はお金を持つてるもの。彼らにとつては上客よ」

「そ、うい、うのは嫌いじゃないぜ。慈悲や博愛なんかより、よつぽど信じられる」

「ふん……殺伐さつぱつとしてるのね」

「こう見えて、俺おれはリァリストなんでね」

突然、シャルが首を締め、こそこそと雷真らいしんの陰に隠れた。

通りの向こうから歩いてくるのは、早くも出来上がった赤ら顔の男。

酔ってはいるが、別に、泥酔でいすいしているわけでもない。

「……どうかしたか？」

「な、何でもないわよ」

とは言うものの、シャルは明らかに落ち着かない様子だ。

不意に、背後で若者たちの笑い声があがり、シャルはびくつと伸び上がった。

雷真は立ち止まり、シャルと街の喧騒けんそうを見比べた。

「……ははーん」

「な、何がははーんよ。わかったような顔しないで」

「つまり、シグムントがいないと、心細いのか」

またしても図星。シャルはぐつと言葉に詰まった。

「人形使いにはありがちだな。心配すんな。俺の腕っ節は知ってるだろ？」

「……だから心配なのよ。貴方が送り狼にならないって保証はないわ」

「ずいぶん信用ないな。……ま、身から出たサビか」

苦笑して、歩き出す。シャルはあわてて追いかけてきた。何となく、置いていかれまいとする仔犬こいぬを思わせて、微笑ほほえみましい。

「きゅ、急に歩き出さないで。どこに行くのよ」

「運河沿いでも散歩するか。夜景が綺麗きれいだとか何とか、夜々ややが騒いでたし」

「……ふん、ベタベタね。そんなベタベタなコースしか思いつかないなら、もう帰らせて。お腹がすいたわ」

「よし。それじゃ、飯にしよう」

「寮に戻るのね？」

「つまんねーこと言うな。雰囲気ふんいきのいい店を探して、入ろうぜ」

「い、嫌よ！」

強く言ってから、シャルは急に口ごもり、ごによごによとつぶやいた。

「今月は……その、つまり経済的な困窮こんきゆうが……すなわち金融の不況で……」

「金のことなら心配するな。今日は財布持つてるし、おごってやるよ」

「え——♡」

きらきらつ、とシャルの目が輝く。

一瞬後、シャルは我に返り、ふんつとそつぽを向いた。

「変態のほどしは受けないわ」

しかし——胃袋は言葉を裏切つて、きゅるるゝ、と激しく自己主張をした。

シャルは見る見る赤くなり、ぽかぽかと雷真を叩いた。

「無礼者ゝっ！」

「……え、俺？ 俺のせいかな？」

「この私に恥をかかせるなんて……許せない……！」

そして、シャルはやけくそ気味に、涙ぐみながら宣言した。

「いいわよ。わかったわよ。もう徹底的におごらせてやるわよっ」

その二十分後、ふたりは運河沿いのレストランにいた。

案内されたのは二階のバルコニー席だ。

運河のあかりがよく見える。店の内装は鉄骨とレンガを組み合わせたモダンなもので、お高くとまっているふうでもなく、印象のいい店だった。

前菜は生ハムのマリネ。シャルははむはむと咀嚼しながら、珍しいものでも見るように、

雷真の手つきを観察した。

「日本人って、マナー最悪だって聞いたけど——案外、普通ね」

「言っとくが、フォークより箸の方が難しいんだぞ」

「スープの皿に口つけてすするんでしょ？ 音立てて」

「みそ汁すすって何が悪い。文化の違いだ。よその国の文化をけなすな」

軽口を叩き合いながら、特に陰悪になるでもなく、食事を進める。

香味の強い、澄んだスープが運ばれてくる。雷真には味が濃すぎたが、シャルのお気には召したようで、機嫌よく「まあまあね」と言っていた。

肉料理を待つあいだ、ふと、シャルと目が合った。

何か言いたげにこちらを見ている。

「どうかしたか？」

「別に。何でもないわよ」

「素直じゃないな。どうぞ、おっしゃってください、お嬢さま」

おどけて敬語を使ってみる。それで話す気になった……というわけでもないだろうが、シャルはためらいがちに口を開いた。

「……どうして、私を誘ったの？」

「誘ったのはおまえだろ」

「違うわよ。そうじゃなくて……昨日の、お昼」

目をそらす。鼻のつけ根がうす桃色に染まり、思いのほか可憐だ。

雷真はちよつと驚きながら、質問に答えた。

「何でって、そりゃ——流れ、だろ」

「何よ、流れって。問拔けな答え」

不満げな言葉とは裏腹に、シャルはまんざらでもなさそうに、小さく笑った。

「命知らずもいたものね。この《暴竜》にケンカを売った上に、ランチをこ一緒しようだ

なんて。本当に、救いようのないバカね」

「誉め言葉と受け取っておくよ」

「そのバカに質問があるわ」

「どうぞ、お嬢さま」

「私の参加資格を狙ったのは、どうして？」

そこへ、給仕が肉料理を持ってきた。見た目にもやわからかそうな子牛の肉だ。美しい焼

き色と、ソースの香りが食欲をそそる。

皿が置かれ、給仕が立ち去るのを待って、シャルは続きを言った。

「夜会の参加者は百人もいるのに。もっとくみしやすい相手もいたはずよ」

「……簡単に倒せるような相手じゃ、意味がない」

「夜会執行部に注目されるため？」

「いや……まあ、それもあるんだが、そういうんじゃないでさ」

ナイフを片手に、言葉を探す。説明するのは苦手だ。

シャルの言う通り、執行部にアピールするには、強敵を倒した方がいいだろう。

戦いに勝利しても、雷真が参加資格を得られるとは限らない。「補欠組」が繰り上がりで夜会参加……なんてことになったら、やり損だ。

だが、雷真が強敵を求めた理由は、それだけではない。

「俺は、他人を蹴落として、自分が成り上がろうとした。ある日突然やってきて、力尽くで参加資格をぶん捕ろうとした。それは、何か、違うだろ。だから、リスクを負わなきゃ許されないと……まあ、どのみち許されないんだが、その」

雷真は言葉を探して考え込み——結局は、あきらめた。

「悪い。やつば、俺にもわかんねーわ。つか、美味いぞ、この肉」

「……貴方って、何を考えてるのかわからない、思考の読めない男だと思ったけど」  
シャルは半眼になり、あきれ果てたように言った。

「何も考えてないのね。あつばっばーなのね。読めるはずがないわ」

「大体あつてる。質問はそれだけか？」

「もうひとつ訊くわ。貴方の戦い方、あれは何？ 人形と一緒に戦うなんて、あんなの、

初めて見たわ」

「ああ……あれはズルだ」

「ズル？」

「もともと、俺の流派は戦争屋でね。集団戦法が得意な一派……だつた」

シャルのフォークがびたりと止まる。興味を惹かれたようだ。

「軍団を操る——それが赤羽一門の傀儡師だ」

その瞬間、シャルは何かに気付いたような顔をした。

学院にはひとり、集団戦闘を得意とする者がいる。乙女型自動人形を六体同時に使役する、最強の人形使いが。

だが、シャルは何も言わなかった。子牛肉を口に運びながら、黙って続きを待つ。

その気遣いを好ましく思いながら、雷真は話を続けた。

「まあ、中には俺みたいな能無しもいてね。俺には夜々ひとりでも荷が重い。だもんで、人形の代わりに自分の体を使ったのさ。幸い、俺には武術の心得があつたからな。にわか仕込みの魔術より、コブシの方がアテになる」

「にわか仕込み……？　じゃあ、あの、東洋の呪文みたいのは？」

「呪言でも祝詞でもないぜ。吹鳴、森閑、光焰、天嶮——ありていに言えば風林火山だ。

初歩的な戦術概念を表した言葉だよ。ウチの一門の場合、合言葉……みたいなもんだな。

魔力の質、出力、戦術や陣形を夜々に伝えてるのさ」

「いちいち口頭こうたうで？ 何で、そんな、初心者しんしやうみたいなこと」

「初心者なんだよ。真面目まじめに傀儡かいらいをやり始めてから、俺はまだ二年とちょっとだ」  
かくん、とシャルのあごが外れた。

「あきれたわね。それじゃ貴方あなた、どうして魔王ワイスワンになりたいの？ 本職の魔術師でもないのに、わざわざ極東きょくとうからやってきて、どうして魔王ワイスワンに——」

びん、と指を立て、シャルの言葉を制する雷真。

「俺もいろいろワケありつてことさ。それじゃ、今度は俺が質問するぜ？」

はぐらかした。シャルは露骨ろこつに嫌そうな顔をしたが、拒むのも不公平だと思っただらしく、しぶしぶうなずいた。

「フェリクスとはどういう関係だ？ どこで知り合った？」

「何よ、気になるの？ 貴方あなたつて、やつぱりホ……」

「今何て言おうとした？ その視線にどんな意味を込めた？」

「……向こうから、声をかけて、くれたのよ」

シャルはほんのり頬ほおを染め、目を伏せた。

「私わたしって無意識に敵を増やしちゃうから……いえ、別にそれはそれでいいのよ？ ひとりである方が気楽だし、敵と馴なれ合うつもりはないしね？ でも」

ふと、サファイア色の瞳に翳りが差す。

「孤立するのもよしあしね。相手がひとりだとわかると、妙につけ上がる連中が出てくるもの。ロッカーを荒らしたり、カバンを隠したり……本当にヒマな連中ね。よくもまあ、そんなくだらないことを考えるわ」

忌ま忌ましげに言う。それから、ころっと表情を変え、微笑んだ。

「フェリクスは風紀委だから、いろいろ、気にかけてくれて」

「なるほどな。それで懸想したわけか」

「してないわよっ。変なこと言っていると焼き殺すわよー」

「本当は俺じゃなく、あいつとこうしてみたいよな？」

「なっ、こっ、そ……っ」

「誘われてはいるんだろ。何で断る？ 願ったりかなったりじゃないか」

「……だめよ」

怒気が消える。急に勢いをなくして、シャルはそっぽを向いた。

うす暗い運河に視線を投げ、虚ろな調子でつぶやく。

「フェリクスは、貴方と違って人気があるのよ。女の子たち、すごく熱狂的なんだから。もし、私がフェリクスとデートなんてしたら……」

「余計な敵を増やす、か」

黙ってしまふ。雷真はそれ以上踏み込まず、

「質問を変えるぜ。おまえは何で魔王を指す？」

「……貴方には関係ないわ」

「関係ないな。だが、興味はある」

シャルは少し考えてから、ぼつりと言った。

「夢を……叶えるためよ」

「夢？」

答えない。だが、きりりと引き結んだ唇に、悲愴な決意すら漂わせている。地位や名誉が目的でないことは、火を見るより明らかだ。

シャルにとって、それはとても大切なことなのだろう。それを聞かせてもらえるほど、雷真は彼女の信頼を得ていない。だから、この話はもうおしまいだ。

「おまえもいろいろ大変なんだな」

「ふん。貴方もそこそこ大変みたいね」

シャルはツンと言ひ捨てて——くすつ、と笑った。

くすくす。くすくす。

何がおかしいのか、楽しげに笑っている。そうやって笑うと、凶暴な問題児でも、高慢な貴族のお嬢さまでもなく、ごく普通の少女に見えた。

アイスクリームを三人前もおごらされた後で、雷真は立ち上がった。

「出るか。寮に戻る前に、ちょっと買い物に付き合つてくれ」

レストランを出て、シャルの歩幅で街を歩く。

市を冷やかし、靴屋に長居して、寮の門限が迫る頃、学院への帰路に着いた。

「見立ててくれて助かったぜ。女物はサッパリだからさ」

靴屋の包みをぼんぼんと叩き、となりのシャルに笑いかける。

「ふん。貴方にそんな気配りができるなんて意外だったわ。もつと無神経で、自分勝手に、

無礼な野蛮人の変態だと思つてたのに」

あんまりと言えばあんまりな言われよう。だが、その通りだと思う部分もある（変態は

違う）ので、言い返さない。

「それとも、そんな男が氣を使つちやうくらい、怖い子なのかしら？」

「まあ……怖いと言うか、危ないと言うか……」

「情けない男。自動人形に支配されるなんて、あべこべじゃない」

罵りながらも、言葉尻にトゲはない。シャルは自然体で笑つていた。

やがて、遠くに学院の門が見えてきたとき、不意にこんなことを言った。

「さっきの話だけど。貴方が、私を狙つた理由」

「ああ……わかんねー話か」

「わかるわ」

意外な言葉に、思わずそちらを振り向いてしまう。

「少しだけど、私にもわかる。罰を求める気持ち……私も、罪を犯したから」  
という意味だよ、とたずねようとして——進路上の異変に気がついた。

「何だ？」

時刻は午後九時を過ぎている。普段なら、学院は静まり返っている時間だ。

それなのに、門の向こうが妙に騒がしい。

「何よ？ ちょっと、どうし——ライシン!?」

後ろでシャルが叫ぶ。だが、立ち止まらない。雷真は疾風のように夜道を駆け、学院への道をひた走った。

## 5

思った通り、学院の敷地内は大騒ぎになっていた。

こんな時間だというのに、学生たちが集まって、押し合いへし合いやっている。

人だかりの最前列、『Keep Out』のロープの向こうに、ライトに照らされて忙しく立ち働く風紀委員たちの姿が見えた。

その中にフェリックスの姿を見つけ、雷真らいしんはロープを跳び越えた。

雷真を認めると、フェリックスはにっこりと笑った。

「やあ、お早いお着きだね」

「イヤミはよせよ。状況は？」

「また一体、自動人形オートマトンをやられたよ。見るかい？」

うなずく。フェリックスはその場を別の委員に任せ、雷真を庭園に案内した。

ふと、雷真の脳裏を、最悪の想像がかすめた。

まさか……、と思う。そんなはずはない……、とも。

自然と早足になってしまふ。駆け出したい気持ちをぐつとこらえ、雷真はフェリックスについていく。

その胸中きょうちゆうを見透かしたかのように、フェリックスが言った。

「今夜は、自動人形オートマトンを連れていないね？」

「街の外にいたんでね。そう言うあんただって——」

はたと疑問に突き当たる。

「あんたの自動人形オートマトンはどこだ。そういや、見たことがない」

「もちろん、（ロッカー）に預けてあるよ。僕はこれでも（十三人）——夜会が近いこの時期、下手に連れ歩いては、君のようなならず者に狙めがわれるからね」

事実、シャルは十人からの集団に襲撃された。ああしたゴタゴタをさけるため、手っ取り早く、自動人形オートマトンを連れ歩かない参加者も多い。

「なるほどね。自分の人形が使えないから、俺おれを利用する気になったのか」

「意地悪な言い方だね。でも、そう思われても仕方がないな。僕にとって君は」

「ライシン！」

背後から誰かが割り込み、フェリクスの言葉が宙に浮く。

激しく息を切らして、シャルがこちらに駆けてくる。

「フェリクス——」

「やあ、シャル。彼と街に行っていたのかい？」

鋭い。叱とがられたわけでもないのに、シャルははつきり畏縮いしゆくした。

「待って、違うの、私はただ——」

「さあ、ライシン。犠牲者はそこだよ」

シャルの言葉を冷たくさえぎり、フェリクスは植え込みの陰を示した。

数人の風紀委員に囲まれて、半壊はんかいした自動人形オートマトンが横たわっている。

今回は、上半身と下半身に分断ぶんさんされていない。自動人形オートマトンは女性型。心臓をむしり取った

ような傷痕きずあとがある。ライトで照らされたその傷は、部分的に溶けてはいるが、これまでと

は違い、かなり原形をとどめていた。

人形の肌は黒鉄色で——結論から言えば、夜々とは似ても似つかなかった。頭部の造作が、不思議と記憶に引かかる。

そのすぐ向こうには、残骸にすがりついて泣いている学生がいた。どうやら、人形の死を悼んでいるらしい。その顔を見て、雷真はようやく思い出した。

先日、シャルを襲った連中のひとり。水妖を使っていた学生だ。すると、これは水妖の遺骸か。ボディの様子が違ったので、一瞬、わからなかった。

当たり前と言えば当たり前だが、あの半透明のボディは、魔術で液体化していただけで、本体はやはり固形物で造られていたようだ。

しばらくのあいだ、シャルは呆然とその学生を見下ろしていた。

そして、まなじりを決し、燃えるような眼をして、きびすを返した。

「待つんだ、シャル」

背を向けたまま、思いのほか強い口調で、フェリクスが制止した。

「（魔術喰い）には、もうかかわらない方がいい」

「——でも！」

「（魔術喰い）のことは風紀委に任せてくれ。それと」

フェリクスがシャルを振り返る。

そこにいつもの笑顔はなく、彼は切なげに眉をゆがめていた。

「君の気持ちはわかったよ。残念だけど、僕は身を退く」

「え——」

「君は僕ではなく、ライシンを取った——そういうことなんだろう？」

シャルは愕然<sup>ガクゼン</sup>として、棒立ちになった。

「そんな、ちが……っ」

「……まだ作業が残ってるんだ。悪いけど、外してくれないか。それから——しばらく、

君とは会いたくない」

悄然<sup>しやうぜん</sup>と背中を向けて、行つてしまふ。

シャルは死人のように青ざめて、小刻みに震え出した。

「どう……どうしよう……っ」

「おい、落ち着け」

「私……フェリクスに……嫌われちゃ……っ」

「落ち着けて。あんなのは、くだらない誤解——」

「ほっというて！」

雷真の手を振り払い、そのまま、弾<sup>はじ</sup>かれたように走り去る。

か細い肩が遠ざかる。そのさまを、雷真は呆然と見送った。目にしたものが信じられず、思わずひとりごちてしまふ。

「……泣くことねーだろ」

つぶやきは夜風に溶け、泡のように消えた。

## 6

釈然としない気分で、雷真は寮の自室に戻った。

「……夜々？」

おそろおそろ、室内をのぞく。一体、どれだけふてくされているだろう？  
もしくは、憤怒か。どちらにしても気が重い。

しかし、だ。

「お帰りなさい雷真♡」

ばたばたと駆けてきた夜々は、この上もなく上機嫌だった。

「ごはんのしたく、できてますよ。今夜のは自信作なんです」

「いや……おまえ、何を言ってる……？」

寮の食事は食堂でとることになっている。自炊のための設備もない。

ちらりとテーブルに目をやって——ぎくりとする。

「何を……やってるんだ？」



「どうしたんですか？　早くテーブルについてください」

夜々<sup>やや</sup>はにこにこしながら、テーブルに雷真<sup>らいしん</sup>を誘う。

白いテーブルクロスの上には、たくさんの皿が並べられていた。

そのすべてが、カラっぽだ。

「おい、どうしたんだ。しつかりしろー」

「うふふ、どうもしませんよ？　おかしな雷真<sup>らいしん</sup>」

夜々<sup>やや</sup>はにこにこ笑っているが、その瞳<sup>ひとみ</sup>はひどく空虚<sup>くうきょ</sup>で、輝きがなかった。

雷真は背中に氷を落とされたような気がした。

まさか、思考回路に異常が……!?

どうしていいかわからず、雷真は夜々を引き寄せ、ぎゅーっと抱きしめた。

「俺<sup>かれ</sup>が悪かったー　だから正氣に戻れ！」

夜々はされるがまま、雷真の胸に顔を埋め――

そして、しくしくと泣き出した。

「うっ、うっ、ひどいです雷真……。夜々の気持ちを知ってるくせに、ほかの女と……」

「悪かった。だから、もう泣くな。ほら、おまえにおみやげだぞ」

靴屋の包みを差し出す。シャルをつき合わせて、街で買ったものだ。

夜々は驚いたように目を見張り、それから、不安と期待がないまぜになったような顔で、

かさこそと包みを解いた。

中から現れたのは、黒光りする編み上げブーツ。

多少古めかしいが、つくりがしつかりしていて、なかなかエレガントだ。

「線路の枕木を踏み抜いて、おまえの下駄はボロボロだろ。下駄じゃ戦いにくいし、鼻緒が切れたら危ないからな。しばらくはこいつを使え」

雷真にはかせてもらって、夜々はふんわり幸せそうに微笑んだ。

「びったりです……♡」

くるくると楽しげにターンを決める。

はしゃいではいるが、正気のようにだ。雷真はほっと安堵の息をついた。

「あのな、夜々。おまえは根本的に思い違いをしてる。俺は別に、シャルに惚れたとか、そんな理由で連れ出したわけじゃない」

誤解を放置するのは危険だ。囁んで含めるように、丁寧に説明する。

「そもそも、俺が好きなのはタイプは、あんなバツトを入れてるような小娘じゃなくてだな。

硝子さんみたいな、豊穠なる女神の谷間を持つ女性——」

「どうして偽乳だと知って……？ それにまた、硝子、硝子、硝子……っ！」

夜々が半ギレになっているのに気付き、あわててせき払いする。

「そんなことはどうでもいいんだよ。そうじゃなくて、俺がシャルと一緒に出かけたのは、

確かめたいことがあったからだ。(魔術喰い) がらみでな」

それだけで、夜々は鋭く察したようだ。目を丸くして、

「ひょっとして、シャルロットさんを疑っているんですか？」

「シグムントの(光)なら、(魔術喰い)と同じことができる」

雷真の頭にあるのは、氐め溶かされた鮎のような、あの特微的な傷痕だ。

「俺とシャルが学院を離れているあいだに、万が一、(魔術喰い)が動けば」

「シャルロットさんに不在証明ができるわけですね？」

「そうだ。そして、実際に(魔術喰い)は動いた——らしい」

「では、シャルロットさんは無実ということですか？」

「いや、かえってクロに近付いた」

いくら何でも都合がよすぎる。

これまで、(魔術喰い)が二日連続で動いたためしはない。今回の「狩り」は深夜では

なかったし、例の傷痕も中途半端。何もかもが異例だ。

今夜の「食事」には、虚構——欺瞞のにおいがする。

夜々は納得がいかないようだ。困ったように眉根を寄せ、

「でも、シグムントは私と一緒に留守番でした。人形使いが近くにいないければ、私たちは魔力を発揮できません」

「抜け道はある。禁忌人形だ」

禁忌人形は生体機巧。体内に「生きた人間のパーツ」を格納している。そのため、ある程度なら、自前で魔力を供給できるのだ。

「それじゃ、不在証明なんて何の意味も……。やっぱり、あれはデート……?」

「瞳孔を開くな。ちゃんと意味はあった」

夜々が疑わしげな目をする。だが、雷真は説明せず、思い巡らせた。

そうとも、シャルとのデートには意味があった。おかげで、敵の尻尾をつかんだ……気がする。さっきのあれが、本当に〈魔術喰い〉の仕業なのだとしたら――

思考がまとまりかけたそのとき、不意のノックが邪魔をした。

古びたドアの向こうから、無駄に響きのいい、寮監の声がする。

「ライシン。おまえに電話だ」

雷真は夜々を室内に残し、一階のロビーに下りた。

電話は寮監室の前にある。既に外れている受話器を取ると、

「夜分すみません。リゼット・ノルデンです」

「あんたか。何か用か?」

「用もないのに、何が悲しくて貴方などに電話しなければならないのですか?」

「……初めからこう言えばよかったな。何の用だ？」

「シャルロットさんの行方ゆくえを捜しています」

「——何だつて？」

「今、グリフォン女子寮からかけています。ご存知ないかも知れませんが、シャルロットさんも私も、この寮の所属なんです」

「あいつ、いないのか？」

「いたらこんな電話はしませんよ愚鈍な蛆虫ぐじちゅう」

「……だよな」

「もしか、貴方あなたのところでは不純異性交遊に耽ふけっているかとも思ったのですが」

「おまえは夜々ややか。発想が短絡的すぎるんだよ」

「貴方に罵ののしられるとは屈辱くつじやくです。行き先に心当たりはありませんか」

「……いや、ない」

その一瞬、先ほどシャルの頬ほを伝った、ひとすじの光を思い出した。

「ご存知なければけっこうです役立たず。では」

がちやんつ、とそっけなく通話は切れた。

受話器を置くのも忘れて、しばし、雷真らいまは立ち尽くした。

シャルのヤツ、また《魔術喰いまじゅくうい》を探しているのか？

それとも——何か早まった真似を？

(……いや、落ち着け。俺があせつてどうする)

シグムントが一緒なら、シャルは〈魔術喰い〉にも後れを取らない……はずだ。そして、

シグムントが一緒なら、シャルに愚かなことはさせまい。

だが、もし、シグムントが一緒でなければ。

「つたく、面倒臭いヤツだな……」

叩きつけるように受話器を置き、エントランスに向き直る。そのまま、寮の外に飛び出

そうとして——雷に打たれたように立ち止まった。

そこにいた者に、目を奪われてしまう。

ふるいつきたくなるような、とはよく言ったものだ。

大きく胸のあいた、ドレスのような着物姿。豊かな胸は輝くほどに白い。絶世の美貌を

隠すように、眼帯型の眼鏡で右目を覆っている。

女は妖艶な笑みを浮かべ、琴の音色に似た声で言った。

「いい夜ね、坊や。月が綺麗よ」

「硝子さん——」

雷真はようやく我に返り、やっとのことで、その名を呼んだ。



## Chapter 5 つまり、始めの、始めから

### 1

ひらひらと粉雪が舞い散る中、そのふたりは、鮮やかな色彩を放っていた。  
妖艶な美女と、麗しい少女。

どちらも艶やかな着物姿。少女が傘を持ち、美女を雪から守っている。

はたから見ると、姉妹のように見える。絢爛たるバラのごとき美女と、楚々とした野菊のごとき少女——雰囲気はまるで違うが、目鼻立ちに似通うところがある。

「ここね」

とある屋敷の前で、ふたりは足を止め、黒ずんだ門をくぐった。

火事があったらしい。屋敷はすっかり焼け落ちて、見る影もない。あたりには炭を焼いたような臭いが立ち込め、土はうつすらすすけている。

そのただ中に、ひとりの少年がいた。

肌を刺す冷気の中、もろ肌を脱ぎ、修験者のように印を結んでいる。古びた巻物を広げ、





魔力を練つて、目の前の木偶人形に魔力を注いでいる。

木偶はぐらぐらと、歩き始めの赤子より不安定な足取りで、歩き出す。

歩かせているのは少年だ。少年は全身汗まみれ。血管が切れそうなほど念を込めているが、その甲斐もなく、木偶は数歩で転んでしまった。

少年は荒い息をつきながら、歯が砕けそうなほど強く奥歯を噛み、こぶしを固く握つて、いら立ちを地面に叩きつけた。

鬼気迫る表情。頬はこけ、目は落ち窪み、しかし瞳だけがギラギラと光つて、ひどく不気味だ。既に死相めいたものさえ浮かんでいる。

少年は血走つた目を巻物に走らせ、再び印を結んだ。丹田に力を蓄え、そして——  
ごぶつ、と嫌な音を立て、血を吐いた。

激しくむせ、仰向けに倒れ、動かなくなる。

——頃合いだ。美女は少女の傘から出て、少年の方へと歩き出した。

「精が出るわね、坊や」

「……俺は坊やじゃねえ」

少年はかすれ声で返答した。まだ意識があるらしい。驚くべき体力だ。

「そうね。貴方には雷真つていう名前がある」

少年の目に警戒の色が浮かぶ。美女は悪戯っぽく微笑み、

「坊やのことはよく知っているわ。赤羽一門の、ただひとりの生き残り」

「……あんた、誰だ？」

「不勉強な坊やね。人形使いの家に生まれて、この私を知らないなんて」

連れの少女を振り向き、手招きする。

少女はすべて心得ているらしい。特に指示されたわけでもないのに、少年のすぐ目の前までくると、背中を向け、するりと着物を脱いだ。

ぎよっとする少年。だが、もはや、目を覆う体力もない。

少女の肌は極めて美しかった。シミもアザもなく、雪原のようになめらかだ。

その美しい背中、左下、腰骨の上あたりに、銘が刺青されている。

花柳斎、と読めた。

その雷名は天下に轟いている。軍上層部も一目置く、当代切つての人形師だ。

では——この少女は自動人形？

少年の双眸がわずかに見開かれた。少女の肌の色艶、みずみずしさに驚いている。その

質感は、生きた人間とまったく変わらないのだ。

「綺麗でしょう？　これが《雪月花》三部作のひとつ、《月》の夜々よ」

「……………!？」

存在だけは語られる、花柳斎秘蔵の真作《雪月花》。

いまだ世に出たことはない。どんな金持ちの娘だろうと、持っているはずがない。現時点で、（雪月花）<sup>せつげつか</sup>を持つてゐるのは、それを作った本人だけ。

血で汚れた顔をゆがめ、少年はかすかに苦笑した。

「冗談……。花柳齋<sup>かりやうさい</sup>は……。酒好きで、女好きの、とんでもない遊興惚け……。」

「あら、ちゃんと知ってるじゃない。ええ、そう、それは本当のこと。お酒も、女の子も、歌舞音曲も、みんな大好物よ」

「じゃあ、あんたが……。陸軍近衛師団<sup>こゑしだん</sup>の……。『臆富士』<sup>おびけふじ</sup>を作った……。」

美女は退屈そうにそつぽを向き、妙にくさくさした調子で言った。

「あれは失敗作だったわ」

「失敗……。!? 富士演習場の……。地形を変えちまうような、化け物が……。?」

「だって、美しくないんだもの」

絶句する少年をよそに、美女は勝手に話を進める。

「でも、浮き世には何ひとつ無駄なものがない——あの失敗作のおかげで、ずいぶん顔が広がったわ。今じゃ私も有名人。軍のお偉いさんにも顔が利くのよ」

ふつ、と凄絶な笑みを見せ、少年の瞳<sup>ひとみ</sup>をのぞき込む。

「坊やの願いを、叶えてあげられるほどにね」

「俺<sup>おれ</sup>の、願い……。?」

「ええ、そう。貴方が殺したいほど憎んでいる人を、捜してあげることができる」

「彼に対抗するために、最高の自動人形を貸してあげること」

少年の瞳が真横に流れ、美女のとなりの少女を映した。

雪月花が本当に噂通りのものなら、あるいは――

「ねえ、坊や。私のものになきなさい」

くすぐるような目つき。美女はふんわりと優しく、少年の頬に手を触れた。

少年は身を固くする。危険な猛獣ににらまれたかのように。

彼の瞳に浮かぶのは、得体の知れないものに対する、本能的な恐怖。

だが、同時に、魅せられている。

毒にも薬にもなる、強烈な存在に惹かれている。

「坊やの前にはふたつの道がある。今ここで凍え死ぬか、それとも――」

## 2

雷真は哑然として、不意の来訪者を眺めた。

見間違はずもない。二年前、雷真の前に現れたときと変わらぬ美貌。自らが作り出す

人形たちにも劣らない、きらびやかな美しさ。そして、雷真を魅了してやまない、官能的な胸のふくらみ。

今夜の彼女も、背後に美少女を従えている。顔立ちは夜々に似ているが、こちらは銀髪で、目元が凛々しく、夜々より少しだけ背が高い。

「硝子さん、何でここに……」

しー、と唇の前で指を立てる硝子。

「ライシン。どうかしたのか？」

美形の寮監が不思議そうに顔を出す。雷真は「しまった」と思ったが、

「何だよ。何もないじゃないか」

と言って、寮監は首を引つ込めた。

——このふたりが見えていない？

「部屋に行きましょう」

雷真の耳元で硝子が言う。ほのかに香るクチナシの香りに、寮監は怪訝そうに眉をひそめたが、そこに絶世の美女がいるとは、夢にも思っていないようだ。

隠形の魔術だ。夜々の姉妹機、小紫が得意とする。

状況をのみ込むと、雷真は素知らぬ風を装って、自室に引き返した。

本音を言えば、今すぐにでもシャルを探しに行きたかったが、わざわざ硝子が出向いて

くるなど、ただごとではない。

部屋に戻ると、夜々は飛び上がらんばかりに驚いた。

「硝子―」

硝子は我が子を見るように目を細め、

「元気そうね、夜々」

「はい。夜々は正常稼動中です」

「正常に稼動していて、どうして涙のあとが残るのだ」

不意の横槍。硝子の背後に控えていた美少女が、とがめるように言った。

夜々は後ずさり、警戒感をあらわにする。

「……いたんですか、いろり姉さま」

「ほう。客の人数も把握できないほどたるんでいるのか、おまえは。それとも、その目は

節穴か？ ただのドールアイか？」

「今のは皮肉ですつ。夜々はたるんでなんかいません」

「おまえ、そんな調子で、雷真殿に迷惑をかけているのではあるまいな？」

「そ、そんなことありません……」

「下世話な妄想で雷真殿を逆恨みしたり、妙な勘ぐりでやきもちを焼いたり、泣いたり、キレたり、嫉妬に狂ったりしているのではあるまいな？」

「そそそ、そ、そんなこと……っ」

「少しは小紫を見習え。地味な仕事に文句も言わず、おまえのように色恋に我を忘れたりもせず、ただひたすらにお役目を果たしているのだぞ。大体おまえは」

「姉さまは意地悪だから嫌いです……っ」

そんな姉妹のやり取りをよそに、雷真は硝子に椅子をすすめ、茶を出した。

「それで硝子さん、どうして学院へ？」

言うまでもなく、学院の警備は厳重だ。自動人形を持ち込むとなると、かなりの危険をとまなう。たとえ、最高難度の魔術で気配を殺しているとしてもだ。

「坊やのことが心配で、いても立ってもいられなくなったのよ」

うふん、と色つばい流し目をくれる。むにゅっと押しつけられた胸、チラリとのぞいたうなじがまぶしく、雷真はとっさに鼻を押さえた。

ひやり、と夜々の殺気を背後に感じて、血の気は急激に引く。

「からかわないでくれ。何か理由があるんだろ」

「（魔術喰い）は、思ったより厄介な相手かもしれないわ」

「――！」

彼女は何か、新たな情報をつかんだのだ。無意識のうちに居住まいを正し、続きを待つ雷真。しかし、硝子は悠然と茶をすすり、焦らすように話題を変えた。

「ずいぶん無茶が過ぎるようね、坊や。十体もの自動人形を相手に、大立ち回りをやらかしたんですって？」

「……当初は、タイマンの予定だったんだ」

「そして、ただの一体も壊さなかった」

「壊したさ。半分はシャルの手柄だが、十体全部をスクラップに——」

眼帯にはめ込まれたレンズが光る。底の知れない淵のような、奥深い瞳に見つめられ、思わず言葉をのみ込んでしまう。

「心得違いをしてはだめよ、坊や。人形は、人間ではないわ」

鋭いひと言。刃物のようなその言葉に、夜々の肩が強張った。

「坊やの甘さは自惚れね。心臓を止めない限り、自動人形は決して死なない。慈悲をかけたばかりに、寝首をかれることもある。その手を汚さずに果たせるほど、坊やの望みはぬるくないはず。金輪際、甘えた感傷は棄てなさい」

「……そんな命令には従えない」

自分でも子どもっぽいと思いつつ、雷真は頑として抵抗する。

「自動人形にも自我があるだろう。痛みも感じる。楽しみもある。あいつらにだって、心があるんだ。人間とどこが違う」

「愚かな子……。坊やは何もわかっていない」

むしろ憐れみあわれを帯びた声で、硝子しょうじは冷ややかに言った。

「人を殺せば殺人罪——でも、人形を壊したところで器物損壊罪。坊やがどう思うかなんて関係ない。この隔たりが現実よ」

「それでも。俺おれにとつては、自動人形オートマタンもニンゲンだ。人形の心臓を止めるときは、人間を殺すつもりでやる。世間がどう思うかなんて関係ない。それが俺の傀儡道くわいどうだ」

「……つらくなるわよ？」

「覚悟の上さ」

「そう。だったら、その甘っちょろい傀儡の道を貫いてごらんささい」

突き放すような言葉。しかし、そう言った硝子は思いのほか優しく、うっすら微笑さえ浮かべていた。

見とれてしまう。それは、今まで見せてくれたどの笑顔よりも、綺麗きれいだった。

「カニバルキサンディ《魔術喰い》の話だったわね」

茶をすすり、話を戻す。

「坊やが思っているよりも、大きな敵ということよ」

「大きな……？」

「軍は行方不明者を手がかりにして、カニバルキサンディ《魔術喰い》の正体に迫ろうとしているわ。早速、犠牲者の搜索を始めたのだけれど」

「——見つからない」

「そう。二十人を超す少年少女たちが、すっかり消えてしまっているのよ。〈魔術喰い〉<sup>マジカルキヤンディ</sup>は人形を「食べる」だけでなく、その所有者を——ひよっとしたら死体を——隠しておける連中ということね。それこそ、食べちゃうみたいに」

死体を隠すのは骨が折れる。多くの殺人者が、死体の処理に困ってボロを出す。埋めた場所には掘り返した土が、解体した場所には血液が残る。そもそも、動かすだけでもひと苦労だ。生きている人間を隠す方がまだ楽かもしれないが——

それにしたって人数が多い。個人が隠匿<sup>いんとく</sup>できるとは思えない。

だから、「大きな敵」か。

「学院、もしくは王室、ひよっとしたら英国政府が囁<sup>ささ</sup>んでいるかもね」

「……学院と〈魔術喰い〉<sup>マジカルキヤンディ</sup>がグルだったのか？」

「だって、そうでしょう？ 学院は風紀委と警備、ふたつの組織に守られている。何者かが組織だった行動をとれば、すぐに勘付かれそうなものだわ」

だが、現実には見つかっていない。

これだけの失踪者<sup>しっそうしゃ</sup>を出しながら、その原因もわかっていない。

もし学院が裏で糸を引いているのなら、この不甲斐<sup>いがい</sup>ない結果にもうなずける。

風紀委も、警備も、それどころか教授陣も、すべてが敵——かもしれない？

「今なら、知らん顔もできるわよ？」

ごく短い時間、雷真は強い誘惑に駆られた。

確かに、このまま気付かぬフリを決め込めば——雷真がその程度の存在なら、学院も消そうとはしないだろう。せいぜい、風紀委に利用されるくらいで済む。

雷真には目的がある。倒さなければならぬ敵がいる。

余計な事件に関わり、あげく消されたのでは、悔やんでも悔やみきれない。  
だが。

「……見棄てたくないヤツがいる」

気がつくと、雷真はそうつぶやいていた。

「そいつはどうしようもない跳ねつかえりで、野蛮で、短気で、ひとりぼっちだ。でも、悪いヤツじゃない」

ぼつりぼつりと、思いつくまま言葉をつむぐ。

「そいつは今、何か俺の知らない理由で、〈魔術喰い〉に近付こうとしてる。あるいは、最初から核心にいる……らしい。おまけに、そいつにはちょっとした恩もあって……負い目もあって……ああくそ、面倒くせえー」

ぐしゃぐしゃと髪をかき回し、雷真は顔を上げた。

まっすぐに硝子を見つめ、告げる。

「俺は、そいつを助けたい」

「……私との『賭け』を覚えているわね？ 坊やは命を賭けたのよ。断りもなく、勝手に野垂れ死にすることは許されないわ」

雷真は奥歯を噛んだ。そうだ。硝子の言う通り、勝手に死ぬことは許されない。余計な危険を冒すことさえ、許されていない。だが――

シャルを見捨てることも、できない。

雷真の懊悩を見て取り、硝子はふっとため息をついた。

あきれたのでも、馬鹿にしたのでもなく、素直な、あたたかいため息だった。

「夜々、こっちにいらつしやい」

夜々を目の前に立たせ、胸のあたりに手を触れる。

刹那、どくんつ、と夜々の体が渡打った。

何が起こったのか、雷真には想像もつかない。ともかく、夜々は「きゅう……」と目を回し、真後ろに引っくり返った。

「おい、夜々！ 大丈夫か？」

あわてて抱き起こす。夜々はまだ目を回しているが、外傷はない。

「覚えておきなさい、坊や」

疑問を挟む余裕も与えず、硝子のかぶせるように言った。

「夜々の（金剛力）は天下無敵——だけれど、この世の因果にだけは、逆らうことができないわ。たとえば、（君臨せし暴虐）の魔術回路（魔剣）」

「シグマントの光線か？」

「その表現は不正確ね。光は結果。空気が消滅するとき、光って見えるだけ」

「あれがどういう魔術回路か、知っているのか？」

「想像はついているわ。宇宙の真理に関わる秘法よ。そして、そうである以上、対抗策はない。どんなに硬いものも、鏡であっても、あの魔術の前では無力。形あるものはすべて、消滅させられてしまうでしょう。直撃すれば、夜々は死ぬわ」

雷真の腕の中で、夜々はかすかに震えた。

「そして、もうひとつ。夜々の天敵は水と風よ」

「流体……？」

「そう。夜々にどれだけの力があっても、形ないものをとらえることはできない。実体のない相手には気をつけなさい」

「……わかった」

雷真と夜々がうなずくのを見て、硝子も満足したようだ。

「引き止めて悪かったわね。気をつけて行ってらっしゃい」

「ああ。行くぞ、夜々」

「はい」

夜々がちゃんと立てるのを確認してから、雷真は自室を飛び出した。

## 3

雷真と夜々が出て行くのを、夜々の姉——いろりは複雑な想いで見送った。

「雷真殿はずいぶんと落ち着かれましたね。かつては、飢えた山犬のようでしたが」  
硝子はキセルを吸いながら、気のない返事をする。

「歳月は人を磨くものよ。憎しみや怒りも磨かれていくわ」

「しかし、あの雷真殿が、他人のために、自ら危険の渦中に飛び込もうなどと」

「あら。あの坊やは、他人のために、平気で貧乏くじを引ける子よ」

「……雷真殿は、もっと冷酷で利己的な人格かと思っていました。目的のためなら、平気で他人を傷つけられるような」

「ふふ……。おまえは夜々よりもたるんで、いるわね。この花柳斎、その目を節穴に作った覚えはなくてよ、いろり」

言葉は厳しく、語調は甘く、甘噛みのように叱る。

「冷酷なのは坊やではなく、坊やを取り巻く境遇よ。運命が彼にそうあることを強いる。」

利己的に見えるとしたら、それは復讐のための処世術——つまり、始めの、始めから、坊やはああいう子だったのよ。坊やはきつと、仇敵にさえ情けをかける」

「敵に手心を加えるとおっしゃるのですか？」

硝子は答えない。紫煙をくゆらせながら、ただ泰然と座している。

いろりは急に不安になった。

「主、雷真殿を行かせてしまつてよかつたのでしょうか？ 先ほどのお話ですと、雷真殿

は何か、巨大な敵を相手にせねばならぬと……」

「夜々が心配？ おまえは夜々が大好きだものね」

「なっ!? そ、そのような私的な感情では……っ」

白い肌を朱に染め、あわあわと両手で宙をかき回す。

「何の心配もいらないわ。夜々の〈戒め〉も解いたことだし」

いろりはますます不安になって、重ねて訊いた。

「……雷真殿は平気でしょうか？ 夜々に食い尽くされてしまうのでは」

「坊やはそんなにヤワじゃないわ」

「そうでしょうか？ 雷真殿は傀儡を始めてまだ数年——はつきり言えばひよっ子です。

きちんと説明を受けたなら、自分はその段階にないと判断されたはず」

「敵の器より、己の器を量り間違えることの方が多いものよ。坊やは気付いていないだけ。

自分が授かった天賦の才に」

くすりと、思い出したように笑う。

「初めて会ったとき、坊やは木偶で傀儡の修練をしていたわ」

「木偶で？」

木偶とは、《イブの心臓》を搭載していない、文字通りの木偶人形だ。

もちろん、木偶は自律していない。ゆえに、人形使いの魔力だけで、すべてを——関節のテンション、バランス、動きをコントロールしなければならない。いわゆる「念動」というやつで、修験を積んだ高位の法力僧でも難しい芸当だった。

いろりは素直に感嘆した。雷真は二年前の時点で、既に木偶を操るほどの魔力を持っていたのだ。硝子が彼に目をつけたのも、うなずける。

「坊やのお兄ちゃんは、木偶を生きた人間のように操った。でも、自分にはそれができない——だから、自分を無才だと決めつけてしまうのね。でも」

長いまつ毛を伏せ、うつとりとつぶやく。

「並みの人形使いなら、木偶を立たせることもできないわ」

それどころか、腕を一本、動かすことさえ。

「ふふ……本当に、末恐ろしい坊や」

「赤羽の家は陰陽師の家系。かつては護法や式神を自在に使役したと聞きます。さすがは

赤羽の血筋、といったところでしようか？」

「ええ、素晴らしいこと。でも、禍福はあざなえる縄のごとしね。その《紅翼の血》ゆえに、不幸もまた、彼ら兄妹を襲った」

いろりは口をつぐんだ。雷真の生い立ちや、兄妹を襲ったという悲劇、赤羽一門の滅亡について、詳しいことは聞かされていない。

主も、雷真も、詳細を語ってくれたことはない。

だが、それでいいと思っている。

いずれ時期がきて、語りたいと思ったときに教えてくれればいい。それまでは——無論その後も、我ら姉妹、有用な道具として、主のお役に立つだけだ。

だから、そのことには触れず、いろりは違うことをたずねた。

「雷真殿は、天全殿を倒せるでしょうか？」

「さあ。それは、やってみなければわからないわ」

「それは、可能性がある、と解釈しても？」

硝子は答えない。ただ、はるか彼方に視線を投げ、無言でキセルを吸っていた。しばらくして、あまりにも唐突に、つぶやく。

「復讐なんてくだらないわね」

「え——」

「真実を知ったら、坊やはさぞ、私を恨むでしょう」

かつて見たことがないほど、さみしげな微笑を浮かべる。

いろりの思考モジュールに数多くの疑問が渦巻く。

しかし、混乱した頭脳は、すぐに平静を取り戻し、思考を放棄する。

真実は、主がわかっていればいい。

いろりは窓の外に目をやり、夜天に浮かび上がる月を眺めた。

祈るような気持ちで、そつとこうべを垂れる。

雷真殿、ご武運を。

## 4

雷真は夜々を引き連れ、トータス寮を飛び出した。

門限はとうに過ぎている。寮監が裏返った声で制止したが、緊急事態なので無視する。

風紀委とのつながりとか、いちいち説明するのも面倒くさい。

屋外灯のあかりを頼りに、グリフォン女子寮に向かって駆ける。首筋をなでる夜風は冷

え切り、身震いがくるほどだった。

雷真の脳裏では、先ほど、フェリクスと交わした会話が再生されていた。

『おい、フェリクス』

シャルを突き放した背中を追いかけて、肩をつかんで引き止める。

フェリクスはてのひらを向け、なだめるような仕草をした。

『君の言いたいことはわかるよ、ライシン。僕だって、本気でシャルと君の関係を疑っているわけじゃない』

『だったら何であんなことを言ったんだ』

『もちろん、シャルのためさ』

『——どういう意味だ？』

『ああでも言わないと、彼女はまだ無茶を続けるだろう？ 彼女は連携が苦手だし、かと

言って単独行動は危険をとまなう』

雷真は黙った。言い返すことができなかった。確かに〈魔術喰い〉は危険だし、シャル

は風紀委の指示に従いそうにない。

だが、感情が納得せず、雷真は食い下がる。

『……それにしたって、シャルは傷ついたぜ』

『〈魔術喰い〉のことが片付いたら、きちんと埋め合わせるよ』

そう言ったフェリクスは、いつにも増して、真摯な目をしていた。

回想を打ち切り、雷真は舌打ちした。

片付いたら、では遅かったのかもしれない。

シャルは見た目ほど強くもなく、孤高でもない。

（早まるなよ、恐竜娘……！）

「――雷真！」

夜々が注意喚起する。回想にかまけて注意力が落ちていた。言われて初めて、反対方向から接近してくる気配に気付いた。

思わず臨戦態勢を取り、夜々に向かつて手をかざす。あちらも同じく反応し、身構えた。屋外灯のあかりを照り返し、相手の手元で何かが光る。

冷たい金属質の輝き――ナイフの光だ。

きな臭いものを感じる一方、相手の背格好に既視感を覚えていた。あちこち控えめな、ほっそりとしたスタイル。肩までの髪に、知的な眼鏡……これは。

「リゼット！ 俺だ！」

「ライシン・アカバネ……」

リゼットはナイフを下ろし、ランプを点灯して、雷真の顔を確認した。

彼女はひとりだった。例によって、自動人形は連れていない。

「シャルを捜してるのか？」

「ええ。ちょうど、トータス寮に向かっていました」

「俺おれのところへ？」

「貴方あなたのことですから、きっと飛び出してくると思ひまして」

「——それは、信頼かな？」

「図に乗らないでくださいサナダムシ」

「……悪かった。で、俺に何の用だ」

「貴方はどこへ向かつていたのですか？」

「おまえのところさ。もう少し、詳しい話が聞きたくてな」

リゼットは表情を曇らせ、わざとらしいほど大きなため息をついた。

「シャルロットさんの交友関係は決して広くありません。貴方が何の考えもなく、愚鈍ぐどんにウロチヨロしていることを考えると、状況は絶望的ですね」

「うん。もう少し言葉を選べ」

「彼女がほかに行きそうなところなんて、私には……」

唇に指を当て、考え込む。それから、ふと思いついたように、

「貴方は今日、彼女と一緒にだったのでしょうか。何か聞いていませんか？」

「いや、特には……。つか、原因はたぶんフェリクスだしな」

「自分の暗愚あんぐを棚に上げて責任転嫁ですか。大したイトミミズですね」

「何で罵倒ばとうのバリエーションが細長い虫に偏へんつてゐるんだ？」

そのとき、視界のすみにチラつくものを見つけ、雷真はあたりを見回した。

「……けっこう、騒がしいな」

よく見ると、木立ちの中や、建物の陰に、ひっそりと森く影がある。巧妙に気配を消しているが、雷真の五感是人並み外れて鋭敏だ。こうして立ち止まっていれば、彼らの気配を感じ取ることができる。

リゼットもそちらを見て、言いにくそうに言った。

「実は、風紀委が総力をあげて、シャルロットさんを捜しています」

「何で、そんなに大事に——まさか、シャルを疑ってるのか？」

風紀委が追うべき相手、つまり《魔術喰い》だと、そう考えているのか？

リゼットは眉ひとつ動かさなかったが、代わりに夜々が驚き、手で口を覆った。

雷真は問い質すようにリゼットをにらむ。

リゼットは躊躇したようだが、やがて観念したように、暴露した。

「先ほど、シャルロットさんの部屋で、多数の魔術回路が発見されたのです」

——魔術回路、だと？

それは、《魔術喰い》が消失させているという……？

「バカな！」

「事実です。発見したのは寮監ですし……」

思考がぐるぐると巡る。誰かがシャルを陥れようとして——いや、それはない。シャルが（魔術喰い）<sup>マジック・イーター</sup>だとして、光の魔術を使ったとすれば、魔術回路ごと消滅させてしまうはず。シャルを陥れるつもりなら、こんなやり方は逆効果だ。

それとも、雷真が知らない理由で、シャルは魔術回路を集めている……のか？

シャルの力なら、魔術回路を壊さない攻撃も、あるいは可能かもしれない。

「まだ（魔術喰い）<sup>マジック・イーター</sup>に奪われた回路と決まったわけではありません。現在、手すきの教授が鑑定中です。ただ、状態がひどいので、結果が出るのは明朝だと」

雷真は黙り込み、じっと思考に耽っている。

そんな雷真を使い物にならないと判断したのか、リゼットは浅く腰を折り、

「では、ここで別れましょう。私は搜索に戻りま——」

「待ってくれ」

呼び止められ、怪訝<sup>けげん</sup>そうに足を止めるリゼット。

雷真は確かめるように、妙に慎重な口調でたずねた。

「俺は今、風紀委の協力者……ってことで、いいんだよね？」

「そのつもりですが」

「なら、俺の『捜査』に協力してくれないか」

興味をそそられたのか、リゼットがこちらに向き直る。

「何をするんです？」

「ひとつ、この目で確かめたい場所がある」

そして、雷真はその場所を告げた。

リゼットは驚いたようだ。彼女にしては珍しく、あからさまな困惑を見せる。

「さすがに、そこは……私の一存では」

「誰の許可が必要だ？」

「……少し、待っていてください。フェリクスに相談してみます」

「協力してくれるのか？」

「場合が場合です。いくら考えなしのボウフラでも、この火急のときに言い出したからには、何か意味があるのでしよう？」

いろいろと引つかかるものいいだったが、うなずく。

リゼットは電話をかけると言って、きた道を行って行った。

それからしばらく、雷真は夜々とふたりで、冷気の中に立っていた。

夜々がびったり身を寄せてくるので、寒さはそれほどでもない。だが、待つというのは無性に忍耐を要するものだ。

交渉が難航しているのか、それともすっぱかされたか、あるいは、途中でアクシデントでもあったのか、リゼットはなかなか戻ってこない。

不安に耐えること十数分。ようやく戻ってきたリゼットは――

「感謝してください。フェリクスが執行部に話をつけてくれました」

あつさり、許可を勝ち取っていた。

「ご案内します。最大限、貴方あなたに協力するように言われてますので」

「恩に着るよ」

「貴方の感謝など願ねがい下くだげです。私も職務ですから」

リゼットはそっけなく言つて、先に立つて歩き出した。

彼女の案内で、学院の〈最重要区画〉へと向かう。

中央講堂の前を通り過ぎ、時計塔の裏庭を突っ切り、学院長の公邸を横切ったところで、

巨大な墓石のような、真四角の建物が見えてくる。

重要機巧保管施設、通称〈ロツカー〉だ。

「貴方あなたを中に入れるにあたって、ひとつ、条件があります」

普段より五割増しで厳しい顔を向け、リゼットは重々しく言った。

「あの中には休眠状態の自動人形オートマトンが大量に保管されています。もちろん、いずれも無防備です。貴方あなたがその気になれば、自動人形オートマトンを破壊し、所有者を夜会不参加に追い込むこともできるでしょう」

「ふざけるな。俺おれはそこまで腐くさっちゃいない」

「可能性の話をしているのですよアオミドロ」

「微生物まで格下げするな。わかったよ。夜々<sup>やや</sup>はここに置いていく」

「雷真<sup>らいしん</sup>……」

夜々が心配そうに見上げてくる。大きな瞳<sup>ひとまなこ</sup>がうるうるして、やたらとランプの光を照り返す。すがりつく仔犬<sup>こいぬ</sup>を思わせて、いたいけだ。

「何かあったらすぐに呼べ。おまえまで〈魔術喰い<sup>マジツクイ</sup>〉にやられたら、話にならない」

「夜々のことはいいんです。それより、雷真<sup>らいしん</sup>が……」

「心配するな。リゼットも一緒だ」

「その女とふたりつきりだなんて、貞操が危険です……っ」

「……またそれか」

「そんな心配は無用です色ボケ人形。万一そやつに襲われたら、私は舌を噛みます」

「襲わねーよ！ おまえら、そんな話ばかりだなー」

話がつくと、リゼットは再び先に立ち、真四角の建物へと歩き出した。

施設の入口には歩哨<sup>ほせう</sup>が立ち、詰め所には警備員が詰めていた。リゼットは風紀委の腕章を示しながら、警備員に用向きを伝えた。

既に連絡はいつていたらしい。警備員は入館を認め、マスターキーを手渡した。

建物の内部もまた、外観同様、飾り気がなく、無機質だった。床も壁も天井も、すべて

が直線で構成されていて、息が詰まる。

照明は消されているので、ランプのあかりを頼りに、奥へと進む。

「それで、貴方が確かめたいものは？」

「三回生の自動人形だ。俺の考えが正しけりや、《魔術喰い》カニバルオヤンデイ 搜索の決定打になる」

「それなら二階です。こちらへ」

「……なあ。ひとつ、訊いていいか？」

「恋人ならいませんが、貴方に抱かれるくらいなら死んだ方がマシですこの色魔」

「……………」

さすがにすべったと思ったのか、リゼットは恥ずかしそうにせき払いました。

「今のは冗談です。何ですか？」

「フェリクスオートマトンの自動人形は、どんな人形なのかと思ってな」

リゼットは少し考え込み、記憶を掘り返すようにして答えた。

「私も詳しいことは知りません。見たことくらいはありますが。嘘か真か、ルネサンス期

に作られたと聞いています」

「骨董品か」

「そうバカにしたものでもありませんよ。ルネサンス期は、人類の歴史から見ても、例外的に多くの天才が世に出た時期です。今では失われてしまった技術もあると言いますし、



いまだ未解析の魔術もあります。そういう「天才による奇跡」が、フェリクスオートマトンの自動人形にも、反映されているかもしれません」

「……道理だな。何せ、（十三人）に名を連ねるような自動人形だ」

何百年も前から生き残ってきて、今なお現役で結果を出している——そんな自動人形が、古いだけのはずがない。現代の名工をも凌駕する、何かがある。

「そいつは、どんな魔術回路を内蔵しているんだろうな？」

「さあ、そこまでは……。私は主幹補佐ですが、夜会の参加者でもあります。いずれは敵となる相手に、手の内を明かすようなことはしないでしよう」

「それも道理だ」

「ただ——」

「——ただ？」

「以前、野戦演習のときに、溶岩を操っていました」

「溶岩？」

「ええ。土くれを熱して、壱壕（げんごう）を作ったんです。ところが、別のときには、濃霧を操って敵チームを攪乱（かくらん）していました」

「霧……単なる水蒸気（すいじょうき）じゃなく？」

熱を操る魔術なら、溶岩も、霧も、生み出せる。

「もつと自在に、です。そう、まるで神経が通っているみたいに」

「何だそりゃ。まさか魔術を複数……いや、そんなわけないよな」

いずれにせよ、厄介な相手には違いない。溶岩と霧なら、どちらも流体だ。階段を上がりきったところで、リゼットが立ち止まった。

「フェリクスのロッカーは、右手奥の部屋にあります」

「いや、そちに用はない」

リゼットはいぶかるような目をした。

会話の流れから、フェリクスのロッカーを探していると思ったらしい。

雷真はリゼットの手からマスターキーをもぎ取り、逆方向へと歩き出した。

既に、建物の内部構造は把握している。

案内板に従って進むと、目的の部屋にはすぐ着いた。

「そこは——」

背後のリゼットが何事か言いかける。雷真はかまわず、扉を開け放った。

中には、棺桶くわんぼくのようなロッカーが、整然と並べられていた。

名札を頼りに、目的の箱を探す。

ほどなくして、それは見つかった。

登録コード（白い幻霧）——リゼット・ノルデン。

はやる心を抑え、マスターキーで錠を外し、問答無用でフタを開ける。

「……………」

箱の中にあつたのは、巨大なガラスの円筒だった。

試験管のオバケのようなものだ。中を満たす液体は、さながらホルマリン。その液体の中に、生物標本のような、少女の裸体が納められていた。

自動人形では、ない。

裂かれた胸からのぞくのは、本物の内臓、本物の肉だ。

雷真は己の愚かさを呪った。

俺は何というバカだ。こんな……こんな決定的なことに、気付かなかつた。

つまるところ、始めの、始めから、彼女はここにいたのだ。

ガラスの円筒に納められていたもの、それは――

リゼット・ノルデンの遺体だった。

次の瞬間、息が止まるほどの打撃が、雷真の背骨に叩き込まれた。



## Chapter 6 本性



### 1

前夜のこと。

喰くわれた人形を見た後、立ち去ろうとする雷真を、リゼットは呼び止めた。

そして、〈君臨せし暴虐タイラントレックス〉の危険性について、ひととおり忠告した。シグムントが禁忌キンギンの自動人形であることも、きちんと伝えた。

そのあとで。

「それで、貴方が訊ききたいこととは？」

「ああ、それは——」

目の前の男は、軽い調子で——しかし眼光だけは鋭く、こう言った。

「〈魔術喰いカニバルエATING〉が獲物を喰っていたとき、何であんたはそこにいたんだ？」

出会い頭に切りつけられたようなものだ。びくびくと、眉まゆが勝手に痙攣けいれんするのを感じる。リゼットは眼鏡めがねのブリッジを手で押さえ、顔を隠して問い返した。

「私が〈魔術喰い〉だと、そう言いたいのですか？」

「いたんだろ、あの場所に」

「いいえ。私はただ、通報を受けて、急行しただけです。私が現場に駆けつけたときには、既に〈魔術喰い〉はいませんでした」

「へえ。俺はまたてつきり、襲撃の瞬間を見たんだと思つたぜ」

「……なぜ、そう考えたのです？」

「ふうん。そうかい。なるほどな」

「不愉快です。思わせぶりの態度はやめてください」

雷真が横目でこちらを見る。質量をとまなうかのような、ずっしりと重く、力強い視線。無意識に怯む自分自身を、リゼットは止められなかった。

「喰われた人形は、こないだの〈鉄球使い〉だとおまえは言った」

「……言いました」

「何でわかった？ あの顔じゃ判別できないぜ」

「誰が見ても明白でしょう。あの特徴的な鉄球が――」

「喰われた人形の、足をつぶしていたっけな？」

リゼットははっとした。雷真の言いたいことが、ようやくわかる。

「そう、明白なのさ。あの状況を見れば、普通は〈鉄球使い〉が攻撃したと考える。武器

が逆用されたと考えるには、何らかの前提が必要なんだよ。たとえば——喰われた人形が（鉄球使い）だと、最初からわかっている……とかな」

「……普通に考えるなら」

声が震えそうになるのを必死にこらえ、リゼットは反論した。

「自分を特定させるような証拠を、現場に残していくとは考えられません。（魔術喰い）が用いたものならば、立ち去る際に回収するはずです」

「そうかな。喰い残しをそのまま放置していくようなヤツだぜ」

「——それは特定されるほどの痕跡こんせきではありません」

「と、おまえは考えたわけだ」

「揚げ足を取らないでください！ 私は潔白です！」

雷真は苦笑して、両手を広げ、なだめるような仕草しぐさをした。

「そうむきになるなよ。ちよつと疑問に思っただけさ」

くるりとその場で反転し、無防備な背中を向ける。

「用件はそれだけだ。じゃあな——つと、そうそう」

立ち止まる。雷真は肩越しに振り返り、

「誤解するな。あんたが（魔術喰い）カニバル・マジンダーだなんて、俺はひと言も言っていない」

「——」

「現場にいたと言っただけだ」

「……勘違いをしたようです」

ふっ、と憎たらしい笑みを残し、雷真は講義室を出て行った。

リゼットはきりつと唇を噛み——次の瞬間、教卓を殴りつけた。

教卓はたやすく砕け、無惨な残骸ざんがいとなって、バラバラと床に転がった。

## 2

月あかりも届かない、深海のような暗がり。

メインストリートから外れた、樹のトンネル。ここは昼でも薄暗い。

その暗がりをも、シャルが早足で歩いていた。

明らかに前のめり。足の運びは大またで、肩は怒っている。

そんな彼女の後ろから、ばさばさと羽ばたいて、シグムントが飛んできた。

「戻れ、シャル」

しかし、シャルは無視して進む。

「いつまでこんなことを続けるつもりだ」

「うるさいわね。黙ってついてきなさい」

「これ以上、罪を重ねるな。引き返してベッドに戻れ」

「ふん。こんなの、バレない限り罪じゃないわ」

「いい加減にしろ、シャル」

シグムントはシャルの正面に回り、カッと牙をむいた。器用にバックで飛行しながら、口うるさい古老のように、理屈っぽく叱る。

「もうわかってるだろう。こんなやり方では、仮に目的を達したとしても、君は幸福になれない。一生、日陰者で過ごすつもりか。今の君に必要なのは他者の承認だ。ひとりで背負い込もうとするな。日の当たる世界を、友と手を携えて歩け」

「うるさいったら、うるさい！」

べちんつ、とシグムントを手で払いのける。

「口を挟まないで。三食、ピーナッツ尽くしにされたいの？」

叩かれたシグムントは、しぶとく姿勢を立て直し、再びシャルの前に回る。

「何をあせっている。フェリクスに何か言われたのか？」

ぐつと言葉に詰まるシャル。

シグムントはあきれた様子でため息をついた。

「君は顔に出るな。わかりやすいにもほどがある」

「うるさい。わかったなら、黙って手伝いなさい」

「なおさら否だ、シャル。あの男に認められたいのなら、こんな無茶はよせ。功をあせるな。正々堂々、実力で夜会を勝ち抜き、周囲の雑音をねじ伏せろ」

びたつとシャルの足が止まる。

シグムントの言葉が刺さったのか、シャルは苦しげに顔をゆがめた。

「でも、許せないのよ……！ このまま、黙って見ているなんて……！」

「君は法の番人でも、執行者でもない。君が裁きをくだすことは、ただの私情だ」

「そんなの、卑怯者の理屈よ！ 高貴なる者の義務は——」

ぽつ、とシャルの瞳に怒りの炎が燃え——

一瞬後、それは鎮火し、弱々しい燃えかすだけが残った。

シグムントが指摘するまでもなく、気付いたのだらう。

シャルは、個人的な怒りや憎しみを、公憤にすり替えているだけだ。

しおれるシャルの肩に、シグムントがそつととまる。

「君の夢は尊い。正義のない戦いで、夢を汚すな。君は君の家族を——」

「……おしゃべりは終わりよ、シグムント」

不意の緊張感が声に漂う。シグムントは即座に反応し、頭を高くもたげ、付近の暗がり  
に知覚の糸を張り巡らせた。

そして、気付く。

右斜め前方、五十メートルほどの場所に、異質な存在が蠢いている！  
樹の根元、ひと際濃い闇の中、四本の足をつき、這い回る影。

息を潜め、音もなく動くそれは、人間——ではない。こんな時間に、こんなところを、  
四つん這いで歩く人間などいない。

自動人形だ。

シャルの口元がゆるむ。貴族的な顔が、一瞬、猙獰な獣の凄みを帯びた。

「ようやく、獲物を見つけたわ」

「待て、シャル。よく相手を見極めろ」

「良い子はみんなベッドの中よ。こんな時間にうろついてるヤツなんて……」

シャルの髪から、肩から、魔力があふれ出す。夜の暗闇にあって、それは青白く、月光のように輝く。シャルがシグムントに手をかざすと、魔力は光の束となり、シグムントに流れ込んだ。

シグムントの体が反応し、大きく——ならなかった。

「だめだ、シャル。ここでは、光量が足りない」

「なら、そのままでもいいわ。生け捕るわよ、ラスターフレア！」

仔竜があごを開く。まばゆく光る無数の針が放出され、影に向かって突き進んだ。その名の通り、砲ではなく、爆発だ。

それは狙い違わず、四つ足の自動人形に降りそそいだ。

腕に、脚に、光の針が突き刺さり、自動人形を地に縫いつける。

「やったわ！」

狂喜するシャル。捕らえた獲物を見極めようと、そちらに駆け寄った瞬間、

「動くな！」

四方から、すさまじい怒声が飛んできた。

樹上や植え込みの陰から、数人ぶんの気配が飛び出してくる。

気がつけば、シャルは取り囲まれていた。八人——十人はいる。それぞれがランプに火を灯し、シャルに向ける。彼らの態度は控えめに見ても敵対的だ。

そして、彼らの腕には、そろいの腕章が巻かれていた。

（風紀委員……!?）

何事かと動揺するシャルの前に、さりと金髪をなびかせて、彼が現れた。

「間がいいね、シャル。いや、よすぎると言うべきかな」

「フェリクス——」

フェリクスは憂鬱そうに首を振り、四本足の自動人形を示した。

「その自動人形は、僕のスペアだよ。〈魔術喰い〉が釣れるんじゃないかと思って、三体

ほど泳がせていたんだ」

シャルはまだ混乱している。フェリクス言う意味がわからない。捜査を妨害したこと  
を、責められているのだろうか？

「シャル。僕がどうしてここにいいのか、わかるね？」

「……おとり捜査」

フェリクスがうなずく。

「君が寮を抜け出したと聞いてね。ひょっとしたらと、非常線を張った」

疑われている……？

それがわかった途端、言いようのない恐怖にとらわれた。

「違うわ！ 私は、その自動人形が〈魔術喰い〉だと思って！」  
オートマトン カニバルキサンディ

「拘束しようとした、とでも？」

疑わしげな視線。そんな目で見られては、弁明も引つ込んでしまう。

「君は夜会の参加予定者だ。君にとっても、〈魔術喰い〉は確かに脅威だろうね。でも、  
積極的に探し出して、排除するほどの相手じゃないだろう？」

「私は……ただ……許せなくて……」

「君が深夜、たびたび寮を抜け出していたことは、寮監が証言している」  
リョウカン

シャルはびくりと身をすくめた。

それは、事実だ。

軽微ではあるが、シャルは規則を破り、「罪を重ねて」いた。

「気付かれていないと思つたかい？」

「でも、やましいところはないわ！ 寮を抜け出したのは——」

カニバルキヤンディ  
「（魔術喰い）を捜すためだった」

「……そうよ——」

「ああ、シャル……。もう、そんな演技はしなくていいんだ」

「——」

フェリクスがかぶりを振る。あきらめたような、裏切られたような、苦りきった表情。彼の瞳にはもう、親しみも、優しさも存在しない。

「今にして思えば、君の行動は不可解だった。（魔術喰い）のやり口に義憤を感じているのかとも思つたけど——それもおかしな話だね」

ふう、とため息をひとつ。フェリクスの声から抑揚が消える。

「君は人間嫌いで、ほとんど人付き合ひもしない。襲われた学生に感情移入するようには思えないし、それに」

感情の動きが感じられない、ひどく平板な声で、フェリクスは言った。

「ライシン・アカバネとも親しくなった。人間嫌いの君が、辻斬りの彼とね」

「ちが……っ！」

「つまり、君は（魔術喰い）を憎む——フリをしていた」

「違うわ！ 私は本当に！」

「すべて、自分の嫌疑をそらすためだったと考えれば、つじつまが合う」

「どうして—— どうしてそんなことを言うの？ 一体、何を証拠に！」

「証拠なら出たよ。君の部屋からわんさとね」

シャルは目をむいた。まさか——あれを見つけたのか！

「誤解よ！ あの魔術回路は——」

風紀委員たちがどよめき、シャルは己の失敗に気付いた。

「シャル……。やはり、あれは君が隠したものだんだね」

フェリクスが悲しげな顔をする。一応、第三者が隠した可能性——シャルに敵意を持つ者、あるいは（魔術喰い）本人の偽装を疑っていたらしい。だが、シャルが「魔術回路」という言葉を口にしたことで、疑惑は確信に変わったようだ。

だが、仕方がない。反論もない。実際のところ、大量の魔術回路を秘匿していたのは、ほかならぬシャル自身だ。

「君はこれまで、多くの学生に危害を加えてきたね」

それも事実なので、反論できない。

「君は孤立していて、周囲は敵だらけだった。そんな環境で、君は憎しみを募らせていた

んじゃないのかな？」

「……………どういふこと？」

フェリクスはひと言ずつ確かめるように、ゆっくりと言った。

「マジック・エクスプローダー（魔術喰い）が捜査の網に引っかからなかったのは、彼女がひとりぼっちで、誰もその動向を把握していなかったからだよ」

「……………」

「ライシン・アカバネが風紀委に協力すると知って、君は危機感を覚えた。なぜなら、彼は君を恐れず、君が拒否しても、近付いてきたから。誰かと距離が縮まれば、感づかれるおそれがある」

「……………」

「彼と外出したのは、アリバイを作って、疑惑をそらすためだった。それとも、懐柔するつもりだったのかな？ 幸か不幸か、君は美貌の持ち主だ」

肩が震えた。悔しかった。理由もなく自動人形オートマトンを壊すような人間だと、色仕掛けを働くような女だと、そんなふうに思われていたことが。

「もう、わかっただろう？」

フェリクスは長く、長く、肺をからっぽにするようなため息をついた。

無念そうにシャルを見つめ、そして。

「つまり、君が（魔術喰い）だ。シャルロット・ブリュー」

## 3

痛烈な打撃を背骨にもらい、雷真らいしんの体が飛んだ。

ロッカーをなぎ倒し、ガラスを砕き、壁に叩きつけられる。がしゃんっ、どちゃんっ、とさまざまの騒音が響き渡った。

ゆっくりと、床に血だまりが広がる。

舞い上がるほこりの中、雷真はロッカーに埋もれ、びくりともしない。

そのさまを、リゼットは無感動に見つめていた。

騒ぎを聞きつけ、すぐさま警備が飛んでくる。ほとんど音もなく、室内にすべり込んできたのはふた組の人形使いで、それぞれに自動人形オートマトンを従えていた。

完全に戦闘態勢だ。自動人形オートマトンを前に出し、リゼットに狙いをつけている。人形使いは極めて冷静な声で、「……何があつた？」とたずねた。

リゼットは荒い息を吐きながら、やや上ずった声で、返事をした。

「し……執行部の人を呼んでください」

「どうした。大丈夫か？」

「彼が……自動人形オートマトンを破壊しようとしたので、やむを得ず攻撃しました」

警戒はゆるめず、しかしリセットから狙いのぞを外して、ひとりが室内を確認する。

「なるほど。こりゃひどい」

血だまりをランプで照らし、人形使いは顔をしかめた。

「君がひとりでやったのか？」

「幸い、私の自動人形オートマトンがあつたので」

ロッカーを示す。相手は少し不審そうにしたが、問い詰めるでもなく、横たわる雷真らいしんに

視線を戻した。

「まだ息があるな。虫の息だが」

「急所は外した——つもりです。ですが、急いで医務室に運ぶべきかと」

「手配しよう。ここは任せる」

相棒に合図を送り、出て行くこうとするのを、「待ってください」と呼び止める。

「彼——ライシン・アカバネは（魔術喰い）マジカルキヤンディと通じていた可能性があります」

「どういうことだ？」

「ここで騒ぎを起こして、活動を援ける意図があつたようです。ほのめかすような発言を

していました。ですから、念のため、おもての自動人形オートマトンを……」

「わかった。拘束する」

「お願いします」

「君はどうする？」

「私は風紀委と合流して、このことを伝えなければ。今夜、マジック・カンパニー（魔術喰い）が動く——いえ、既に動いた可能性があります」

「ふむ……君はこの騒ぎの当事者だ。できればここに残ってもらいたい」

「すぐに戻ります。私は三回生Fクラス、リゼット・ノルデンです」

学生手帳を相手に渡す。それで、相手は信頼してくれたようだ。所属もはっきりしているし、風紀委の主幹補佐でもある。そういうことなら……という空気が流れ、リゼットの退出は、あっさり許された。

リゼットは自分のロッカーを封印すると、足早に部屋を後にした。

#### 4

墓標びぼうのような建物——通称（ロッカー）の前は、ちよつとした騒ぎになっていた。

騒ぎの中心にいるのは、誰だれあろう、雷真だ。ちようと、応急手当の真っ最中。やたらと乱暴な手つきで、ぐるぐると包帯を巻かれている。

彼の周囲を取り囲むのは、警備員に、風紀委員。雷真の手当てをしながら、施設の被害

をチエックしている。

雷真はぐったりとして、されるがままだ。薄目を開けているが、その瞳は何も見えていない。応急手当が終わり、タンカに乗せられても、身動きひとつしなかった。

「いやに騒がしいな。何かの祭りかね？」

殺気混じりの視線が集まる。そんな視線などどこ吹く風で、小道の奥から、女がふらりとやってきた。教官服を着て、白衣を風になびかせた、長身の女だ。

「キンバリー教授……。どうしてこちらに？」

誰からもなく声がかかる。キンバリーはしれつとして、

「たまたま、近くを通りかかったものでね」

「え？ こんな時間に……ですか？」

「少々、面倒な鑑定を頼まれてな。気分転換がてら、夜風にあたっていた……というわけだ。筋は通っているだろう？」

「はあ……」

ずかずかと輪の中心に入り込み、タンカの上の雷真に嘲笑を浴びせる。

「ざまあないな、（下から二番目）。不細工が台なしだぞ」

しかし、雷真は悪態にも反応しなかった。

「……何だ。こいつ、意識がないのか」

「はい。気絶しています」

「薄目を開けて気絶とは、キモイ奴だ。ふむ……呼吸が浅いな。体温も低い」

雷真の肌に触れてみて、危険な状況と理解する。

「私の勘では、アバラがイッてるぞ。肺に刺さるとコトだ。そっと運べよ」

注意を受け、タンカを運ぶ手がほんの少しだけ優しくなる。とは言え、割れものを扱う手つきにはほど遠い。雷真はゆさゆさと派手に揺さぶられながら、遠い医務室へと運ばれていった。

険しい顔でそれを見送り、キンバリーは誰にともなくたずねた。

「リンチにでもあったのか？ 全身、滅多打ちじゃないか」

「いえ、やったのは三回生のリゼット・ノルデンだそうです。彼が、ロッカー内で狼藉を働いたということだ」

「一対一で……あいつがあんなにされたのか？」

目を丸くする。キンバリーは急にきよろきよろとして、

「あいつの自動人形オートマトンはどこだ？ 黒髪の、小娘だ」

「ああ、それなら、そちらに」

警備員が示す方、警備の自動人形オートマトンに囲まれて、小さな少女が転がされていた。

後ろ手に縛られ、足首も拘束されている。首筋から背中にかけて、ざっくりと斬られた

傷があり、赤い肉がのぞいていた。おびただしい量の出血。全身に打撲傷。驚いたことに、血のにじみ具合や内出血の加減まで、見事に人間そっくりだ。

キンバリーはそれを見下ろして、眉間に深いシワを刻んだ。

「……ふん。こっちも半殺しか」

「あ、いや、その……暴れたものですから、つい……」

バツが悪そうに、警備員が言い訳する。

「暴れた？ ふうん……そのわりに、防衛側も見受けられんがな」

ほとんど無抵抗だったのだろう。ダメージは背中側に集中していて、腕や顔には傷痕がない。面倒をさけるため、不意打ちで黙らせたに違いなかった。

「ずいぶんと嚴重な拘束だな。レベルEの拘束リングが二本、魔力絶縁コードは三重巻き——君たちは伝説のドラゴンでも相手にしているのか？」

「しかし、この自動人形は、『補欠組』十体を退けたと聞いています」  
事なかれ主義者め、と内心でののしりつつ、キンバリーは訊いた。

「こいつは、これからどうするんだ？」

「執行部に運びます。ライシン・アカバネは《魔術喰い》と関連している……とかいないとかいう話でして。聴取の必要もありますし」

「あいつが、《魔術喰い》と？」

剣呑な気配が漂う。キンバリーは切れ長の眼をますます鋭くして、

「それは何かの冗談か？　そういうギャグが流行ってるのか？」

「いえ、その、詳しいことは私にもわからない——」

「——!?」

不意に、キンバリーが身構えた。素早く体を半身にひねり、ふところに手を差し入れる。それはまるで、訓練された軍人のように、機敏な動作だった。

「……教授？　どうかなさいましたか？」

「今——その自動人形が動かなかったかね？」

警備員は背後、マグロ状態の夜々を振り返り、気味悪そうに否定した。

「まさか。そんなはずはありませんよ。自我も封じていますし」

「いや、確かに動いたぞ」

「見間違いですよ、教授。魔力は完全に絶縁されています。この状態じゃ、しゃべることもできないはずですよ。そもそも、構造にもかなりのダメージが蓄積——」

「下がれ！　伏せろ！」

言うが早いか、キンバリーは後ろに跳んだ。

警備員は対応できない。ほんやり後ろを振り返り、そしてはね飛ばされる。

とごんつ、という爆発音とともに、青白い閃光が弾け飛ぶ。

膨大な魔力の漏出。爆風とも呼ぶべきそれが、夜々の全身から噴き出して、周囲の空気を吹き飛ばしたのだ。

（何だ……？ これは、まるで……化け物……？）

爆風の中、キンバリーが見たものは、金属製の拘束具を紙のように引きちぎる、夜々の姿だった。

シルエツトが、陽炎のごとく、ゆらめく。

激しい魔力の燃焼。ガスバーナーのように、青白い炎が噴き上がる。

（角が……ある……？）

月光を跳ね返す、純白の輝き。影のひたいには、ダイヤモンドに似たきらめきがある。その正体を確かめる間もなく、夜々は大気を裂いて、動いた。

その姿は、あたかも夜叉。

一瞬後、夜々の影はあとかたもなく消え失せ――

あとには、呆然と立ち尽くす男たちと、呆けたキンバリーが残された。

## 5

どおんつ、という爆音は、シャルのところまで響いてきた。

地響き。そして突風。風紀委員たちに動揺が走る。

「何の騒ぎだ?」「ロッカーの方だぞ」「主幹補佐に何かあったんじゃないや……?」

めいめい勝手に騒ぎ出すのを、フェリクスは手で制した。

「C、D班はあちらに回ってくれ。リゼットの方にトラブルだ。きっと応援が必要になる。残りはそのまま五十メートル後退。距離を保って包囲陣形」

風紀委のひとりが驚き、声を高くする。

「主幹、それは危険です。相手はあの(暴竜)なんですよ!」

「大丈夫だよ。僕はこれでも(十三人)のひとりだし——」

にっこりと、いつもの笑顔を浮かべるフェリクス。

「たった今、僕の自動人形も到着した」

その言葉通り、誰かがフェリクスの背後に現れた。降ってきた、と言うべきか。とす、

と軽やかな音とともに、女性的なシルエットが着地する。

それは武装した自動人形だった。言うなれば戦乙女。大時代的な甲冑を着込み、長柄の

大剣を携えている。フルフェイスの兜はいかめしく、まるで鬼面のようなだ。

(これが……フェリクスの自動人形……?)

シャルも初めて見る。それは、風紀委員たちも同じだったようだ。明らかに好奇の視線を注いでいる。警戒しているのか、シグメントが低くうなった。

「さあ、みんな下がってくれ」

風紀委員たちはお互いに顔を見合わせた。動きが鈍い。

「主幹、やはり承服できません。敵は〈暴竜〉ドレックスですし、その上、〈魔術喰い〉マジカルエATENダー——」

ふと、フェリクスの声が冷たくなった。

普段の彼からは想像もつかない、凍てつくような声音こゑで言う。

「君たちは足手まといになる、と言ったんだ」

全員の腰がひけた。それはもう、見てわかるくらいはつきりと。

風紀委員たちは指示に従い、包囲の輪を広げるように、四方に散っていった。

気配が急速に遠ざかる。やがて、あたりが静かになると、フェリクスはいつものように微笑ほほえんで、ささやき声で言った。

「これでゆっくり話せるね、シャル」

しん、と心が凍える。シャルはむしろ恐怖を感じながら、問いかけた。

「……私が〈魔術喰い〉マジカルエATENダーだなんて、本気で信じてるの？」

「もちろん、本気さ。そうでなくては困る」

——どういう意味だろう？

しかし、疑問を口にする前に、フェリクスはこんなことを言ったのだ。

「本当は彼——ライシン・アカバネが君を倒すはずだったんだけどね。行方不明の君を探して、まんまとおびき出されてくれた……ところまではよかったんだけど。まあ、いいさ。彼は彼で、十分に動いてくれたし」

「……ライシン？」

猛烈に嫌な予感。シャルは激しい喉の渴きを感じながら、訊いた。

「……彼にも、何かしたの？」

「彼なら、ついさつき始末したよ。残務は仲間がやってくれる」

「彼を殺したの!?」

「殺しはしない。壊しただけさ。人形もろともね」

「どうして……!?」

「彼がロッカーで破壊仕事を働いたからさ」

「——」

「もつとも、それはプラン修正の結果だけだね。彼にはまだ利用価値があったのに、残念だよ。でも、僕のロッカーならともかく、一番開けて欲しくないロッカーを開けてくれたから——これ以上、泳がせておくわけにはいかなかった」

利用価値? ロッカー?

何を言っているのか、わからない。

ぐるぐるとシャルの脳裏を巡るのは、別の言葉だ。

雷真は、私を探して——おびき出された？

「どうしてー わけがわからないー 彼を引っ張り込んだのは貴方なのに！」

「……やれやれ。これでも僕は、君のことを買っていたんだけどね。こんなに頭の回転が鈍いとは」

フェリクスは嘆息した。嘲りの色をありありと見せて、肩をすくめる。

そのとき、閃光のような思考が、シャルの頭脳に閃いた。

事件の全貌を理解する。認めたくない——最悪の——想像。

唇を噛む。膝が震える。錯乱しそうになりながら、シャルは言った。

「私を……利用……したの……？」

「間がよすぎたんだよ、シャル。恨むなら、めぐり合わせを恨むんだね。この魔蝕の年に、君と僕が、学院にいたことを」

いや……、とフェリクスはかぶりを振った。

ひび割れた大地のような、乾ききった笑みを浮かべる。

「君の（魔竜吼）が、僕の（魔術喰い）に似ていたことを」

ようやく、腹の底から、シャルは理解した。

つまり、そういうことだ。

話は、すべて、逆だった。

親しくなったシャルの魔術が、彼の魔術と似ていたのではない。

お互いの魔術が似ていたから、彼はシャルに近付いたのだ。

すべては周到に準備されていた。

気にかけてくれたのは、ただシャルに近付くため。

彼がくれた言葉も、優しさも、すべてまがいもの。

自身の罪をシャルに着せ、《魔術喰い》として抹殺するための——欺瞞。

つまり、フェリクスは、敵。

フェリクスこそ、《魔術喰い》だ！

その瞬間、比喻ではなく、シャルの世界は暗闇にのみ込まれた。

光も、音も、何もかもが消え失せる。肉という肉が鉛に置き換わったかのように、重く、

ただひたすら重く、シャルの上にのしかかった。

一体、誰が、シャルの言うことを信じてくれる？

相手は風紀委主幹。証拠はすべて、あちらに都合よく解釈されるだろう。それどころか、捏造することさえ可能だ。

シャルを弁護してくれる者、理解してくれる者、信じてくれる者はひとりもない。友を得る、というシグムントの助言が、今さらながらに思い起こされた。

ぼろり、と熱いものが頬を伝った。

感情が荒れ狂う。でも、どうすることもできない。途方もない無力感。シャルは幼い子どものようにしゃくり上げ、ただぼろぼろと涙を流した。

「ひどい……ひどいよお……こんなの……っ」

「心外だね。すべてを明かして、僕の誠意は見せたつもりだよ」

「どうして……？ どうして、こんなこと……」

「愚かなことを訊くね。この学院に籍を置いて、これ以外の動機があるのかい？」

フェリクスはすがすがしいくらい、きっぱりと言いつ切った。

「魔王になるためさ。僕は、魔術界の王になる」

鉄拳でぶん殴られたような気分だった。脳髄がしびれ、感覚がなくなる。

フェリクスはにっこりと、普段の彼らしく微笑み、優しく言った。

「夜会は無慈悲な生存競争、邪魔者を残らずつぶした者がすべてを得る——それが君の持論だったね」

「……………」

「君のそういうところは好きだったよ。僕も同じ意見だから。でも」

一転、冷やかな目をして、言い捨てる。

「どうしても、我慢できない部分もあった。——君の甘さだ」

そつと、かたわらの自動人形オートマートンに手をかざす。

彼のてのひらから、魔力の導線がのび、魔力の火が機関きかんに入る。

魔術回路はただちに起動した。自動人形オートマートンというデバイスを通して、フェリクスの魔力が物理的な現象に変換される。

見えざる力の集中。そして拡散。

一瞬後、人形の剣から、一条の光が放たれた。

それは反射——水のきらめきだ。

あたかも矢のように、猛烈な水流が飛来する。水は鋭い槍やりと化し、シャルのひたいを貫こうとした。

シグムントが跳躍し、小さな体を盾にして、シャルをかばう。

水流はシグムントの胴体をえぐった。鮮血が噴き出し、地面を濡らす。仔竜こりゅうはたまらず吹っ飛ばされ、くたつ、とその場にくずおれた。

「何をしている、シャル……！ 早く私を支配しろ……！」

シグムントが呼んでいる。だが、シャルの耳には届かない。

フェリクスが次なる一撃に備え、魔力を集中している。それすら視界に入らない。

シャルはへたり込んだまま、どうすることもできず、泣いていた。

もうろうとする頭で、必死になって考えている。

どうやって、謝ればいいのか。

自分だけなら、いい。私が愚かだったと、その罰を受けるだけだと、割り切れる。でも、フェリクスに討たれるのは、シャルだけではない。

私の愚かしさが、あのふたりを――

無礼だけれど、気のいい若者と。

その自動人形を、巻き込んでしまった。

彼らまで、ひどい目に遭わせてしまった。

「ライシン……ごめん――」

シャルのつぶやきをかき消して、水のきらめきが虚空を裂く。

凶器と化した切っ先が、シャルとシグムントを仲良く串刺しにする――

寸前。

がちいんつ、という金属音がシャルの鼓膜に突き刺さった。

我に返る。反射的に顔を上げると、ひどく美しい光景が目飛び込んできた。

キラキラと月光を弾きながら、まばゆく飛び散る水しぶき。

槍のごとき水流は、彼らに阻まれ、霧散した。

ふたりぶんの人影が、シャルの眼前に立っている。

水の槍を受け止め、弾き飛ばしたのは小柄な少女。

そのすぐ後ろには、少女の背中に手を当てた、彼の姿がある。

引きちぎった包帯が風に泳ぎ、あたかも女の髪のようなうだ。その全身は、暗がりでもわかるほどに傷つき、血だらけだった。

「謝るな、バカ」

血まみれの背中を向けたまま、彼はぶつきらばうに、しかし不思議なぬくもりのある声で言った。

「おまえが謝ることなんか、ひとつもねえ」

そして、彼は敵をにらみつける。

シャルを護って、戦うために。



## Chapter 7 永久に飢える獣

### 1

その少し前のこと。

タンカを運んでいた警備員は、『影のような姿』に襲撃された。

それはタンカの上の重傷者を奪って、一瞬のうちに立ち去ったという。

そして今、血のにおいを放ちながら、影が木立ちを駆けていた。

少女の姿。裂けた着物が夜風をはらみ、新雪のごとき柔肌をあらわにする。流れる黒髪はさらさらで、不思議とくたびれた様子がない。

言うまでもなく、それは夜々で、背中には別の影を乗せていた。

夜々の帯に右足を、夜々の肩に左膝を乗せ、言葉通り『乗って』いるのは雷真だ。驚異的なバランス感覚を発揮して、躍動する夜々にも振り落とされない。

「大丈夫ですか、雷真」

「大丈夫……だ」



ひたいで脂汗が光る。夜々が大地を蹴るたびに、雷真の体はぐつと力んだ。

どうやら、痛むらしい。夜々が速度を緩めようとする、

「心配するな。今は戦うことだけ考えろ」

明らかに無理をしている……が、夜々は素直に従った。主人が大丈夫と言っている以上、自動人形はそれを信じて、支えるだけだ。

「それより、さっきの続きを話せ。戦う前に知っておきたい」

夜々はうなずき、今日の夕刻、シグムントから聞いたことを話した。

「シャルロットさんは、離散した家族を探しているんです」

「離散？ あいつはいいところのお嬢さまなんだろう？」

「確かに、プリュー伯爵家は、英国が誇る機巧魔術の名門でした」

雷真は無言で続きを促す。夜々は林の中を駆け抜けながら、

「プリュー伯爵——シャルロットさんのお父さまは、自動人形の蒐集家としても知られた方でした。お邸には数多くの自動人形がいて、みんな仲良く、本当の『家族』のように暮らしていたそうです。でも……」

あるとき、「極めて身分の高い」男児が、客として訪れた。

その男児に、シャルの大型自動人形が怪我をさせてしまったという。

伯爵は王室から厳しい譴責を受けた。爵位は剥奪され、領地は召し上げ。『家族』のよ

うだった自動人形も、大部分が解体されてしまった。

「……ふん、迷惑なガキだな。どこのどいつだ、そのマヌケは」

「わかりません。シグムントは、『極めて身分の高い』男の子としか……」

資産を凍結されてしまったので、一家はたちまち困窮した。元伯爵は英国内で職を得られず、単身、自動人形の技師として仏国に渡った。

仕事は上手いかなかったようだ。元伯爵はほどなく消息を絶つ。

シャルが寄宿学校にいるあいだに、母と妹の行方もわからなくなった。

やがて学費が底をつき、シャルも寄宿学校を追い出されることになる。

かくして、シャルのもとには、シグムントだけが残された。

しかし、幸い……と言うべきか。プリュー家は機巧魔術の名門。風聞よりも実力を重んじるヴァルブルギス王立機巧学院は、重罪人の子女にも寛容だ。シャルは奨学金を得て、学院に入学することができた。

そして、そのときから、シャルの『夢』は始まったのだ。

「なるほどな。あいつが（魔術喰い）にキレていたのは、自動人形をただの『人形』とは思っていないから……か」

そして、彼女が言っていた『罪』とは――

一家離散の原因を、自分の自動人形が作ってしまったこと。

夜々の説明を聞いて、雷真らいしんは感慨深げにうなずいた。

「じゃあ、シャルの夢つてのは」

「はい。ブリュール伯爵家を再興することです。既に、奨学金をやりくりして、『家族』の心臓を買い戻しているとか」

とても大切なものを扱うように、夜々はそつと言葉をつむぐ。

「また、みんなで、暮らせるように」

「……嫌になるぜ、まったく」

雷真はぼりぼりと頭をかき、いらだたしげに舌打ちした。

「家族が一緒に暮らす——それだけのために夜会の頂点に立つって？ 並み居る人形使いを蹴散らして、魔王ワイスマンの座を目指すって？ 本気なら、俺おれ以上のバカだぜ」

吐き捨てるような言葉。だが、そんな言いざまとは裏腹に、夜々の肩をつかむ雷真の手は、燃えるように熱かった。

夜々には、わかる。

シャルの一寸いもすな夢を、もう少しで、雷真自身が壊してしまうところだった。

だからこそ、雷真は守りたいのだ。彼女の夢を。是が非でも。

だからこそ、夜々もまた、雷真の道具になりたいと願う。

夜々は血がたぎるのを感じながら、夜風を切り裂き、疾走した。

## 2

シャルをかばった背中中は、傷ついて血だらけだった。

手当ての途中だったのか、ボロボロの上着の下は、素肌に包帯を巻いただけ。その包帯もところどころ裂け、あまり役に立っていない。そんな状態でもはがれ落ちないのは、生乾きの血で貼りついているからだろう。

その背中中は、ふらついていた。

明らかに、血が足りていない。そんな状態でも、雷真はシャルをかばってくれた。

彼の姿がほやけて見え、シャルは口を覆った。

「ごめん……。ごめん……。なさい……」

「謝るなって言つたろ。似合わないぜ、恐竜娘」

「だって……！ 私<sup>あなた</sup>のせいで……貴方、そんな、傷だらけになって……！」

「違う」

強く、鋭く、絶対に認めない声で、雷真は否定した。

「傷だらけなのは、おまえだ」

雷真の背中から、静かに燃える炎のような、冷たい怒りが漂ってくる。



彼の怒り、彼の激情が、切り裂かれ、踏みにじられたシャルの心を包み込む。ほんの少しだけ、痛みがやわらぐ。

シャルは傷ついたシグムントを抱き上げ、きつと顔を上げた。

「……状況を理解していないのかな？」

雷真と夜々の向こうでは、フェリクスが困惑の色を見せていた。

「よく聞いてくれ、ライシン。(魔術喰い)の正体はシャルだったんだ。僕は風紀委主幹

として、彼女を捕縛しなければならな——」

「やれやれ。三文芝居は脚本まで三流だな」

びく、とフェリクスの頬が引きつった。

雷真はフェリクスをにらみつけ、おし殺した声で言った。

「こいつはな、敵が何人いようと——十人がかりだろうと、相手を殺さない」

雷真とシャルが初めて出会った、あの日。

あの戦いにおいて、シャルはただの一体も殺さなかった。

「ラスト・カノンは扱いの難しい(範囲攻撃)。おまけに威力も半端ねえ。あれだけの数を巻き込んで、殺さない方が骨だぜ。敵は卑劣な襲撃者——返り討ちにして殺したところで、文句を言うヤツはいないのに、だ」

そして、雷真は言い放った。

「自分の身が危ないときにも、敵の命を気にかける——そんなヤツが『魔術喰い』のわけねーんだよ」

その瞬間、シャルの胸を満たしたものは、真夏の太陽のように熱かった。ずっと、自分はひとりぼっちだと思っていた。

まわりは敵だらけだと。友情も、信頼も、自分には縁のないものだ。だが――

こんなところに、シャルを理解し、信じてくれる者が、いたのだ。

フェリクスは惘然として雷真を見つめていたが、やがて、ふっと笑みを漏らした。誘いをかけるような、不敵な声で問いかける。

「それじゃ、どうするんだい？」

「決まってる。おまえを倒して、『魔術喰い』騒動は終わりだ」

雷真のとなりで、夜々が身構え、軽く腰を落とす。

すうっと、フェリクスの双眸が鋭くなった。

「……僕に敵対するのかい？」

「ああ。おまえと、となりのリゼットにな」

一瞬、雷真が何を言ったのか、シャルには理解できなかった。

おそるおそる、目の前の背中にたずねる。

「リゼット、つて……?」

「言葉通りの意味だよ。あれは、ついさっきまで主幹補佐を務めていた女だ」

「だって、あれは魔術を使う……自動人形なのよ?」

「黙って見てろ。あの不細工な仮面をぶっ壊して、ツラを拝ませてやる」

ぶっ、とフェリクスが吹き出した。

「大きく出たね、ライシン。そんなことができるなら、やって見せてもらいた——」

「吹鳴四八衝」

はい、という夜々の返事は、はるか前方から聞こえた。

シャルの目には、夜々の体が透けたように見えた。それが網膜に残った残像だと気付く

まで、少しばかり時間がかかる。

まさに疾風。夜々は一足飛びに間合いを詰め、敵の自動人形に襲いかかった。

しかし、敵もさるもの。戦乙女が剣を振るい、夜々の突進を迎え撃つ。

刹那の交差。夜々は刃を素手で（一）払いのけ、鋭い貫き手を繰り出した。

戦乙女は首をそらしてかわしたが、指先が仮面にかすったらしい。仮面はたやすく変形し、引きちぎられるように割れた。

夜々が大きく飛び退き、とんぼを切って戻ってくる。彼女が雷真の前に着地したとき、戦乙女の仮面が落ちて、その素顔があらわになった。

中から現れたのは、愛想のない無表情。

まぎれもなく——リゼット・ノルデンの顔だった。

シャルは目をむいた。何か言おうとするのだが、空気の塊が喉の奥から漏れるばかりで、言葉にならない。

「落ち着け、シャル……」

狼狽するシャルの胸で、シグムントが冷静にささやく。

「人形の顔などいくらでも変えられる……。リゼット・ノルデンは、ある時点まで確かに人間だった……。おそらくは殺害し、すり替わったのだろう……」

人形の顔を実在の人間に似せるのは簡単だ。関節構造や肌の質感を人間そっくりにするのも、現代の技術なら可能だろう。

フェリクスは自動人形を改造し、リゼット・ノルデンの学籍を乗っ取ったのだ。

彼は黙っていた。風紀委も。寮監も、教授陣も。そして、シャルも。

信じていたものが次々と壊れていく感覚に、シャルは狼狽を通り越して戦慄した。何を信じればいいのか、わからなくなる。

一方、雷真は平然と、余裕さえ感じさせる口ぶりで言った。

「どのみち鉄仮面だが、そっちの方が綺麗だぜ。本当の名前は何て言うんだ？」

「愚かだね、ライシン。そんなことを君に教える理由はないよ」

「おまえは引つ込んでろよ、フェリクス。俺はそいつに訊いてんだ」

フェリクスが黙る。プライドを傷つけられたのか、その表情が醜くゆがむ。

彼のそんな顔は初めて見る。幻滅というものが、激しい痛みをとまなうのだと、シャルは生まれて初めて理解した。

リゼットは考え込んでいたが、ややあつて、「エリザ」と名乗った。

「OK、エリザ。おまえに訊くぜ。このまま退く気はないか？」

「――」

「道具は主を選べない。つまり、おまえに罪はない。おまえが何人殺しようとして、それがとがめ立てはしない。だから退け」

リゼット——エリザか——はさらに考え込み、やがて。

「寝言は寝てから言ってください。この蛆虫野郎」

「……それはおまえの意志なのか？」

「どうも、誤解があるようですね」

直後、エリザの無表情が崩れた。

口が耳まで裂けたと錯覚するほどの、悪魔的な笑み。

シャルの背筋を凍えさせる、凄絶な笑みとともに、人形は言った。

「貴方は、あなた 食事が嫌いですか？」

「……そいつを聞いて安心したぜ」

雷真らいしんがまとう気配が変わる。

それまでの、燃えたぎる怒りから——凍こてつくような殺気へと。

すつと右手を突き出し、左手を添える。雷真は魔力を振りしほり、叫んだ。

「光焰こうえん三二六衝こうせん！」

「はい！」

夜々ややが動く。まるで、撃発された弾丸だ。雷真が放出する膨大げうだいな魔力をその背に受け、

爆発的な速度で推進する。

そんな夜々を迎え撃つのは、無数に連なる水の槍やぐら。

ガガガッと機関銃のように、槍の雨が撃ち出される。だが、夜々は止まらない。その弾雨だんうに平然と体をさらし、燃え盛る火炎のように、真正面から突き進む。

シャルの位置からはよく見えないが、槍は夜々を貫通していかない。シグムントの装甲に穴をうがつほどの水流が、おそらくは肌を破ることもできずにいる。

夜々は一瞬で肉迫にくせきした。敵の剣をかわしざま、ベクトルを九十度真上に変え、宙に舞う。そのまま、真っ白なふとももを引き上げ、足を大きくふりかぶった。

渾身みみしんの力を込めて、かかとを叩たたきつける。

夜々の一撃は狙い違ちがわず、エリザの脳天を叩たたき潰つぶした。

刹那、ざぶんつ、という水音がシャルの鼓膜に届いた。

映像も音を裏切らない。盛大な水しぶきが上がり、足がすり抜ける。

エリザの体は水滴となつて、あたりに飛び散つた。だが、もちろん、それで終わりではない。水滴はするすると寄り集まり、水たまりとなる。その水たまりが盛り上がったかと思つと、それは人の形に——エリザになつた。

（水……!?）

エリザは水流を操るだけでなく、自らも液体に変化できるのだ。

これとよく似た魔術を、シャルは既に見撃している。この学院で、つい先日だ。

その魔術の使い手は、つい先ほど、《魔術喰い》カニバルキャンディに喰われてしまった。

水妖。あの自動人形が搭載していた魔術と、まったく同じだ。

ひょつとして……《魔術喰い》カニバルキャンディは、喰つた魔術を使えるのか？

「君の自動人形は力押しだね。残念だけど、殴る蹴るでリズは倒せないよ」

くつくつと笑いながら、フェリクスは挑発的に言つた。

「先の戦いも見せてもらったけど、君の戦いは単純だ。力にものを言わせて、敵をねじ伏せる。野卑で野蛮、原始的なスタイルさ。その欠点を補うために、君は戦い方を工夫した。自身とのコンビネーションで戦術を複雑化したんだ。——でも」

フェリクスが腕を振る。その動きに呼応して、エリザが水の槍を飛ばした。

立て続けに、四発。それらはすべて、夜々ではなく、雷真を狙っていた。とつさに身を伏せ、ひねり、飛び退いてかわす雷真。

だが、四発目がかわせない。雷真のわきばらを槍が切り裂く。雷真はたまらず膝をつき、あふれ出る血を押さえつけた。

「ほらね、動きが鈍っている。今の君には、あんな戦い方は無理だ」

「雷真」

夜々が半狂乱で雷真に駆け寄る。雷真はそれを押しのけ、

「よそ見をするな。光焰二一四衝！」

再び、魔力を送り込む。夜々はつらそうだったが、ただちに攻撃行動に移った。

再びエリザに迫り、殴り、蹴り、叩きつける。

すさまじい連打。水しぶきが飛び散り、霧が生じる。だが、夜々の攻撃は意味をなさない。しぶきはすぐに寄り集まり、エリザの輪郭を作り出す。

「センスがないね」

フェリクスは嘲笑し、またも、雷真目がけて水流を放った。

が、今度は読めている。夜々が素早く射線を封じ、水の槍を握りつぶした。

「雷真には、手出しさせません」

フェリクスは舌打ちした。彼は聡明なので、今の一射で理解したようだ。

この攻撃は、もはや無効だ。

水の槍は、どうしても直線的な軌跡を描く。夜々が立ちふさがれば、雷真に当てることは難しい。夜々の動きはエリザより数段速いし、その強度は鋼を超える。

こう着状態。お互いに決め手を欠いた、嫌な状況だ。

だが、にらみ合いを嫌ったのは、意外にもフェリクスの方だった。

「なら、こういうのはどうだい？」

新たな攻撃を警戒し、身構える夜々の後ろで、不意に雷真が引っくり返った。

文字通り、上下が逆転する。

そのまま、雷真は勢いよく引つ張り上げられた。

青白く光る何か——鎖のようなものに、足首をつかまれている。ぐうんっと大きく振り回され、飛んで行く先には、枝ぶりも見事な、大樹があった。

「雷真！」「ライシン！」

夜々とシャルの悲鳴が交錯する。

雷真は幹に叩きつけられ、血の塊を吐いた。

中央講堂の屋根の上に、彼はいた。

地上を睥睨<sup>へいげい</sup>するかのように、銀の仮面が眼下をにらむ。

もつとも魔王<sup>ワイルドマン</sup>に近い男、マグナス。彼のまわりには、花のような乙女<sup>おとめ</sup>たちがいた。足をぶらぶらさせたり、星を数えたりしながら、それぞれに夜を楽しんでいる。

ふと、乙女たちの顔から一斉に笑顔が消えた。

同じ方向を向き、耳をそばだてる。異変に気付いた猫のようだ。

彼女たちの視線を浴びながら、ふわり、と誰かが屋根に舞い降りた。

「君も見物かね、マグナス。いい身分だな」

それは、白衣をまとった長身の女——キンバリーだ。

「ま、そういう私もいい身分だがね」

にやりとする。乙女たちの敵意にも、まったく気おくれしたところがない。

一体、どこから現れたのか。空を飛んできたような出現の仕方だったが……？

警戒する乙女たちをよそに、キンバリーは屋根の上を歩き回った。どうやら、見物に適したポイントを探しているようだ。やがて満足のいく場所を見つけたのか、給水塔の手前に陣取って、ふところから眼鏡<sup>めがね</sup>を取り出した。

戦いが繰り広げられているのは木立<sup>こたて</sup>ちの中だ。見通しは悪く、何より暗い。正直、眼鏡をかけたくらいで見えるはずもないのだが……。

「ふむ、風紀委員が五、六……八人いるな。包囲しているようだが、距離がありすぎる。あれでは、戦闘の状況もわかるまい」

正確に状況を言い当てる。驚いたことに、見えているらしい。

「（下から二番目）は死にかけだな。このにらみ合いで、さらに体力を——おや」

木立ちの中で青白い光が生じた。魔術回路の起動反応だ。

「フェリクスが先に動いたな。包囲している以上、長くなるほど有利なはずだが？」

そう言つてマグナスを振り返る。教え子の意見を聞くような態度だ。

マグナスはキンパリーの視線をかわし、きびすを返した。

「おいしい、逃げることはないだろう。最後まで見ていくといい」

「その必要はありません。もう決着はつきました」

「——なに？」

キンパリーが木立ちを見やる。剣戟けんげきの音はまだ続いている。戦いはむしろ、激しさを増

しているようだ。——これで、決着はついただと？

マグナスはぼつりと、独り言のようにつぶやいた。

「タネが割れた手品は、ただのお遊戯です」

「……どういう意味だね？」

「手がかりを与えすぎたんですよ。あいつに」



キンバリーの目が鋭くなる。心の底を透かし見るような目つきだ。

マグナスはそのまま立ち去ろうとして、ふと足を止めた。

「ひとつ、忠告を」

肩越しに振り向く。仮面の奥で、紅い瞳が妖しく光った。

「手がかりを与えすぎれば、遠からず余人の知るところとなる。貴女の捜査に差し支えま  
すよ、キンバリー先生」

「……氣に留めておこう」

では、と言いついて立ち去るマグナス。乙女たちが立ち上がり、ついていく。その中の  
ひとりに舌を出され、キンバリーは苦笑した。

「そういう君もだよ、マグナス」

眼下の戦いに向き直る。そちらでは、いよいよ決着がつこうとしていた。

## 4

樹上の雷真が吐血するのを見て、シャルは弾かれたように立ち上がった。

腰を抜かしている場合ではない。シグムントを抱いて、大樹の根元に駆け寄る。

雷真は二階の高さから落ちてきた。くるりと反転し、足から着地する。

「……バカ野郎。近寄るな」

シャルは目を見張った。さすが、『武術の覚えがある』と自分で言うだけのことはある。死んでもおかしくない衝撃だったが、彼は無事——表面上は——だ。こんなボロボロの体でも、受け身を取って、衝撃を殺したらしい。

ほっとしたのもつかの間、シャルの背後で悲鳴があがった。

見ると、今度は夜々が宙吊りにされていた。

やはり、足に鎖状のものが巻きついていて。おそらくそれは、魔力で構築された、魔術の鎖だ。この魔術にも見覚えがある。あの〈鉄球使い〉が使っていたものだ。

にわかには信じられない。〈魔術喰い〉は、複数の魔術を使えるのか！

エリザが剣を振ると、夜々はなす術もなく、地面に叩きつけられた。

鈍い衝撃。石畳の小道の上で、夜々の体がゴムまりのように跳ねる。

夜々の背中がぱっくりと割れ、鮮血がほとばしった。今ついた傷ではなく、ふさがっていた傷痕が開いたような感じだった。ここまで無傷を貫いてきた夜々だが、その鉄壁の防御力も、このときばかりは発揮されなかったようだ。

そのことで、シャルはふたつのことを理解した。ひとつは、夜々の防御力が、ボディの強度によるものではなく、魔術によるものだということ。そしてもうひとつは、とっさに魔術を起動できないほど、雷真の状態が悪いということだ。

フエリクスも理解したのだろう。にやりと嫌な感じに笑みこぼれ、再びエリザを操作する。夜々はまたもや吊り上げられてしまった。

夜々は手足をばたつかせ、何とか鎖を振りほどこうとするが――駄目だ。

宙吊りにされているので、踏ん張りがきかない。

ひやり、と冷たい恐怖に、首筋を舐められたような気がする。

ひどく寒い。シャルはシグムントを抱きしめ、絶望に震えた。

夜々を助けようにも、シグムントは重傷……。それに、シャル自身の動揺が致命的だ。

こんな乱れた精神状態では、魔力を集中できない。

何より、敵の能力が、強大すぎる。

機巧魔術の常識を超えた、複数魔術の同時使用。ルネサンス期に作られたアンティークドールが、数百年の時を経て、今なお現役でいられる秘密がこれだ。

守つては「液状化」で夜々の剛力を流し、攻めては「鎖」で夜々の速力を封じる。

このふたつの魔術に加え、（魔術喰い）は、あまたの自動人形を喰ってきた。

犠牲者の数は、わかつていくだけで二十体以上。それらがすべてエリザのものになったのなら、これはもう軍隊を相手にするようなものだ。

このままでは、なぶり殺しにされる！

「心配するな。すぐに終わらせてやる」

驚いて顔を上げると、雷真らいしんが立ち上がるところだった。全身から血を流し、傷だらけになつてなお、その眼光は鋭い。闘争心が失せていない。

「もうやめて！ もう、私に構わないで！」

気がつくとき、シャルは叫んでいた。

何事だ、というふうには振り向く雷真。シャルはほとんど泣き声で、

「貴方あなたが、死んじゃう……！」

必死の訴えはしかし、彼には届かなかった。

雷真は「ふん」と鼻であしらひ、フェリクスの方へ歩き出そうとする。

「やめてよー 夜会に出たいんでしよう？ 私の側についたら、執行部に——」

「おまえはカニバルヤンデイ（魔術喰い）じゃない。おまえを助けて何が悪い」

「でも、証明できないのよー きっと、貴方も共犯にされるわー 学院だけじゃない。国も、魔術師協会も、みんな……この世のすべてが敵になるのよー」

「ごちゃごちゃ言うな。そのときは」

そして、雷真は言ったのだ。

「世界を敵に回してやる」

気負いもなく、自然体で。

しかし、揺るぎない覚悟を秘めて。

どうして、そんな風に——彼は笑っていられるのだろうか？

「どうして……？ どうして……私なんかのために……？」

雷真はもう答えなかった。ただ、フェリクスの方へと踏み出していく。夜々が吊られたままなのに、少しもためらわない。

言葉通り、その身ひとつで、強大な敵に向かっていく。

フェリクスは感じ入ったようにうなずいた。

「まだ向かってくるとはね。やはり、君は僕が見込んだ通りの男だよ」

両手を広げ、きりつと真剣な顔をして、熱っぽく言う。

「取り引きしないか、ライシン。君が僕の仲間として、ともに夜会を戦ってくれるなら、今回の敵対行動には目をつむろう。シャルの安全も保証する。もちろん、最初の約束通り、参加資格を得られるようにも——」

「断る」

「……やっぱり君は即断即決の人だね。でも、今回ばかりは、もう少し冷静に考えた方がいいと思うよ？」

「おまえの手下になるなんざ、おふくろに頼まれたって嫌だね」

「……母上は大切にしないではいけないな」

「あいにく、とっくに土の下さ」

「それはお気の毒に。だけど、今からでも遅くはない」

フエリクスはとびきりの笑顔を向け、言った。

「さようなら、ライシン——母上によろしく——」

エリザが剣を振りかぶる。魔力の鎖がその動きに追従し、夜々は天高く放り上げられた。夜々の血があたりに飛び散り、エリザの顔にも降りかかったが、エリザはかまわず、剣を振り下ろした。

狙いは雷真だ。夜々が文字通りの凶器となり、雷真に叩きつけられる。

「——!?」

刹那、こつ然と、夜々の姿が消えた。

シャルの目には影も映らない。一瞬後、エリザの目前に出現した夜々を見て、雷真が何をしたのか、かろうじて想像できた。

驚くべき敏捷性を発揮して、雷真は身をかわした。のみならず、同時に夜々を操作した。夜々が激突する瞬間の、地に足が着いた一瞬に、脚力で鎖を振り切ったのだ。

「天鷲四八衝」

雷真の右腕から、膨大な魔力が送り込まれる。夜々は全身に魔力をみなぎらせ、猛烈な蹴りをエリザに見舞った。夜々の細い足が、巨大な質量を感じさせるほどに、すさまじい圧迫感を放つ。

エリザは魔力の鎖を引き戻し、幾重にも張り巡らせ、蹴りを防いだ。

鎖のバリア。しかし、夜々の蹴りは重かった。くもの巣を裂くかのように、やすやすと鎖の防護を貫き、エリザのボディに到達する。

エリザはかわした。ただし、わずかにかすったようだ。ばきんっ、と鎧にヒビが入り、装甲の一部が欠け落ちる。

その光景を見て、シャルはきょとん、とした。

どうして、フェリクスはエリザを『液状化』させなかったのだろうか？

「ま、考えてみりゃ当然のことだな」

シャルの疑問に答える形で、雷真が静かに言った。

「〈魔活性不協和の原理〉とやらが解消されたって話は、聞いたことがない」

複数魔術の同時使用は、これまで数多くの魔術師たちが挑戦してきて、いまだ解決を見ない、原理中の原理だ。

「敵の魔術回路を自分のものにする——そんな便利な魔術が、大昔に実用化されていたんなら、今頃は量産されて、列強の主力兵器になってるはずだぜ。だが、現実はそうならない。つまり、見た目ほど便利じゃないってことさ」

当然、デメリットがある。

厳しい使用条件か。莫大なコストか。それとも何か代償が……？

「俺の口から言ってやろうか？ 費用対効果だよ」

言われてようやく、シャルにもエリザの欠点があった。

「要するに、使い捨てなのさ。一度捨てた回路は再装填できない。使用回数にも限度がある。だからこそ、大量の魔術回路をかき集める必要があったんだろ」

……道理だ。取り込んだ回路を無制限に利用できるなら、無闇にため込む必要はない。犯行が露見する危険を冒して、深夜の殺戮を繰り返す必要も。

唾棄するような口調で、雷真は言った。

「夜会に備え、喰うだけ喰って力を蓄える。その罪をシャルになすりつけ、〈魔術喰い〉として消えてもらう——あさましいぜ、フェリクス」

しばらくのあいだ、フェリクスは何も言わなかった。

それから、ふっと微笑み、かぶりを振った。

「……見事だよ、ライシン。相手の特性を瞬時に見抜く、その眼力。そして洞察力。驚嘆すべき才能だけど、さっきの誘いは取り消すよ。——君は危険すぎる」

瞳が冷酷な光を放つ。

フェリクスの眉間に魔力の火花が散った。表情に先ほどまでの慢心がない。全力で叩きつぶすべき相手だと、本気で理解したようだ。

そして、戦いが再開される。

エリザと夜々、両者が同時に地を蹴った。

高速でぶつかり、そのまま格闘戦へともつれ込む。

夜々の強烈な蹴りを、エリザは剣で受け止める。その瞬間、エリザの前に壁が生じた。

鋼鉄の輝きを放つそれは、防御に特化した魔術のようだ。夜々は視界をさえぎられ、さらには攻撃も防がれて、ごく短い時間、動きが止まった。

フェリクスは躊躇しない。一回の使用でその魔術を捨て、切り替える。

壁に阻まれ、着地する夜々の足もとは、綿のようにやわらかかった。

ブーツが沈む。トラップ系の魔術だ。夜々は足を取られ、バランスを崩した。

先の壁が砕け散り、エリザの口から、強烈な閃光が生じた。

目くらまし。雷真も、そしてシャルも、一時的に視力を奪われてしまう。

そして、視力が戻ったときには。

夜々の体は、先ほどと同じように、宙吊りにされていた。

先ほどと違うのは、夜々を拘束しているものが白い「霧」だということ。

漂白したように白い気体が、夜々にまとわりつき、宙に浮かせている。

エリザの姿はどこにもない。察するに、白い霧の正体は——エリザ自身！

夜々はもがき、暴れたが、拘束はゆるまなかった。

夜々の着物がもろもろと崩れ、美しい肌が赤くただれていく。

腐食している。ただの霧ではない。あれは気化<sup>カ</sup>した魔法薬<sup>マジックヤード</sup>、溶解液だ。

攻撃能力を持った流体。夜々の弱点を突く、攻防一体の魔術だ。

敵はいくつもの段取りを踏んで、詰め将棋のように、夜々を追いつ込んだのだ。

苦痛が襲うのか、夜々は苦悶<sup>くもん</sup>の表情で、しきりに身をよじっている。

「勝因は数だよ。この戦いが始まったとき、リズは四七の魔術を操ることができた。対して、君の魔術はたったのひとつ。そしてそれは、極めて原始的だった」

フェリクスは勝利を確信した様子で、うっとりとなしげに語る。

「君の魔術は確かに素晴らしい。全身を最高硬度の物質と化すことができる。炎も、刃<sup>やいば</sup>も、君の自動人形<sup>オートマタ</sup>を傷つけることはできない。だけど——所詮<sup>しよせん</sup>は、物質だ」

原子レベルで見れば、崩壊させる手段はある。

その証拠に、夜々の肌はどんどん食い破られていく。

「これが〈白い幻霧<sup>ホワイトミスト</sup>〉さ。マグナスとやるための、とっておきだったんだけだな」  
たつぷりの猛毒を含んだ、悪意のかたまりのような微笑。

「この損は、君の魔術で埋め合わせるよ、ライシン。君の人形を食べて、ね」

夜々が悶え<sup>もた</sup>、悲鳴をあげる。シャルは全身、総毛立<sup>もみだ</sup>った。

シャルにはどうすることもできない。ただ震えていることしか……。

「夜々」

ひどく落ち着き払った声で、雷真は静かに呼びかけた。

「そいつを、ぶっ飛ばせ」

何を言っているの、と驚くシャルの目の前で、夜々が腕を引き――  
思いきり、白い霧を殴りつけた。

冷笑するフェリクス。その表情が、一秒後、あつさりと砕け散った。

どうんつ、と鈍い音が響き、エリザが吹っ飛ばされる。

地面に叩きつけられ、激しく跳ねる。たわみ方が大げさだ。察するに、それは気体でも液体でもない。もっと硬い、コロイド的な粘りがある。その上、表面に膜でも張っているのか、しずくが飛び散ったりもしなかった。

シャルも、フェリクスも、そして当のエリザも、自分の目を疑った。

「よう、エリザ。おまえの鎧は、どこにいつちまったんだ？」

雷真の言葉に、フェリクスが瞠目する。

鎧も、剣も、消えている。本体と一緒に、霧に変化したからだろう。

それはつまり、身につけているものを、取り込んでしまうということ。

秀才のフェリクスは、それだけで状況を理解したようだ。

「君の……自動人形の……体液……か!?」

「こ名答。手品のタネは夜々の血だ」

超硬にまで強度を高める夜々。その特質は、血液にまで溶け込んでいるらしい。

その血をエリザは取り込んでしまった。「霧」という自分の領域内に。

「ふたつの魔術はひとつの体に共存できない——機巧物理学の基礎だぜ」

魔術の活性は協和せず——ふたつの魔術は互いに干渉し合い、十分な効果を発揮できない。ゆえに、もはやエリザは完全な流体足り得ない。

シャルは信じられない思いで、雷真の背中を凝視した。

この現象は、決して偶然ではない。雷真は狙ってそれをやったのだ。だから、最初から最後まで、あんなにも落ち着いていられた。

では、先ほど、夜々の傷口が開いたのは。

地面に叩きつけられたあのとき、夜々がダメージを受けたのは。

このための、伏線？

ぞくり、とシャルの背中に震えた。

「夜々の魔術回路は単純だ。俺には才能も、おまえらみたいな知恵もない……が」  
すつと雷真は腕を伸ばす。

「俺の相棒は、世界最高の自動人形だ」

ありったけの魔力を注ぎ込む。夜々の体から燐光が生じ、オーロラのごとく輝いた。そして、夜々が突き進む。

まさに電光。夜々は衝撃波を生み出しながら、敵のふところに飛び込んだ。

エリザの動きは鈍い。気体とも液体ともつかないボディを統制できず、持て余している。このまま無理にでも制御するか、あきらめて別の魔術回路に切り替えるか、フェリクスにはふたつの選択肢があり、迷ったばかりにゼロになった。

「天嶮絶衝——」

雷真の命を受け、夜々はそつと添えるように、敵の体にこぶしを当てた。

「（破却水月）」

ずどんつ、と爆音が響き渡り、エリザのボディが波打った。

夜々の筋肉という筋肉が爆発的に硬化し、追撃砲のような威力をもつて、こぶしを敵にねじ込んだのだ。それは恐るべきインパクトとなつて、敵の体内で炸裂した。

破壊力はエリザの全身に行き渡り、表面の膜を突き破った。

白い霧が水滴となり、八方に飛び散る。それはもう、ただのしずくだ。寄り集まることも、実体化もしない。この瞬間、エリザは地を濡らす染みと化した。

錯覚、だろうか。最期の瞬間、かすかに、エリザが微笑んだように見えた。

雷真は大きく息をつき、ゆっくりとフェリクスを振り返った。

「……さて」

鷹の目を思わせる眼光が、フェリクスをとらえる。フェリクスははつきりとうろたえ、

彼らしからぬ狼狽をのぞかせた。

「な……何をするつもりだい？」

声が上がらず、頬が引きつる。それはまぎれもない——恐怖の顔だ。

「僕はキングスフォートの嫡男だ。僕に狼藉を働けば、王室が黙っちゃいないよ？」

雷真は応えもせず、無言のまま、フェリクスに向かって歩き出す。

「——待つんだ。状況がわかっていないようだね。僕をどうにかしたところで、シャルの容疑が晴れるわけじゃない。今からでも、取り引きしようじゃないか。僕は君たちが無実だと証言する。僕の証言さえあれば」

雷真は応えない。あからさまに無視して、ずんずんと歩き続ける。

「待て。待つんだ……。待てと言ってるだろう！」

抑制できず、フェリクスは半狂乱で拳銃を抜いた。

だが、彼が引き金を引くより早く、雷真は距離を詰めている。拳銃を蹴飛ばし、襟首をつかみ上げ、フェリクスの体を引き起こした。

そして、渾身の力で、鉄拳を叩き込んだ。

鼻骨が碎けるほどの一撃。フェリクスはもんどり打って転がり、大樹に激突して、ぐったりとした。どうやら、気絶したらしい。

それを見届けると、雷真は苦しげな顔を夜々に向けた。

「……ごめんな、夜々」

「どうして謝るんですか？」

「痛かったろ。あんなに血を流させて……おまえに傷を負わせて、俺は……」

「そんなもの、すぐに修復できますー 本当の意味で、夜々が傷つくことはありません。傷つくのはいつも、雷真の方です……。あのときだって——」

言葉の途中で、雷真は夜々を抱き寄せ、自分の胸に押しつけた。

「……ありがとよ」

ぼーっと一瞬でのぼせ上がる夜々を放し、今度はこちらに向き直る。

シャルはぎくりとした。思わず、シグムントを抱く手に力がこもる。

もし、雷真にその気があれば、今のシャルなど、簡単に討ち取られてしまう。

だが、雷真の第一声は――

「悪かったな、シャル」

「え……」

いたずら小僧のような目をして、雷真は笑った。

「天下の（暴竜）さまを差し置いて、おまえのぶんまで殴っちゃった」

自分でもわかるほど、シャルの表情はくしゃくしゃになった。

緊張が一気にゆるんで、濁流のように、熱い感情が込み上げる。

今なら、わかる。本当に信じるべきが、誰なのか。

シャルのために、こんなに血だらけになって、戦ってくれる者。

シャルを信じてくれる者。

何も言えない。次から次から、想いがとめどなくあふれ出てくる。

このまま雷真にしがみついて、泣きじゃくりたいと思ったが、そんな気持ちを知ってか知らずか、雷真はからかうように、

「ほら、立てよ、恐竜娘。腰でも抜けたのか？」

「た……っ、立つわよ、無礼者！ 立つけど……」

まともに雷真が見られない。シャルは上目づかいになって、ぼつりと、

「手……くらい、貸したらどうなの？」

ふっと微笑み、雷真は手を差し伸べてくれる。

シャルはその手を見つめたまま、十秒近くもためらっていた。

血だらけの、傷だらけの、無骨で、野蛮で、でもあたたかそうな、てのひら。

やがて、おずおずと手を伸ばす。

その手を強引に握りしめ、雷真はシャルを引き上げた。





# Epilogue

## 極東の人形使い#2



「ライシン・アカバネ、前へ」

寒々しい講堂に、学院長の声は朗々と響き渡った。

学院長を間近で見るのは初めてだ。何となく枯れた老人をイメージしていたが、実際は口ひげの上品な、筋骨たくましい偉丈夫だった。

「我エドワード・ラザフォードの名において、貴殿を〈魔王〉候補と認め、〈ヴァルブルギスの夕べ〉への参加を許可する」

銀のトレイに載せられて、きらびやかな手袋が運ばれてくる。

金糸の縫い取りが美しい。生地は上等なシルクで、つややかな光沢を放っている。利き腕をギプスで固定されている雷真に代わり、夜々が受け取る。

学院長は声を潜め、親しげな口調でささやいた。

「たった今から、君も暗れて〈手袋持ち〉だ。学生諸君の模範となるような、素晴らしい人形使いとなってくれ」

授与式はあっさりしたもので、それで終わりだった。

学院長以下、数名の教授に見送られ、講堂を後にする。

照明のついた廊下を抜け、エントランスに入ったところで、ぎよっとした。

間もなく日没だというのに、外に人だかりができています。

学生たちが集まっているのだ。どうやら、雷真らいしんが出てくるのを待っているらしい。一部にやつかみや嫌悪も交じっていたが、大部分の表情は好意的だった。彼らの多くは、今日の雷真と同様、わざわざ礼服コウイを着込んでいます。

自分を祝福しているのだと、数秒経って理解する。

「……何でこんなに盛大なんだ？」

「学院長が根回ししたんだよ」

不意の声。見ると、ロビーの椅子いすに、キンバリーが腰掛けていた。

「君の生命力はブラナリアなみだな。昨日『退院』したそうだが——」

皮肉げに笑う。彼女の視線は雷真の体を這い回り、肩から吊られた右腕、左脇に抱えた松葉杖まつばづえ、包帯が巻かれた首……と移動した。

「そんなスタボロのなりで、よくも出歩けるものだ。まだまだ重傷じゃないか」

「いつもより傷の治りが遅くてね」

「もうトシなんじゃないのか？」

「妙に実感がこもってるぜ、先生。で、学院長が何だって？」

「風紀委主幹があんなことをしでかしたんだ。学院の内外に疑念や疑惑が渦巻いている。」

君を英雄にでも祭り上げて、話題の矛先をそらしたいのさ」

それが本当なら、あの学院長はかなりの狸だ。

キンバリーは雷真の手袋——刺繍とぎゅうされた文字に目を留め、にやりとした。

「似合っているぞ。これで公式に（下から二番目）というわけだ」

「……このクソツタレな登録コードは、誰が申請したんだ？」

「無論、私だ」

雷真は閉口した。キンバリーはにやにやとして、

「そう腐るな。私の目撃証言と機巧鑑定があればこそ、君たちは潔白を証明できたのだから。言わば、私は君の恩人だぞ？」

雷真はますます閉口した。妙な人間に借りを作ってしまった。

「そら、観客が待っている。さらしもの——もとい道化どけになつてやれ、英雄くん」

「言い換えた意味がないぞ」

雷真は嘆息し、出て行こうとして、立ち止まった。

「ひとつ、ご教授願いたいんだがな、キンバリー先生」

「言ってみろ」

「あんたは学力試験の試験官だった。俺に学がないことは、よくご存知だったはずだぜ。なのに、俺が魔王ワイルドマンになると言ったとき、笑わなかったのはどうしてだ？」

「簡単なことさ。私も昔は学がなかった」

おや、と思う。抑制の効いたキンバリーの声に、いつになく感傷的な響きがある。

「人は理由を得て学ぶ。そして、君にも理由があった。それだけだ」

何と言っているかわからず、雷真は軽く頭を下げ、その場を辞去した。

夕闇の中に出た途端、盛大な拍手が浴びせられた。

ガラにもなくまごついてしまう。見下されるのは慣れっこだが、祝福されるのは慣れていない。いつそ、罵倒された方が気楽なのだが。

どう対応したものか思案していると、ふっと拍手がやみ、人だかりが割れた。

ピクつく学生たちには目もくれず、ずかずかとのし歩いてきたのは、帽子にドラゴンを

乗せた金髪碧眼の美少女——シャルだった。

礼装の学生たちに対抗するかのように、普段通りの常装だ。

夜々があらさまに警戒の色を見せ、べつたりと雷真にくつつく。

シャルは胸をそらし、見下すような目をした。

「夜会も安くなったものね。貴方が（手袋持ち）なんて、世も末だわ」

憎まれ口を叩く。それから、急に挙動不審になり、鼻のつけ根を赤らめ、視線をあっち

こっちさまよわせて、かなりためらってから、ぐいっと右手を突き出した。

金のリボンがかけられた、小さな箱を持っている。

「……何だ？」

「バカなの？ お祝いに決まってるじゃない。一応、その、なりゆきとは言え、貴方に助けられた側面も、客観的に見れば、なきにしもあらずだから……」

小箱を受け取り、リボンを解く。

中には、銀のペンダントが収められていた。

「護符……だな。呪式は見たことないが、ルーンが彫つてある」

「防御印よ。貴方の野蛮な戦い方にはお似合いでしょう」

「受け取ってくれ、雷真。シャルは知恵熱が出るほど考えて決めたのだ」

「ただ黙りなさいシグムント！ 明日からパンくず食べさせるわよー」

かーつと耳まで赤くなる。シャルは憤然として、腕組みした。

「他意はないわ。ジャバンで言うところの、『敵にCOを送る』ってやつよ」

「それだと信玄死ぬからな？ ただのガス攻撃だからかな？」

とは言え、趣味は悪くない。ありがたく頂戴しておく。

札を言うと、シャルは「ふんー」とそっぽを向いた。

それから、厳しい目つきで振り向いた。

「わかつてると思うけど、夜会の戦場で向き合ったら――」

「敵同士、だろ」

「そういうことよ。私も、シグメントも、全力でお相手するわ」

「俺は手加減しちまうかもな」

「なっ、こっ、何を、バカな、こと……」

「夜々は手加減しません」

にっこりと、しかし能面のような微笑を浮かべ、夜々が割り込む。

「夜々は手加減しません」

二回言った。大事なことらしい。

だが、夜々の言う通りだ。手加減している余裕はないし、簡単に降りてしまえるほど、夜会の勝負は軽くない。お互いに、ゆずれない目的がある。

もちろん、それはシャルだけではない。参加者全員に、叶えるべき夢と、戦う「理由」があるのだろう。

それを賭けて、戦うしかない。

雷真は天を振り仰ぎ、急速に青ざめる空をにらんだ。

かくて、夜会の幕は上がる。



## あとがき

こんにちは、海冬レイジです。

MF文庫Jでは初めての本となります。どうか、よろしくお願いしますね！

さて、カバーの和ゴス娘を見て、思わず手に取っちゃったその貴方！

この絵にときめいた時点で僕らはブラザーさ。貴方とは美味しい酒が飲めそや波長が合うと思うので、立ち読み中なら買ってください♡

このお話は、いわゆる『魔法学園モノ』です。舞台は人形使いが幅を利かせる二十世紀初頭。人形使いの卯たちが、夜の学園で熾烈なゼロサムゲームを繰り広げる……という、作者の趣味がモロに反映されたシリーズ（——の予定）です。

前世紀なのに、登場人物たちはなぜか現代語をしゃべります。仕様です。『現代日本語訳／海冬レイジ』ということで、ご理解くださいね。

なお、カバーの子はヤンデレ……のつもりが、気がつけば『ヤラレ』な感じに。ヤラレ女子がお好きな方は要チェック！

今回、素敵なイラストをつけてくださったのは、るろおさんです。

正直、絵だけでもお値段に釣り合うよね。夜々もシャルも可愛いよね。かく言う作者も目次のSD絵で萌え死ぬところでした。

お忙しい中、作者の無茶振りに神的な精度で応えてくれたるろおさん。でも、それだけじゃないんだ……。実は、雷真の軍用フレームとか、硝子さんの眼帯メガネとか、シャルの服装モチーフ鷹匠とか、全部るろおさんのアイデアなんです。

「そのアイデアいただきー いただきますー」

素敵アイデアをもらうたび、ソッコーで本文に取り入れる作者。

こんなに密に、絵描きさんとやりとりしたのは初めてです。おかげさまで、平板だった作品世界に奥行きが生まれ、どんどん華やいでいきました。ビジュアル的に成功している部分は全部るろおさんのおかげなんだからねっ、作者は感謝しなさいよねっ。

また、ビジュアルだけでなく、この作品にはサウンドもあります。

何と、イメージCDを作ってもらえることになりました！

作曲は「SPiCa」のとくPさん。はつきり言って、超カッコイイです。このあとがきを書いている現在、まだ歌詞がついてないのですが、既に作者はエンドレスで聴きまくっています。完成版が待ち遠しいよう。

そして、担当の庄司さんには大変お世話になりました。なってます！  
最初の打ち合わせで、

「少年誌っぽいのがやりたいんですけど……」（おずおず）

「いいですよー 僕もジャ○ブは大好きですー」

と二つ返事でOKをいただけるときは、思わず小躍りしちゃいました。

あの瞬間がなければ、この作品は生まれませんでした。「世に出なかった」ではなく、この世に発生しなかったよ！

ほかにも、たくさんの方に支えられて、「機巧少女」は始まりました。これからどんなふうに広がっていくのか、作者もわくわくしています。でも、本当に「広がって」いけるかどうかは、今このあとがきを読んでいる、貴方次第だったりします。

貴方が支えてくれたら、きつと、もっと、頑張れます。だから――

また次回、機巧少女2でお会いできますように！

2009年10月

海冬レイジ

こんにちは、絵の人です。  
そんな訳で機巧少女で御座います。  
海冬センセの素敵ワールド開幕なのですよ。  
なんだか自分も素敵に格好良くなるよう  
ひらひらとかふりふりとか頑張りますので  
宜しくしてやって下さいませ。

それでは2巻でまた会えたら幸いです。



MF文庫J



マシンドール  
**機巧少女は傷つかない1**  
Facing "Cannibal Candy"

発行	2009年11月30日 初版第一刷発行
著者	海冬レイジ
発行人	三坂泰二
発行所	株式会社 メディアファクトリー 〒104-0061 東京都中央区銀座8-4-17
印刷・製本	株式会社廣済堂

©2009 Reiji Kano  
Printed in Japan ISBN 978-4-8401-3085-1 C0193

※本書の内容を無断で複製・複写・放送・データ配信などを行うことは、固くお断りいたします。

※定価はカバーに表示しております。

※乱丁本・落丁本はお取替いたします。下記カスタマーサポートセンターまでご連絡ください。

※その他、本書に関するお問い合わせも下記までお願いいたします。

メディアファクトリー カスタマーサポートセンター

電話:0570-002-001

受付時間:10:00～18:00(土日、祝日除く)

**【ファンレター、作品のご感想をお待ちしています】**

あて先:〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5 NBF渋谷イースト 株式会社メディアファクトリー

MF文庫J編集部宛付 「海冬レイジ先生」係 「あるお先生」係



左記より本書に  
関するアンケートに  
ご協力ください。

★お答えいただいた方全員に、この書籍で使用している画像の無料持ち受けプレゼント! ★サイトにアクセスする際や、登録・メール送信時にかかる通信費はご負担ください。 ★中学生以下の方は、保護者の方の了解を得てから回答してください。